

田主丸古墳群Ⅲ

―益生田古墳群A群の調査―

令和6（2024）年3月
久留米市教育委員会

田主丸古墳群Ⅲ

－益生田古墳群A群の調査－

令和6（2024）年3月
久留米市教育委員会



(1) 益生田古墳群A群 12号墳奥壁を前室から望む（南西から）



(2) 益生田古墳群A群 12号墳裝飾



(1) 益生田古墳群A群12号墳填丘と閉塞石(南西から)



(2) 益生田古墳群第5次調査地(北東から)



(1) 益生田古墳群全景（北西上空から）



(2) 益生田古墳群A群古墳分布状況（東から）

序

久留米市は筑紫平野のほぼ中央に位置し、古来より交通の要衝として発展してきました。さらに耳納山地の緑と筑後川の水に象徴されるように、豊かな自然環境にも恵まれ、先人たちは多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である歴史遺産が至るところに存在しています。

本市では「水と緑の人間都市」を都市づくりの基本理念とした総合計画を策定し、その施策の一つにおける「四季と歴史が見えるまち」の中で、「魅力ある歴史資源の活用」を掲げています。そして、計画的かつ持続的な歴史文化のまちづくりに向けた、歴史遺産の保存・活用を推進するための指針として、令和3年度に「久留米市文化財保存活用地域計画」を策定し、久留米市の新たな魅力の創出につながる歴史文化のまちづくりを進めているところです。

本書で報告する益生田古墳群は、江戸時代からその存在が知られ、多くの古墳群が存在する耳納山地北麓にあって、最も規模の大きい古墳群です。調査地点は昭和55年度から翌56年度にかけて田主丸町教育委員会により発掘調査が行われたA群の範囲に含まれます。今回の調査による12号墳からは、奥壁に敲打による図文を施した装飾が確認されました。筑後川流域は装飾古墳が多く存在する地域ですが、敲打による装飾を施した古墳は極めて少なく、発掘調査で確認された例は久留米市内で初めてのことです。

本書の発行によって、益生田古墳群を含む田主丸古墳群の周知、さらには装飾古墳の研究の一助になるとともに、地域の歴史説明や歴史教育、文化財保護行政の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しましてご協力いただきました土地所有者の方々をはじめ、ご指導いただきました文化庁や福岡県などの関係機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和6年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は、令和2年度から令和5年度に久留米市市民文化部文化財保護課が、国・県の補助を受けて実施した、益生田古墳群第5次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の江島伸彦が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、江島、飛野博文、平川真保、長野晃久が行い、遺物実測図の作成は今村理恵、宮崎彩香、江口里織が行い、製図及びデジタルトレースは江島、西拓巳、小川原励、米澤美詠子、山元博子、湯川琴美、横井理絵が行った。
4. 本書に掲載した遺構写真は、江島がCanon EOS 6Dを使用して撮影した。全景写真は有限会社空中写真企画に委託した。また遺物写真は水原がPENTAX K-1 Mark IIを用いて撮影した。なお、本文中の遺物番号と、写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第II座標系(世界測地系)を基に作成し、図面方位は座標北を示す。なお、平成28年に発生した熊本地震に係るパラメータ補正は行っていない。
6. 本調査の略記号はMSV-005、調査番号は202105である。
7. 出土遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
 - ・口径(長)・底径(幅)・器高(厚)の単位はcmである。()内の数値は現存値を示す。
 - ・色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997年版)による。
 - ・胎土は0.5mm未満を微砂粒、1mm未満を細砂粒、2mm未満を粗砂粒、5mm未満を細礫、5mm以上を礫とした。
 - ・登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
(例) 202105 - 000001
 調査番号 登録番号
8. 本調査に関わる遺物・記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
9. 本書の執筆は、福岡県文化財保護課の助言を得て、章ごとに担当を割り振り執筆した。各章節の執筆者は本文目次に記している。編集は江島が担当した。

本文目次

第1章 はじめに	1
(1) はじめに	(白木) 1
(2) 調査に至る経緯	(江島・白木) 1
(3) 調査日誌(抄)	(江島) 2
(4) 調査の体制	(白木) 3
第2章 位置と環境	(白木) 6
(1) 地理的環境	6
(2) 歴史的環境	6
第3章 益生田古墳群について	13
(1) 田主丸古墳群の調査と指定の経緯	(江島) 13
(2) 益生田古墳群の分布調査について	(江島・白木) 15
(3) 益生田古墳群の発掘調査について	(白木) 16
(4) 益生田古墳群の古墳一覧	(廣木) 18
第4章 調査の記録	(江島) 26
(1) 調査の概要と経過	26
(2) 益生田古墳群A群の概要	26
(3) 南調査区の調査	27
(4) 12号墳の調査	27
(5) 15号墳の調査	46
(6) 16号墳の調査	48
(7) 17号墳の調査	52
(8) 147号墳の調査	52
(9) 148号墳の調査	53
(10) 各古墳の築造順について	72
(11) 土石流について	72
第5章 総括	(神保) 73
(1) 調査成果の概要	73
(2) 筑後川中流域における装飾古墳の変遷	79
(3) 12号墳の装飾について	80
(4) 益生田古墳群の特質	84
(5) 益生田古墳群の価値	87
(6) 今後にむけて	87

挿 図 目 次

第1図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/5,000)	5
第2図	調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	7
第3図	益生田古墳群益永支群地形図 (1/800)	折込み1
第4図	益生田古墳群A群(北東部)地形図 (1/600)	折込み2
第5図	益生田古墳実測図 (1/100)	13
第6図	益生田古墳群古墳分布図 (1/5,000)	14
第7図	浮羽工業高校考古学同好会発掘調査古墳石室実測図 (1/60)	17
第8図	益生田古墳群第5次調査地形図 (1/400)	折込み3
第9図	益生田古墳群第5次調査古墳及びトレンチ配置図 (1/150)	折込み4
第10図	調査前の石室埋没状況	29
第11図	12号墳1 トレンチ土層断面図 (1/30)	30
第12図	12号墳2 トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	32
第13図	12号墳3 トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	33
第14図	12号墳4 トレンチ土層断面図 (1/30)	34
第15図	12号墳4 トレンチ墳丘内列石実測図 (1/30)	35
第16図	12号墳石室実測図 (1/50)	折込み5
第17図	12号墳石室三次元画像(縮尺任意)	折込み6
第18図	12号墳・148号墳5・6 トレンチ土層断面図 (1/30)	37
第19図	12号墳7 トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	38
第20図	12号墳・147号墳8 トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	39
第21図	12号墳9 トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	40
第22図	装飾詳細実測図 (1/10)	41
第23図	装飾強調図 (1/20)	41
第24図	装飾ひかり拓本(縮尺任意)	42
第25図	12号墳墳丘断面図 (1/60)	折込み7
第26図	16号墳・17号墳10 トレンチ土層断面図 (1/30)	44
第27図	16号墳・17号墳10 トレンチ墳丘内列石実測図 (1/30)	45
第28図	16号墳11 トレンチ墳丘内列石実測図 (1/30)	46
第29図	16号墳閉塞石実測図 (1/30)	47
第30図	16号墳14 トレンチ墳丘内列石実測図 (1/30)	48
第31図	16号墳14 トレンチ北側土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)	49
第32図	16号墳石室展開画像(縮尺任意)	51
第33図	147号墳12 トレンチ土層断面図 (1/60)	53

第 34 図	147 号墳 12 トレンチ前底部列石実測図 (1/40)	54
第 35 図	12 号墳 13 トレンチ土層断面図 (1/30)	55
第 36 図	148 号墳墳丘内列石実測図 (1/40)	56
第 37 図	出土遺物実測図① (1/4)	57
第 38 図	出土遺物実測図② (1/4)	58
第 39 図	出土遺物実測図③ (1/4)	59
第 40 図	出土遺物実測図④ (1/2・1/4)	60
第 41 図	出土遺物実測図⑤ (1/1・1/2)	61
第 42 図	出土遺物実測図⑥ (1/2・1/4)	62
第 43 図	出土遺物実測図⑦ (1/2・1/4)	63
第 44 図	出土遺物実測図⑧ (1/4)	64
第 45 図	益生田古墳群 A 群の石室分類 (1/200)	77
第 46 図	益生田古墳群 A 群古墳分布と変遷図 (1/500)	78
第 47 図	築造模式図	81
第 48 図	装飾古墳編年図① (1/100)	折込み 8
第 49 図	装飾古墳編年図② (1/100)	折込み 9
第 50 図	装飾古墳編年図③ (1/100)	折込み 10
第 51 図	12 号墳の装飾実測 (縮尺任意)	83
第 52 図	日岡古墳奥壁の装飾 (1/100)	83
第 53 図	西館古墳奥壁の装飾 (1/50)	83
第 54 図	桂川王塚古墳奥壁の装飾 (1/60)	84
第 55 図	乗場古墳奥壁の装飾 (1/60)	84
第 56 図	田代太田古墳奥壁の装飾 (1/25)	84
第 57 図	装飾位置の共通例 (1/80)	85
第 58 図	敲打系装飾古墳の成立と展開 (1/100)	86

表 目 次

第 1 表	益生田古墳群 A 群・益永支群調査石室規模一覧①	19
第 2 表	益生田古墳群 A 群・益永支群調査石室規模一覧②	20
第 3 表	田主丸古墳群に係る発掘調査報告書	21
第 4 表	益生田古墳群古墳一覧表①	22
第 5 表	益生田古墳群古墳一覧表②	23
第 6 表	益生田古墳群古墳一覧表③	24
第 7 表	益生田古墳群古墳一覧表④	25

第8表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表①	65
第9表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表②	66
第10表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表③	67
第11表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表④	68
第12表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑤	69
第13表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑥	70
第14表	益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑦	71
第15表	益生田古墳群A群 円墳一覧表	76
第16表	蔽打系装飾古墳一覧	83

図 版 目 次

巻頭図版1

- (1) 益生田古墳群A群 12号墳奥壁
を前室から望む(南西から)

- (2) 益生田古墳群A群 12号墳装飾

巻頭図版2

- (1) 益生田古墳群A群 12号墳墳丘と閉塞石
(西から)
- (2) 益生田古墳群第5次調査地(北東から)

巻頭図版3

- (1) 益生田古墳群全景(北西上空から)
- (2) 益生田古墳群A群古墳分布状況(東から)

図版1

- (1) 益生田古墳群第5次調査地から西を望む
- (2) 益生田古墳群第5次調査地から東を望む

図版2

- (1) 調査地周辺の状況(南上空から)
- (2) 調査地周辺の状況(北上空から)

図版3

- (1) 益生田古墳群第5次調査地全景(東上空から)
- (2) 益生田古墳群第5次調査地全景(東上空から)

図版4

- (1) 益生田古墳群第5次調査地北側
(南東上空から)

- (2) 益生田古墳群第5次調査地南側

(東上空から)

図版5

- (1) 12号墳玄室から入り口を望む(北東から)
- (2) 羨門及び閉塞石の状況(北東から)

図版6

- (1) 12号墳玄室左側壁上部(南から)
- (2) 12号墳玄室右側壁上部(西から)
- (3) 12号墳玄室左側壁玄門側(南東から)
- (4) 12号墳玄室左側壁奥壁側(南西から)
- (5) 12号墳玄室床面検出状況(南西から)
- (6) 12号墳装飾品出土状況(西から)
- (7) 12号墳玄室床面玄門側検出状況

(北東から)

- (8) 12号墳玄室右側壁玄門側上部(南東から)

図版7

- (1) 12号墳玄室前壁(北東から)
- (2) 12号墳前室右側壁と玄門右袖石(北から)
- (3) 12号墳前室右側壁上部(北から)
- (4) 12号墳前室右側壁(北西から)
- (5) 12号墳前室遺物出土状況(南東から)
- (6) 12号墳前室左側壁上部(南東から)
- (7) 12号墳前室出土遺物(南東から)

図版 8

- (1) 12号墳前室右側壁積み上げ状況(北西から)
- (2) 12号墳玄門から開口方向を望む
(北東から)
- (3) 12号墳玄室左側壁玄門側(南東から)
- (4) 12号墳玄室左側壁奥壁側(南西から)

図版 9

- (1) 12号墳1トレンチ(北から)
- (2) 12号墳土層断面検出状況(北東から)
- (3) 12号墳墓道と土石流堆積土(西から)
- (4) 12号墳閉塞石(南西から)
- (5) 12号墳2トレンチ墳丘内列石検出状況
(南東から)

- (6) 12号墳2トレンチ墳丘内列石と
土層の状況(南から)
- (7) 12号墳2トレンチ拡張部土層堆積状況
(西から)
- (8) 12号墳2・7トレンチ墳丘内列石
検出状況(南東から)

図版 10

- (1) 12号墳3トレンチ墳丘内列石(東から)
- (2) 12号墳3トレンチ北側列石(北から)
- (3) 12号墳3トレンチ北側墳丘内列石(北東から)
- (4) 12号墳4トレンチ墳丘内列石(北西から)
- (5) 12号墳4・8トレンチ玄室床面検出状況
(南西から)
- (6) 12号墳4トレンチ土層堆積状況(南西から)
- (7) 12号墳4トレンチ土層堆積状況(北から)
- (8) 12号墳7トレンチ全景(南東から)

図版 11

- (1) 12号墳7トレンチ墳丘内列石検出状況
(南東から)
- (2) 12号墳7トレンチ土層堆積状況
(南東から)

- (3) 147号墳8トレンチ墳丘内列石を
上から見る(北から)
- (4) 147号墳8トレンチ墳丘内列石(南から)
- (5) 147号8トレンチ墳丘内列石下の盛土
(南西から)
- (6) 147号墳8トレンチ土層堆積状況
(南東から)

- (7) 12号墳8トレンチ榴石の堆積状況
(北西から)
- (8) 12号墳9トレンチ墳丘内列石検出状況
(南から)

図版 12

- (1) 12号墳9トレンチ墳丘内列石検出状況
(南から)
- (2) 16号墳閉塞石検出状況(北から)
- (3) 16号墳墓道(北から)
- (4) 16号墳墓道(北東から)
- (5) 16号墳墓道の残欠(西から)
- (6) 16号墳11トレンチ墳丘内列石検出状況
(南から)

- (7) 16号墳玄室床面検出状況(南西から)
- (8) 16号墳11トレンチ墳丘内列石検出状況
(南東から)

図版 13

- (1) 16号墳玄室床面玄門側検出状況(北東から)
- (2) 16号墳装飾品出土状況(西から)
- (3) 16号墳の榴石と墳丘内列石(南から)
- (4) 16号墳10トレンチ墳丘内列石(南から)
- (5) 16号墳10トレンチ土層堆積状況(南から)
- (6) 16号墳玄室奥壁(北から)
- (7) 16号墳玄室奥壁側床面(北から)
- (8) 16号墳玄室玄門側床面(南から)

図版 14

- (1) 16号墳羨道(南から)

(2) 17号墳 11 トレンチ右側壁上部 (西から)

(3) 17号墳土層堆積状況 (北西から)

(4) 17号墳 11 トレンチ開口部列石 (西から)

(5) 17号墳 10 トレンチ墳丘内列石 (北から)

(6) 17号墳石室検出状況 (東から)

(7) 17号墳石室検出状況 (北東から)

(8) 17号墳前室完掘状況 (東から)

図版 15

(1) 17号墳前室右側壁 (北東から)

(2) 17号墳奥壁から玄室右側壁 (北西から)

(3) 148号墳墳丘内列石 (南西から)

(4) 148号墳墳丘内列石東側 (南から)

(5) 148号墳玄室床面検出状況 (南西から)

(6) 148号墳墳丘内列石から開口部列石

(南西から)

(7) 148号墳 15 トレンチ閉塞石検出状況

(北東から)

(8) 148号墳前庭部検出状況 (北から)

図版 16

(1) 148号墳主体部 (西から)

(2) 148号墳玄室残欠検出状況 (北から)

(3) 148号墳玄室残欠検出状況 (東から)

(4) 148号墳玄室左側壁奥壁側 (南西から)

(5) 148号墳玄室奥壁破壊状況 (西から)

(6) 147号墳 12 トレンチから主体部 (南から)

(7) 147号墳 12 トレンチ列石 (南西から)

(8) 147号墳 12 トレンチ土層堆積状況

(南西から)

図版 17

(1) 147号墳 12 トレンチ前庭部 (南西から)

(2) 147号墳 12 トレンチ閉塞石検出状況

(南から)

(3) 12号墳 13 トレンチ土層堆積状況

(北西から)

(4) 益永9号墳敲打による装飾

(石山勲氏提供)

(5) 144号墳 (南西から)

(6) 149号墳 (北西から)

(7) 154号墳 (北東から)

(8) 151号墳 (北西から)

図版 18

(1) 150号墳 (東から)

(2) 145号墳 (東から)

(3) 13号墳 (南西から)

(4) 158号墳 (南東から)

(5) 14号墳 (西から)

(6) 160号墳 (西から)

(7) 159号墳 (西から)

(8) 18号墳 (西から)

図版 19 出土遺物①

図版 20 出土遺物②

図版 21 出土遺物③

図版 22 出土遺物④

図版 23 出土遺物⑤

図版 24 出土遺物⑥

図版 25 出土遺物⑦

図版 26 出土遺物⑧

第1章 はじめに

(1) はじめに

田主丸古墳群は、旧筑後国竹野郡の領域と一致する久留米市田主丸町に所在する耳納山地北麓(以下、耳納北麓)に築造された古墳群の総称である。この名称は、1980年代に田主丸町教育委員会によって当地の古墳群が発掘調査された際に命名されたものであるが、現在では国指定史跡の指定名称であるとともに、耳納北麓の田主丸町内に所在する群集墳に代表される300基弱の古墳と、その営まれた環境をも含む概念として使用されている。

本書は、田主丸古墳群の保存のきっかけとなった益生田古墳群A群における調査報告であり、田主丸町教育委員会により昭和59・60(1984・1985)年に刊行された『田主丸古墳群』(田主丸町文化財調査報告書第1・2集)に続くものと位置付け、『田主丸古墳群Ⅲ』として報告するものである。

(2) 調査に至る経緯

益生田古墳群は、久留米市田主丸町益生田一帯に展開するA～D群・益永支群からなる古墳群の総称で、今回の第5次調査区は田主丸町益生田757-1外のA群中に所在する。

調査に至る経緯は、令和2年12月18日、田主丸町石垣に所在する山王古墳群の調査中に担当者3名で益生田古墳群を訪れた際、同古墳群の範囲内で重機が地山を掘削しているところを発見したことが発端である。その場で業者に開発目的と範囲を確認したところ、採石を目的として益生田古墳群A群を含む約20,000㎡の範囲を対象とし、7年から8年の期間をかけて採石を行う計画とのことであった。採石の方法は地表から30mほど掘り下げた露天掘りであり、掘削作業を行っている西隣の林の中には、昭和55年(1980)12月から翌年4月の期間で福岡県教育委員会による発掘調査が行われた20基近くの古墳が存在していた。採石業者は樹木を伐採しながら順次、古墳群のある西側へ掘削を進める計画であり、このまま掘削を継続すれば古墳の破壊は免れない状況であり、採石にあたっては文化財保護法に基づく諸手続きが必要である旨を伝えた。緊急事態であったことから、現地では古墳の高まりが存在する西側部分は掘削せず、古墳が存在しない南側へ掘り進めるよう業者と交渉し、当面は西側への掘削は中断することを確認した。

また、掘削地点の北東の林の中にも古墳が存在するため、北側敷地の掘削についても確認したところ、北側部分は掘削しないとの回答であった。しかしながら、発見段階では北側敷地の一部も既に掘削された後であり、分布地図に掲載されていた2基の古墳も破壊されたものと思われる。

その後、土地所有者に状況を説明した上で、「埋蔵文化財包蔵の有無について(照会)」の書類の提出を依頼し、令和2年12月25日と26日の両日に試掘確認調査を行うこととした。その結果、A群のある山林以外の果樹園として開墾されていた部分では、古墳の存在は確認できなかった。令和3年1月5日に土地所有者と採石業者を含めて改めて協議の場をもち、古墳群全体の保存について依頼したところ、当該地は採石後に造成して売却する予定で、一帯の古墳は以前に調査済みであ

るとの認識であった。昭和55～56年度の田主丸町教育委員会による発掘調査は古墳群の一部のみであり、個々の古墳の調査までは行っていないことや、開発に際しては文化財保護法による手続きが必要なこと、調査期間や費用負担に関しても説明したが、協議は難航した。このまま放置すれば古墳がすべて破壊されることは必須であり、福岡県文化財保護課と協議を行い、令和2年度は地形測量を優先して実施することとした。一方で、隣接地では重機による掘削が進行しており、近づくことが危険であったため、現状で古墳が認められなかった対象地の北東部分について、先行して令和3年2月3日から3月29日まで試掘調査を実施した。その結果、明確な古墳の痕跡を発見することは出来ず、また対象地の南東部についても、試掘調査の結果と地形の現状から大きく削平されているものと判断し、調査対象範囲から除外することとした。

費用負担については採石業者との協議でも合意には至らなかったため、再度、福岡県文化財保護課・文化庁と協議し、零細企業対応の国庫補助事業として対応することとした。調査期間については年度毎に発掘調査区を設定し、調査が終了した範囲から順次、業者へ引き渡すこととして、最終的な調査終了時期は未定とした。

発掘調査は、令和3年4月15日から掘削が予定される地点を対象に開始した。調査面積は1,500㎡である。引き続き、令和4・5年度においては、対象地の地形測量を主に実施し、令和6年3月28日に埋め戻しを完了し、全体の調査を終了した。

(3) 調査日誌(抄)

令和2年度

- 12月18日 益生田古墳群内において重機による掘削を発見
- 12月25・26日 試掘確認調査、4か所トレンチを入れる
- 1月5日 土地所有者、採石業者と協議
- 1月12日 福岡県文化財保護課と国庫補助に係る協議
- 1月13日 土地所有者へ費用負担について協議
- 1月19日 採石業者と調査期間について協議
- 1月22日 土地所有者と調査期間について協議
- 2月3日 試掘確認調査を開始
- 2月8日 12号墳の奥壁に敲打の装飾を確認
- 3月30日 地形測量終了

令和3年度

- 4月6日 土地所有者、採石業者へ試掘確認調査結果の報告と、法93条の届出を求める
- 4月15日 調査開始
- 5月7日 南側調査区の調査終了
- 5月10日 12号墳の調査開始

- 12月15日 下山正一氏（佐賀大学理工学部非常勤講師）調査指導
 2月10日 辻田淳一郎氏（九州大学人文科学研究院准教授）調査指導
 2月14日 重藤輝行氏（佐賀大学芸術地域デザイン学部教授）調査指導
 3月1日 芝康次郎氏（文化庁文化財第二課調査官）現地確認
 3月29日 令和3年度調査終了

令和4年度

- 4月18日 令和4年度調査再開
 8月24日～25日 久留米地方、大雨により被災
 10月11日 文化庁協議（福岡県）
 11月29日 大澤正吾氏（文化庁文化財第二課調査官）現地協議
 1月12日 亀田修一氏（岡山理科大学名誉教授）調査指導
 1月17日 朽津信明氏（東京文化財研究所保存科学研究センター修復計画研究室長）調査指導
 2月8日 藏富士寛氏（福岡市文化財史跡整備活用課）調査指導
 3月3日 福永伸哉氏（大阪大学大学院人文学研究科教授）調査指導

令和5年度

- 4月11日 文化庁・福岡県文化財保護課・久留米市の3者協議
 4月17日 令和5年度調査再開
 7月10日 久留米市大雨により被災。田主丸町中尾三明寺地区及び富本地区で大規模土石流発生
 9月27・28日 大澤正吾調査官現地確認
 10月27日 文化庁「指定相当の埋蔵文化財」第1期リスト掲載公表
 11月1日 石山勲氏（元九州歴史資料館参事）調査指導

(4) 調査の体制

益生田古墳群の試掘確認調査及び発掘調査に係る調査の体制は、以下のとおりである。

令和2年度（試掘確認調査）

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	井上 謙介			
調査総括	久留米市市民文化部	部長	竹村 政高	次長	西村 信二	
	文化財保護課	課長	水島 秀雄	課長補佐	久保田由美	
		主査	水原 道範			
	事前確認・調整	事務主査	小澤 太郎	担当	熊代 昌之	
		調査担当	江島 伸彦	小川原 励		

令和3年度（発掘調査）

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	井上 謙介		
調査総括	久留米市市民文化部	部長	竹村 政高	次長	深町 尚子

文化財保護課	課長	水島 秀雄	課長補佐	久保田由美
	主査	小澤 太郎	事務主査	江島 伸彦
	調査担当	江島 伸彦		

令和4年度（発掘調査）

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	井上 謙介		
調査総括	久留米市市民文化部	部長	竹村 政高	次長	深町 尚子
	文化財保護課	課長	水島 秀雄	課長補佐	田中 健二
		主査	小澤 太郎	事務主査	江島 伸彦
		調査担当	江島 伸彦		

令和5年度（発掘調査・報告書作成）

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	井上 謙介		
調査総括	久留米市市民文化部	部長	竹村 政高	次長	古賀 裕二
	文化財保護課	課長	井上 英俊	課長補佐	白木 守
		主査	小澤 太郎	事務主査	江島 伸彦
	調査・報告書作成担当		白木 守	事務主査	神保 公久
	主任主事		廣木 誠	主任主事	西 拓巳
	主任主事		小川原 励	主任主事	水原道範

会計年度任用職員

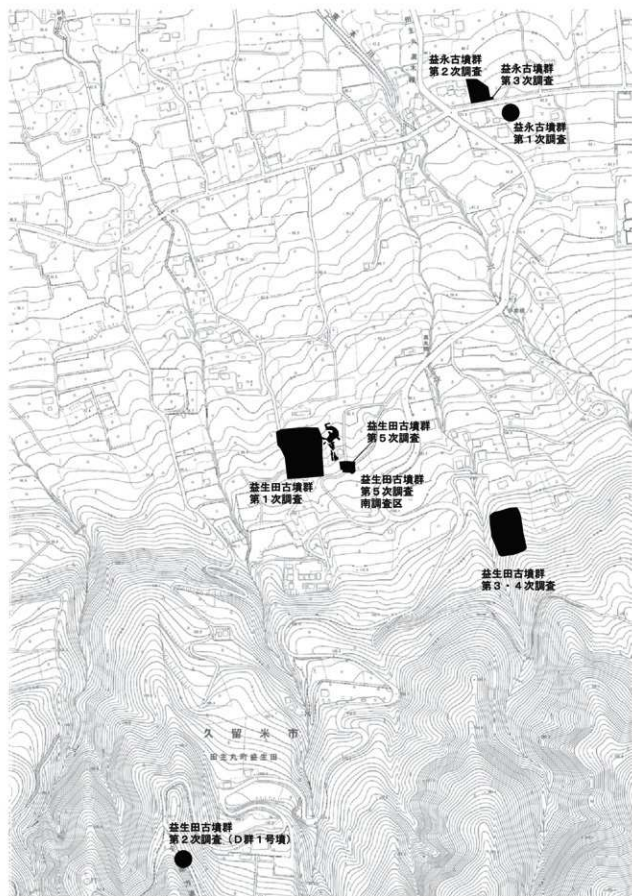
発掘調査：池尻忠行、井上知義、江藤光男、大熊澄子、大塚ヒロ子、坂田康史、佐田農夫男、高尾春代、田中樹子、飛野博文、長野晃久、平川真保、藤木幸子、廣田淳、丸山幸、迎直樹、渡辺しげ子

整理作業：井上千恵子、今村理恵、江口里織、江藤玲子、大津山恵津子、梶島かおり、佐藤節子、野口晴香、野間口靖子、田中千佐子、原口節美、藤田美江、宮崎彩香、山元博子、湯川琴美、山口久美子、横井理絵、米澤美詠子

調査や遺構の評価に際しては、多くの方々にご指導、ご鞭撻を賜った。記して感謝いたします。

赤司善彦（大野城心のふるさと館長）、石山勲（元九州歴史資料館館事）、大澤正吾（文化庁文化財第二課調査官）、大津諒太（うきは市教育委員会）、大庭孝夫（福岡県文化財保護課）、岡田論（福岡県文化財保護課）、亀田修一（岡山理科大学名誉教授）、河野一隆（東京国立博物館）、岸本圭（九州歴史資料館）、朽津信明（東京文化財研究所保存科学研究センター長）、藏富士寛（福岡市文化財史跡整備活用課）、重岡菜穂（うきは市教育委員会）、重藤輝行（佐賀大学芸術地域デザイン学部教授）、芝康次郎（文化庁文化財第二課調査官）、下山正一（佐賀大学理工学部非常勤講師）、杉原敏之（福岡県文化財保護課）、辻田淳一郎（九州大学人文科学研究科准教授）、福永伸哉（大阪大学大学院人文学研究科教授）

（五十音順）



第1図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/5,000)

第2章 位置と環境

(1) 地理的環境

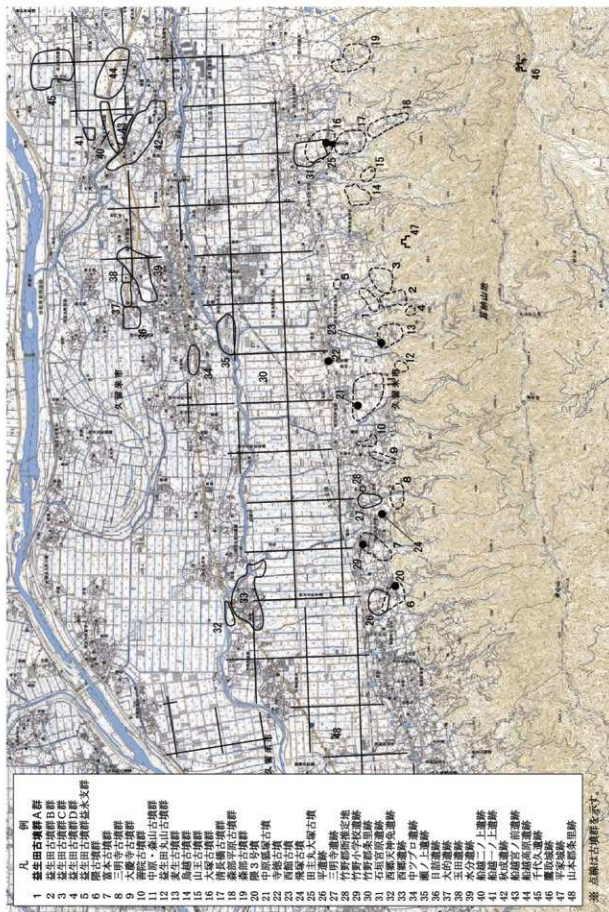
久留米市田主丸町（以下、田主丸町）は、明治時代中頃までは竹野郡と呼ばれており、その郡域は現在の田主丸町とほぼ同じである。明治22年（1889）の市制町村制施行によって、竹野郡内に田主丸町、船越村、水分村、川会村、柴刈村、水縄村、竹野村が誕生し、明治29年（1896）の郡制施行により生葉郡と合併して浮羽郡となった。その後、昭和29年（1954）の合併によって、浮羽郡田主丸町となり、平成17年（2005）2月に久留米市、三潴郡三潴町、同城島町、三井郡北野町と浮羽郡田主丸町の1市4町が合併し現在に至る。

地勢は、筑紫平野を貫流する筑後川中流域の左岸に在り、町域面積は約55㎓である。町域の北側2/3は標高20m程の沖積平野、南側の1/3は耳納山地とそこから派生する扇状地によって構成され、平野部の緩やかな景観と、急峻な山容が特徴的な対比を見せる。田主丸町ときは市との境界をなす標高802mの鷹取山を最高所とし、東西26kmに及ぶ耳納山地は活断層である水縄断層系の活動によって切り立った急峻な地形をなす。西へいくに従って徐々に標高は低くなるが、尾根には起伏がほとんどなく、北方からの遠望により別名「屏風山」とも称される。北側の平野部から見れば間近に山稜が迫り、畏怖の念さえ覚える。耳納北麓から直角方向には約30もの尾根が並行し、尾根と尾根の間には急流により発達した谷が展開し、そこに形成された幾つもの小河川は巨瀬川へと流れ込み、久留米市善導寺付近で筑後川へと合流する。山稜部から2kmにも満たない短い距離を急流が走ることになるため、尾根と尾根の間が徐々に開析されてより深い谷が形成されるとともに、砂礫等を運搬することにもなり、勾配を急に減ずる平野部では扇状地が形成される。こうした急峻な地形は土石流も発生しやすく、扇状地の北側を東西に流れる巨瀬川にも土砂が堆積しやすい環境となる。令和5年7月10日に当地を襲った豪雨では、大規模な土石流で家屋等が流失し、巨瀬川の氾濫によって平野部でも甚大な被害が発生したことは記憶に新しい。

耳納山地の基盤となるのは古生代変成岩であるが、東方のうきは市辺りでは安山岩、うきは市西部から田主丸町益生田付近までは花崗岩、それより以西は結晶片岩などが広く分布し、地域により様相は異なる。田主丸地域でも東部の古墳には花崗岩が用いられ、西部では片岩系の石材が用いられる傾向にある。山間部から扇状地にかけて、過去の土石流等によりもたらされた石材が露出し、また比較的浅い場所に埋没していることから、古くから庭石等にも利用されてきた。次第に石材の入手に関して耳納北麓に数多く存在する古墳の石材に目が向けられたのは当然のことであり、それは田主丸の主産業の一つをなす植木や造園業との関わりも無関係ではない。

(2) 歴史的環境

田主丸町は、旧竹野郡の領域をほぼ踏襲しており、田主丸町＝竹野郡と言える。田主丸町の遺跡の分布状況は、平野部の自然堤防や河岸段丘等の微高地上に遺存する遺跡群と、標高30～60m程



第2図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/150,000)

度の扇状台地上に在る遺跡群、山腹に分布する古墳群、尾根や稜線上に展開する山城に大別できる。

旧石器時代から縄文時代中期までの遺跡は確認されておらず、西郷遺跡から小型ナイフ形石器や角錐状石器が出土した他、山麓で古墳群の調査に際して黒曜石製の剥片や石鏃、縄文土器片が採集されているに過ぎない。縄文後期になると筑後川左岸の自然堤防上に所在する千代久遺跡において、埋甕と考えられる土器や磨製石斧、十字型石器などが出土している。

弥生時代になると筑後川左岸の河岸段丘上を中心に集落が形成され始める。水分遺跡からは前期末から中期の竪穴住居や土坑などが確認され、田主丸町では最も古い集落に位置付けられる。中期では西郷天神免遺跡や船越一ノ上遺跡、玉田遺跡、中ツプロ遺跡、平遺跡などの集落や甕棺墓に加え、耳納北麓に位置する三明寺遺跡や、田主丸大塚古墳の北側に位置する石垣宮原遺跡などに甕棺墓の展開が認められる。三明寺遺跡では、終末期の甕棺と石棺墓の折衷形態のものが発見された他、石垣宮原遺跡では20基以上の甕棺墓群が確認され、棺内に人骨が遺存している例も見られた。また平成22～24年度に調査された水分遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の二重区画溝、150軒以上に及ぶ竪穴住居、掘立柱建物10棟、周溝状遺構9基などが確認され、銅鏃・広型銅矛の耳部分、碧玉・ヒスイ・ガラス製の玉類、赤色顔料などが出土し、筑後川左岸における拠点集落として注目される。

古墳時代は、筑後川流域の装飾古墳と後期を中心とする古墳群に象徴され、耳納北麓の標高60～200m付近までの扇状台地上から山腹に展開し、田主丸古墳群として総称される。径10～20m程度の円墳が大半を占めるが、田主丸大塚古墳は全長103mの前方後円墳であり、北部九州屈指の規模を誇る本地域の首長墓として位置付けられる。測量調査のみ行っている飛塚古墳も6世紀前半に築造された前方後円墳で、他に数基の前方後円墳の存在が伝わっている。寛延2年(1749)書上による『寛延記』の竹野郡の項には郡内の塚穴に関する記載があり、石垣村54ヶ所、麦生村182ヶ所、森部村152ヶ所、益永村91ヶ所など計1,053基の塚穴(古墳)の存在を伝えている。しかしながら、昭和52年(1977)刊行の『福岡県遺跡等分布地図(浮羽郡編)』では285基となり、さらに『田主丸町誌』に記載されている平成5年(1993)12月段階での現存する古墳は281基、平成12年(1999)刊行の『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』では360基の記載があるものの、うち87基が消滅墳で現存する古墳は半壊等も含めて273基を数えるに過ぎない。戦後の採石や果樹園造成等により、多くの古墳が破壊され、消滅していったのであろう。現状で把握している限り、田主丸町内には16程度の古墳群が存在しており、以下に概略を記す。

隈古墳群(6) 隈集落の南側、標高50～70mに位置する5基の円墳からなる古墳群。昭和50年度の福岡県教育委員会による分布調査では3基が確認されていたが、平成9～11年度の田主丸町教育委員会の分布調査で新たに2基の円墳が確認された。3号墳は墳丘盛土がほぼ失われ、天井石が露出している。奥壁に赤色顔料による同心円文や舟の装飾が施されるものの、退色が著しい。

富本古墳群(7) 標高40m程の三明寺集落の中に3基の円墳があり、うち1基は複室構造の横穴式石室であることが確認されている。また平成15年度に実施した竹野小学校遺跡の調査では2

基の古墳が確認され、特に1号墳は墳丘盛土が失われていたものの、主体部である竪穴系横口式石室が良好な状態で残存し、田主丸町では初例となる中期古墳として注目される。

三明寺古墳群 (8) 標高40～100mの範囲に広く分布する古墳群。昭和50年度の福岡県教育委員会による分布調査では14基の円墳が確認されていたが、平成9～11年度の田主丸町教育委員会の分布調査では7基のみ現存することを確認している。径10m程の小型の円墳で、石室構造が判明している古墳では、単室・複室のものが各6基ずつ知られる。なお、富本古墳群と三明寺古墳群との中間には、全長40m程の前方後円墳である飛塚古墳があり、北側斜面から採集された円筒埴輪から6世紀前半から中頃に位置付けられる。また竹野郡銜推定地の手がかりの一つとなる「長者の井戸」も群内に所在する。

大慶寺古墳群 (9) 三明寺古墳群の東方、標高200m程の高所に位置する古墳群で、径10m程の小型の円墳6基で構成される。うち3基は平成9～11年度の田主丸町教育委員会の分布調査で確認されたものである。

善院古墳群 (10) 標高40～60mの善院集落の中に展開する8基の円墳からなる古墳群で、田主丸古墳群の中では墳丘規模・石室ともに大きな古墳が多い。平成12年度に発掘調査を実施した1号墳は径17m程度の円墳で、玄室長・玄室高ともに3.5m程を測る。また、平成13年度に発掘調査を実施した4号墳は推定径25mを測り、同古墳群の中では最も墳丘規模が大きい。特に玄室の高さは4.4mと田主丸古墳群の中でも最大規模を測る。また玄室の奥壁及び側壁部分には、明確な図文は確認できないものの、赤色顔料が塗布されている。

中原・森山古墳群 (11) 小字ごとに古墳の名称が付され、立地や分布もやや異なるものの、福岡県教育委員会による分布調査では一つの古墳群として扱われており、それに準じる。中原孤塚古墳は複室構造の横穴式石室を有する径19mの円墳で、羨道の一部と玄室の壁面に装飾が施される。大型の同心円文を奥壁に多用し、側壁の同心円文の間を埋めるように三角文を描く。また靱・舟・人物も見られ、装飾の密度も高い。果樹園として開墾されていたこともあり、古くより墳丘は失われていて石材が露出していた。平成14年3月に国指定史跡となる。また森山1・2号墳はともに複室構造の横穴式石室を有する円墳である。

益生田丸山古墳群 (12) 益生田古墳群の西側の尾根に位置し、平成9～11年度に実施した分布調査によって新たに発見された4基の円墳からなる古墳群。石室は残存しているが、詳細な調査は実施していないため、石室構造や時期等は不明である。

寺徳古墳 (22) 標高34mの扇状台地の先端部に位置し、葺石を有する径18mの円墳。明治29年(1896)の発掘で、石室内より馬具や勾玉・管玉・小玉などの玉類、金環、須恵器等が出土したと伝わる。また平成9・10年度に重要遺跡確認調査も実施されている。西に開口する複室構造の横穴式石室で、後室から前室にかけて同心円文・円文を中心とする図文に加えて、舟や盾も描かれ、耳納北麓の典型的な装飾古墳である。国指定史跡。

麦生古墳群 (13) 益生田古墳群の西側、標高80～120mの麦生集落の山麓に展開する17基か

らなる古墳群。大半は径10m以下の円墳で、10基程の古墳が現存する。5号墳は長径14m×短径10.4mの楕円形を呈し、葺石を有するなど、他の古墳とは卓越した様相を呈する。複室構造の横穴式石室で、奥壁に同心円文・三角文・人物・舟、玄門右袖石にも舟が描かれる装飾古墳であり、**西館古墳** (23) として史跡となっている。

益生田古墳群 (1~4) 益永古墳群の南西に位置する郡域最大の古墳群で、扇状地の標高70m付近から標高200mの耳納山地中腹まで広がり、A~Dの4支群で構成される。現在まで消滅墳を含めて130基ほどが確認されている。昭和55~57年度(1980~82)にA群の14基の古墳が調査され、同古墳群中では比較的規模の大きい円墳が造営されていることが判明している。さらに彩色系と敲打系の装飾古墳が複数確認されている点も特徴といえよう。B・C群は山腹の断層崖より高所の斜面上に中・小型の円墳が立地する。また標高200mの最高所に位置するD群には、小型の円墳2基が確認される。

*** 益永古墳群(益永支群)** (5) 標高60m付近の緩斜面上に立地する。昭和45年(1970)に福岡県教育委員会が作成した地形測量図には17基の円墳が記録されているが、昭和52年(1977)刊行の『福岡県遺跡等詳細分布地図(浮羽郡編)』では6基のみであり、僅か7年間で10基以上の古墳が消滅した。昭和20年頃に破壊されたが、同心円文などが彩色された装飾古墳や、敲打系の装飾古墳である益永9号墳などが含まれる。現在では北側で新たに古墳が発見され、7基となっている。今回の報告に際して、益永古墳群の範囲を見直した結果、益生田古墳群益永支群として位置づけることとした。

鳥越古墳群 (14) 平成29年度の現地踏査の際に新たに発見された、21基の円墳からなる古墳群で、詳細な調査は実施されていない。古墳の分布は尾根の西側斜面と東側斜面の2グループに分けられ、東側斜面では石垣川に向かう急斜面に築造される古墳が多い。

山王古墳群 (15) 鳥越古墳群から谷を隔てた東側に位置し、平成29年度に砂防ダム建設予定地の現地踏査の際に新たに発見された7基からなる古墳群。令和2~3年度に3基の発掘調査を行い、うち2基は複室構造の横穴式石室で、墳丘内列石を有する円墳であることが確認された。2号墳は石室開口部に突出部も認められ、その機能や墳丘の築造工程も含めて特徴のある古墳として注目される。

大塚古墳群 (16) 6世紀後半~末の全長103mの前方後円墳である田主丸大塚古墳をはじめ、周辺に存在する円墳や前方後円墳からなる計7基の古墳群。田主丸大塚古墳の南にあったとされる小型の前方後円墳と、北側にあった大型の円墳は消滅しており、現存する古墳は5基。全国的に前方後円墳の築造が減少し、規模も縮小していく6世紀末葉段階にあって、100mを超す墳丘は九州では最大規模を誇り、築造背景と被葬者像を含めて重要な位置を占める首長墓系列の古墳群である。

清長橋古墳群 (17) 大塚古墳群と、その南に位置する森部平原古墳群との中間に位置する76基の円墳からなる古墳群。うち15基は消滅しており、現存する古墳は61基。森部平原古墳群と構造や様相は同じであるが、やや規模の大きな古墳が多い。なお、装飾古墳であった清長橋古墳(消滅)

の石材と伝わる2石が伝わり、大型の石材には円文4個・同心円文1個・三角文1個が、もう一方の石材には同心円文2個が確認でき、市指定の有形文化財（考古資料）となっている。

森部平原古墳群 (18) 田主丸大塚古墳の上段、標高200m程の斜面地に位置する、70基の円墳からなる古墳群。径10m前後の小規模な円墳を主体とし、石室形態は単室・複室ともに存在するが、平面プランは隅丸方形から円形に近い胴張り構造となる。平原古墳群の58基の円墳は、森部平原古墳群の名称で福岡県の史跡に指定されており、周辺は平原古墳公園として整備されている。

森部古墳群 (19) 大塚古墳群の東方800m、標高70～100m程の斜面地に南北に展開する、7基の円墳からなる古墳群。石室は大破や半壊しているものが多い。

一方、集落跡は平野部において実施された、国道バイパス建設や圃場整備事業に伴う調査において確認されている。前期では船越高原遺跡から3世紀末～4世紀前半の堅穴住居10軒、西郷遺跡からは同時期の溝のみが確認されているものの、遺跡数としては少ない。また、大的遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期の畦畔に囲まれた5～10m程度の長方形区画の水田跡が検出されており、これは本市では唯一の水田跡である。中期に至っても集落遺跡は限定的であるが、この時期の首長墓が若宮古墳群に代表される、うきは市域に展開していることと無関係ではないと思われる。6世紀半ば以降は、耳納北麓へ群集墳が爆発的に築造されることに対応するように、平野部にも集落跡が飛躍的に増加する。7世紀後半まで継続するものも多く、日誌遺跡のように9世紀前半まで連続と営まれる集落も存在する。

承平年間(931～938)に編纂された『和名類聚抄』には、竹野郡に柴刈、二田、竹野、長栖、船越、川会の6郷が記されている。現在も田主丸町内に柴刈、船越、川会の地名があるが、これらについては明治期に『和名類聚抄』の郷名を参考に名付けたものであり、各郷の所在が特定されている訳ではない。竹野郡衙推定地については、「竹野屋敷」「竹野後」の字名が残る三明寺地区に比定されており、初代筑後国守道君首名の子孫に関する伝承が残る「長者の井戸」も所在するが、近隣で発掘調査は行われておらず詳細は不明である。平野部の開発に伴う調査では7世紀末～8世紀前半の集落が随所で発見されるのに対し、山麓では遺物の散布が見られるのみであった。しかし、平成15年度の竹野小学校遺跡の調査で50軒近くの堅穴住居が初めて確認された。墨書土器の出土に加え、「平井」銘を有する移動式カマドも出土し、土器製作に瓦工が関与した可能性も指摘されている。標高530mの白建石の山頂に祀る井樋宮付近では、8世紀代の祭祀土器の散布や、転用硯も採集されており、大宰府の北東に聳える宝満山の祭祀遺跡との共通性も認められる。

平安時代には、田主丸大塚古墳の北側に位置する石垣山観音寺の南大門付近から、永久3年(1115)や同4年(1116)の銘を持つ経筒を含め、青銅製の経筒が9ヶ所から出土している。白鳳2年(673)創建と伝わる観音寺の奥之院は耳納山地中腹にあり、当地の山岳信仰が古代に遡る可能性も示している。また筑後川左岸の平野部には、生葉・竹野・山本の3郡の条里地割が東西20数kmにわたって良好に残っており、耳納山地からはその痕跡を明瞭に望むことができる。

耳納北麓における遺跡の分布の中で、群集墳と並び特筆すべきものとして、南北朝～戦国期に築

造された30ヶ所程の山城が挙げられる。急峻な尾根を利用して築かれた山城群は、草野氏や星野氏、麦生氏といった在地豪族により、戦略上の拠点として山頂付近の本城と山麓に設けられた支城が築かれ、幾多の攻防にあたっている。うきは市と八女市との境界、標高802mの耳納山地最高所である鷹取山頂に築かれた鷹取山城は、星野鎮胤の居城であったとされ、本丸から南東に向かって階段状に曲輪が配され、南側斜面に32本、西側斜面にも9本の畝状空堀群が残る。

このように耳納北麓と、その北側に広がる平野部という地勢を活かし、田主丸町では各時代を通して様々な土地利用が行われてきた。屏風山とも称される急峻な山並みは、一見すると人々の移動を拒み、時には大規模な災害を引き起こす存在でもある。その反面、断層活動により形成された尾根と谷は、豊かな水を平野部にもたらすと同時に、集落の領域を明確に区分する役割も果たしてきた。特に谷筋や尾根を利用した古くからの道を介し、峠を隔てた耳納山地南側に位置する現在の八女市とも積極的な交流があり、文化や方言、婚姻関係など、近代に至るまで強い結びつきを保っていた。現在も山麓に残る神社や祠、古代寺院の痕跡などが、それらを如実に物語っている。



第3図 益生田古墳群益永支群地形図 (1/800)

(昭和45年3月 福岡県教育委員会測量)



第4図 益生田古墳群A群（北東部）地形図（1/600）

（昭和45年3月 度福岡県教育委員会測量）

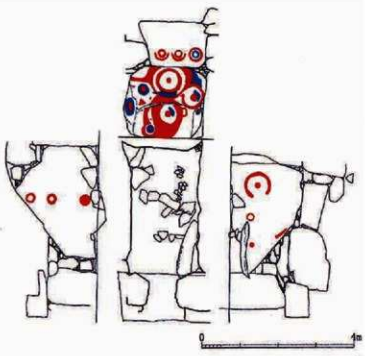
第3章 益生田古墳群について

(1) 田主丸古墳群の調査と指定の経緯

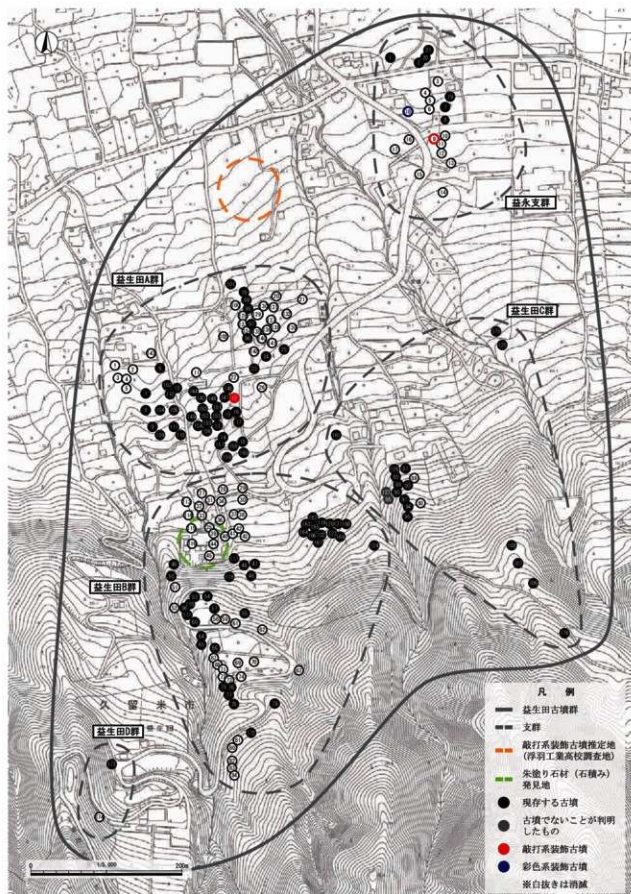
田主丸古墳群は、第1章でも述べたように旧筑後国竹野郡の領域と一致する田主丸町内に所在する耳納北麓に築造された古墳群の総称である。史跡の指定名称であるとともに、耳納北麓に所在する16ヶ所の群集墳（隈、富本、三明寺、大慶寺、善院、中原・森山、益生田丸山、麦生、益生田（A～D・益永支群）、鳥越、山王、大塚、清長橋、森部平原、森部）に代表される300基弱の古墳と、その営まれた環境を含む概念としても用いている。

田主丸古墳群の歴史は、破壊と保存の繰り返しであった。田主丸町は「植木発祥の地」として知られるように、果樹や園芸作物の栽培が古くから盛んであり、耳納北麓に広がる広大な扇状台地上で開発が行われてきた。また水縄断層が生み出した急傾斜地には短い河川が平野に向かって延び、大雨のたびに大規模な土石流を発生させてきた。さらに筑紫平野を西流する筑後川は、「筑紫次郎」の異称をもつように暴れ川としても知られ、昭和28年（1953）の西日本水害の際には「捨て石として古墳の石を牛車で運んだ」といった証言もあり、山麓にある古墳は土取りや石取りの対象となったという伝承も度々耳にする。こうした人為的・自然的な地形の改変により、当地の遺跡は度々破壊される憂き目にあってきたと考えられる。

江戸時代中期に1,053基の塚穴（古墳）があったとされる田主丸町だが、平成12年（1999）刊行の『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』によると、現存する古墳は半壊等も含めてわずか273基を数えるのみであり、数多くの古墳が採石や果樹園造成等で破壊され、消滅していったことが分かる。1980年頃には益永支群を含む益生田古墳群の一部が開発によって破壊される事態が生じ、その存続が危ぶまれたが、マスコミ報道や土地所有者との協議によって益生田古墳群A群13基を保存することができた。平成4年度には森部平原古墳群が築造当時の状況を良好に示す群集墳として福岡県指定史跡となるなど、現在に至る田主丸古墳群の保存へとつながっている。また田主丸古墳群の特色は、大規模な群集墳という点だけではなく、横穴式石室内に装飾を描く「装飾古墳」の存在がある。田主丸古墳群の史跡指定は、装飾古墳と



第5図 益生田古墳実測図（1/100）金子文夫氏実測図をトレース



第6図 益生田古墳群古墳分布図 (1/5,000)

して知られていた寺徳古墳が昭和43年6月11日に国指定されたことを嚆矢とし、その後、分布調査や発掘調査によって実態が明らかになった全長103mの前方後円墳である田主丸大塚古墳、装飾古墳である中原孤塚古墳と西館古墳が史跡に指定されるに及び、「田主丸古墳群（田主丸大塚古墳・寺徳古墳・中原孤塚古墳・西館古墳）」として追加指定、名称変更された（平成14年3月19日告示）。今回の調査地点は、田主丸古墳群の保存のきっかけとなった益生田古墳群A群における調査であり、敲打により施文された装飾古墳である益生田古墳群A群12号墳（以下、12号墳）が含まれている。

（2）益生田古墳群の分布調査について

益生田の地名は、明治9年（1876）に竹野郡のうち二田村・益永村・東麦生村・西麦生村が合併した際、各村の各1字を組み合わせることで誕生した。ここでは、益生田古墳群のこれまでの調査について、記録に残る範囲で整理しておきたい。

益生田古墳群の調査歴として最も古いものは、昭和40年代に行われた田主丸町に所在する古墳群の悉皆調査であり、福岡県教育委員会が調査の主体であると思われる。この調査では、現在の益永古墳群と益生田古墳群をまとめて益永古墳群として扱っており、益永古墳群として194基の古墳が記録されている。当時の調査カードには、古墳群毎に1基ずつナンバリングされているが、詳細な情報がない古墳が多く、また位置に関する情報も乏しい。そのため、調査カードと現状の個々の古墳を突き合わせることは極めて困難である。なお、いくつかの調査カードに掲載された略測図から推測すると、40～50番台の古墳が、今回、調査の対象としたA群に該当するものと推測される。また、この悉皆調査に付随するものと考えられるが、2つの地点で地形測量が行われている。第3図は、現在、益永古墳群と呼ばれている地点で、17基の古墳が認められる。この測量図と悉皆調査の古墳番号は一致している。もう1カ所の地形図（第4図）は、30番台の古墳が当てはまるものと推測されるが、この地点の古墳群は大部分が開墾によって消滅しているため、現状との突合が困難である。さらに、調査カードには彩色系の装飾の存在が記されている。「益生田古墳」と名付けられたこの古墳は、位置情報から益永古墳群の中に含まれるもので、赤・青色による彩色の記述があり、調査を担当した金子文夫氏による石室の略測図（第5図）には、大型の同心円文が描かれている。

その後、昭和50年（1975）から福岡県教育委員会が事業主体となって田主丸町の分布調査を行い、その成果は昭和52年（1977）に『福岡県遺跡等分布地図（浮羽郡編）』として刊行された。この時点で一帯の破壊が進んだ状況が反映されたためか、従来「益永古墳群」と呼称されていた古墳群は、益永古墳群と益生田古墳群とに分けられており、別々の古墳群として扱われている。この昭和50年代の分布調査では、益生田古墳群は95基とされ、益永古墳群の6基と合わせても101基となっており、194基が確認されていた昭和40年代の悉皆調査から10年間ほどの間で半減していることが分かる。特に益永古墳群については、前述の第3図の状況からみて、少なくとも10基以上が破壊されていることが分かる。

その後、平成10～12年度にかけて田主丸町教育委員会が分布調査を実施している。ここでは、それまでの福岡県の調査を基礎として、益生田古墳群と森部平原古墳群を対象に、個々の古墳の詳細分布図を提示している。この調査では、昭和40年代の悉皆調査で確認されていた各古墳との関係についても検討しており、この時点で消滅墳51基を数え、現存が確認できたものは74基としている。消滅した古墳と新規に発見した古墳を含めて125基、益永古墳群の6基を含め、益生田古墳群の古墳数は計131基とした。今回の調査においても、益生田古墳群の号数については、この田主丸町の分布調査成果を元に番号を付している。

(3) 益生田古墳群の発掘調査について

益生田古墳群の発掘調査は、昭和43年(1968)5月8日～8月28日に実施された福岡県立浮羽工業高等学校考古学同好会による調査(註1)が最も古く、ガリ版刷りの調査報告と石室の略測図(第7図)が残されている。古墳の所在地に関しては「田主丸町益生田字益永」「五万分の一(久留米)の東端より10.8センチ、北端より3センチ」といった記載のみで、古墳の詳細な位置は分からないが、今回の第5次調査地点の北側付近に位置するものと推測される。1号墳とされた円墳は西に開口する複室構造の横穴式石室で、前室からは人骨が、また後室から金環、玉類、鉄鏃、刀子、圭頭太刀柄頭、馬具類等の出土品の記録がある。特筆すべき事項として、「後室、南東部約1.7メートルのところにある白い同心円」との記述があり、白色との表現から敲打技法により施文されたものではないかと推測される。加えて「同心円は一個だけではなく、もっと多くありそうだがはつきりしているのは一個だけで、あとはぼけたようになってはつきりしない」とも記され、同心円が複数存在した可能性についても言及している。

次いで実施されたのが、昭和55年(1980)の果樹園の開墾に伴って実施された益永古墳群1号墳および益生田古墳群A群13基の発掘調査(註2)である。調査の経緯は今回の第5次調査の経緯と類似し、福岡県教育委員会職員が開墾の情報を得て、文化財パトロール中に発見したことに端を発する。益永古墳群1号墳は墳丘測量及び石室の実測を実施している。また益生田古墳群A群の調査の途中で土地所有者から古墳の保存への理解が得られたため、墳丘を断ち割ることなく、地形測量および石室の実測を中心に調査を行っている。報文中では、今回の調査区の南側にあったホテルの石垣や、西側の道路の石積みの中に朱塗りされた石を確認したことも記されている。なお、この際に益生田古墳群B群の1基が強行に破壊されるという事件が起きている。この時の調査を益永古墳群第1次調査、益生田古墳群第1次調査とし、平成12年以降も断続的に調査を継続している。当調査の古墳群は、第5次調査の調査対象地と重複するため、第1表・第2表で調査成果と石室の法量を記載した。

益生田古墳群第2次調査(註3)は、平成12年(2000)6月5日～30日に県道田主丸黒木線の道路改修工事に伴い、半壊した古墳1基を調査したものである。図面上ではB群の南西に位置するが、B群とは距離が離れていることから、調査時、周辺で確認されたもう1基の古墳と併せてD群とし

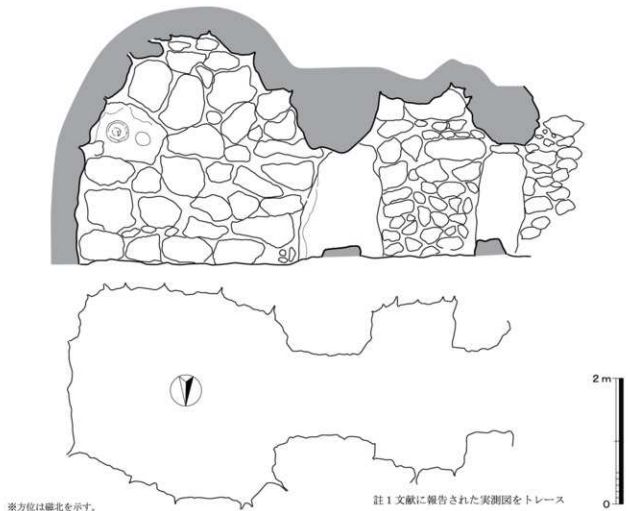
て取り扱っている。

益永古墳群第2次調査(註4)は、平成21年(2009)6月16日～7月3日に「山苞の道遊歩道設置事業」に伴い、地形測量およびトレンチ調査を実施したものである。益永1号墳から県道を隔てて北側に位置する古墳を2号墳として墳丘南側にトレンチを設定し、墳丘の積土の確認を行っている。

益生田古墳群第3次調査(註5)は、同じく平成21年(2009)11月25日～翌年2月26日に、砂防ダム建設に伴いC群の地形測量を実施したものである。消滅したとされる古墳も含め、83～95号墳の13基の位置を特定している。併せて残存状況が悪かった86・90号墳の2古墳について墳丘測量を行い、トレンチ調査も実施している。

益永古墳群第3次調査は、平成23年(2011)2月14日～3月15日に実施した、遊歩道建設により削平される部分の確認調査である。対象となったのは平成21年度に実施した益永2号墳で、墳丘盛土の確認を目的としたが、削平対象となる部分は後世の開墾等により、既に大きく攪乱を受けていた状況であった。なお、報告書は刊行されていない。

益生田古墳群第4次調査(註6)は、平成26年(2014)6月23日～翌年10月14日にC群中にお



第7図 浮羽工業高校考古学同好会調査古墳石室実測図(1/60)

いて発掘調査を実施した、駐車場および造成工事に伴うものである。83・85・87・88号墳と、平成21年度に実施した90号墳の補足調査を含めて計5基の調査を行った。うち4基の古墳では玄門袖石や前底部の側壁が北側に向かって傾いている状況や、前底部の祭祀遺物が石材に押し潰された状況が認められ、その要因として天武7年(678)の筑紫大地震を引き起こした水縄断層系の活動による可能性が指摘されている。また調査を進める一方で土地所有者と協議を進め、開発の計画変更を行うことで古墳の保存が計られることとなったため、墳丘の断ち切りは最小限に止め、石室は真砂土を充填した土のうで埋め戻し、保護を図っている。

(4) 益生田古墳群の古墳一覧

益生田古墳群の古墳一覧の作成にあたっては、昭和45年(1970)作成『益生田古墳群地形図』および昭和52年(1977)刊行『福岡県遺跡等分布地図(浮羽郡編)』、ならびに平成12年(1999)刊行の『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』の調査成果を踏まえ、現地踏査を行った。結果、現存数107基、消滅数88基、総数197基を把握し、墳形を確認できたものはいずれも円墳であった。なお、86号墳および127号墳の2基については、第4次調査の結果、古墳ではないことが判明しており、上記総数には含んでいない(註7)。

古墳のナンバリングは、先の地形測量および分布調査の内容と現況とを照合したうえで、既知の古墳125までを確認し、それ以外の古墳に126以降の番号を新たに付した。

なお、これまで「益永古墳群」と呼称してきた古墳群であるが、「益生田古墳群」とは同一の立地上にあり、同じ旧益永村に所在する古墳群である。土石流の影響や後世の開墾等により、現在では益生田古墳群と益永古墳群との間に空白地帯が生じているが、本来は連続して古墳が営まれていたことが判明している。こうした状況と、これまでの調査の経過を踏まえ、益永古墳群については本報告をもって益生田古墳群の「益永支群」と称する。また、益生田古墳群D群については、現在、確認されているのは2基のみで、深い谷を隔てて地形や立地もA～C群とは大きく異なっている。2基のみではあるが地形等を考慮し独立させ、D群として取り扱うこととした。将来的にB群に含めるのか、あるいは周辺で新たな古墳が発見されれば、別の古墳群として取り扱うのかも含め、今後の検討課題としておく。

最後に発掘調査以外の記録であるが、久留米市立水縄小学校に保管されていた「横板板鋌留短甲」は、益生田字外野出土とされる資料である。字外野は、益生田古墳群A群が所在する場所で当該調査地も含まれる。出土した古墳等の詳細は記録されておらず特定はできないが、益生田古墳群からの出土品として列記しておく。この横板板鋌留短甲は、後胴のみが残っており前胴は全く残っていない。後胴右側面に鋌の跡が残っているので二枚胴式のものとして推測する。なお、横板板鋌留短甲は、平成31年に水縄小学校より久留米文化財収蔵館に移管し保存している。また、消滅墳であるA群143号墳から太刀が出土している。旧田主丸町教育委員会が、保存処理を行った上で保管していた資料で、古墳の場所についても特定できている。現在、当該地は造成によって削平されており古墳

の痕跡は全く残っていない。この資料も現在は、久留米市埋蔵文化財センターで保管している。

【註】

- 註1 『益永古墳群 - 一号墳発掘調査報告書 - 』1969 浮工・考古学同好会
 註2 『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第1集 1984 田主丸町教育委員会
 註3 『益生田古墳群 I - D 群 1号墳の調査 - 』田主丸町文化財調査報告書第16集 2001 田主丸町教育委員会
 註4 『益永古墳群 (第2次調査) 』平成21年度久留米市内遺跡群 久留米市文化財調査報告書第293集 2010 久留米市教育委員会
 註5 『益生田古墳群 (第3次調査) 』平成22年度久留米市内遺跡群 久留米市文化財調査報告書第303集 2011 久留米市教育委員会
 註6 『益生田古墳群 (第4次調査) 』平成28年度久留米市内遺跡群 久留米市文化財調査報告書第382集 2017 久留米市教育委員会
 註7 127号墳は、第3次発掘調査において84号墳と認識して地形測量を実施し、報告を行っていた古墳である。今回の現地踏査において『福岡県道群等分布地図 (浮羽郡編)』に掲載された古墳と番号が重複していたことが判明したため、本報告をもつて訂正する。

第1表 益生田古墳群A群・益永支群調査石室規模一覧①

番号	旧番号	石室規模				
		玄室	玄門	前室	羨門	羨道
益永3号墳	益永1号墳	残存高 3.84 m 長 4.66 m 中央幅 2.87 m 門側幅 2.87 m 奥壁幅 1.61 m	高 1.90 m 幅 1.36 m	高 2.95 m 長 2.45 m 幅 2.30 m	高 1.98 m 幅 1.25 m	高 2.07 m以上 残存長 6.30 m 幅 1.42 m
		残存全長 13.41 m以上 主軸N-64° -E				
A群12号墳	未調査	残存高 2.80 m 長 3.40 m 中央幅 2.30 m 門側幅 1.71 m 奥壁幅 1.79 m	高 1.38 m 1.58 m 幅 1.07 m	残存高 2.38 m 長 1.90 m 幅 1.95 m	高 1.58 m 幅 1.04 m	残存高 1.63 m 長 2.00 m 幅 0.96 m
		全長 7.30 m 主軸N-18° -E				
A群13号墳	A群9号墳	高 3.00 m 長 2.73 m 中央幅 2.22 m 門側幅 2.17 m 奥壁幅 1.53 m	高 1.30 m 幅 0.55 m	高 1.95 m 長 1.65 m 幅 1.21 m	推定高 1.20 m 幅 0.65 m	残存高 1.55 m 長 2.17 m 幅 1.12 m
		全長 6.55 m 主軸N-88° -E				
A群14号墳	A群8号墳	残存高 2.23 m 長 2.40 m 中央幅 2.38 m 門側幅 2.37 m 奥壁幅 1.22 m	高 1.20 m 幅 0.85 m	-	-	残存高 1.72 m 長 2.04 m 幅 2.36 m
		全長 4.44 m 主軸N-69° -E				
A群16号墳	未調査	高 2.80 m 長 3.00 m 中央幅 2.35 m	高 1.35 m 幅 0.80 m	高 2.10 m 長 1.40 m 幅 1.90 m	高 1.50 m 幅 0.85 m	高 未計測 長 3.20 m 幅 1.45 m
		全長 7.60 m 主軸N-12° -W				
A群17号墳	未調査	-	-	-	-	-
		-				
A群144号墳	A群6号墳	高 3.61 m 長 3.95 m 中央幅 2.95 m 門側幅 2.95 m 奥壁幅 1.92 m	高 1.70 m 幅 1.30 m	高 2.58 m 長 2.20 m 幅 2.31 m	高 1.70 m 幅 1.65 m	残存高 1.03 m 以上 長 3.08 m 幅 1.58 m
		全長 9.23 m 主軸N-60° -E				
A群145号墳	A群13号墳	高 3.02 m 長 4.02 m 中央幅 2.27 m 門側幅 2.27 m 奥壁幅 1.93 m	高 1.50 m 幅 0.75 m	高 2.23 m 長 1.81 m 幅 2.02 m	高 1.20 m 幅 0.85 m	高 1.56 m 長 3.30 m 幅 1.10 m
		全長 9.13 m 主軸N-81° -E				

第2表 益生田古墳群A群・益永支群調査石室規模一覧②

番号	旧番号	石室規模				
		玄室	玄門	前室	羨門	羨道
A群 146号墳	A群 15号墳	残存高 0.20 m 長 2.72 m 中央幅 2.30 m 以上 門側幅 2.87 m	残存高 1.25 m 幅 0.90 m	残存高 0.23 m 長 1.45 m 幅 2.25 m	高 1.20 m 幅 1.05 m	残存高 0.70 m 残存長 1.50 m 幅 1.07 m
		全長 5.67 m 主軸N-61°-E				
A群 149号墳	A群 2号墳	高 3.10 m 長 3.92 m 中央幅 2.30 m 門側幅 2.24 m 奥壁幅 1.82 m	高 1.98 m 幅 0.82 m	高 2.20 m 長 1.65 m 幅 1.77 m	高 1.56 m 幅 0.60 m	高 1.76 m 推定長 1.50 m 幅 1.07 m
		全長 7.07 m 主軸N-87°-E				
A群 150号墳	A群 12号墳	高 4.23 m 長 3.75 m 中央幅 3.14 m 門側幅 3.14 m 奥壁幅 1.22 m	高 1.80 m 幅 1.05 m	高 2.90 m 長 2.11 m 幅 2.40 m	高 1.83 m 幅 1.24 m	推定高 1.60 m 長 3.02 m 幅 1.38 m
		全長 8.88 m 主軸N-81°-E				
A群 151号墳	A群 14号墳	残存高 2.30 m 長 2.95 m 中央幅 2.07 m 門側幅 2.06 m 奥壁幅 1.06 m	高 1.30 m 幅 0.60 m	—	—	高 1.41 m 長 2.87 m 幅 1.36 m
		全長 5.82 m 主軸N-73°-E				
A群 152号墳	A群 16号墳	残存高 1.16 m 長 1.90 m 中央幅 1.9 m 門側幅 1.91 m 奥壁幅 1.20 m	残存高 1.35 m 幅 0.73 m	—	—	残存高 0.84 m 長 1.80 m 幅 0.93 m
		全長 3.70 m 主軸N-55°-E				
A群 153号墳	A群 11号墳	残存高 1.60 m 長 2.41 m 中央幅 2.28 m 門側幅 2.31 m 奥壁幅 1.53 m	高 1.35 m 幅 0.90 m	残存高 1.00 m 長 1.67 m 幅 1.87 m	推定高 0.95 m 幅 1.00 m	残存高 1.67 m 長 2.67 m 幅 1.45 m
		全長 6.75 m 主軸N-64°-E				
A群 154号墳	A群 1号墳	残存高 2.98 m 長 3.65 m 中央幅 3.56 m 門側幅 2.82 m 奥壁幅 1.85 m	高 1.70 m 幅 1.02 m	高 2.61 m 長 2.30 m 幅 2.33 m	高 1.65 m 幅 1.20 m	高 1.67 m 長 2.90 m 幅 1.45 m
		全長 8.85 m 主軸N-56°-E				
A群 155号墳	A群 10号墳	残存高 1.40 m 長 2.24 m 中央幅 2.40 m 門側幅 2.42 m 奥壁幅 1.56 m	高 1.35 m 幅 0.95 m	—	—	残存高 1.00 m 残存長 1.80 m 幅 0.95 m
		全長 4.04 m 主軸N-31°-E				
A群 156号墳	A群 5号墳	残存高 1.90 m 長 2.70 m 中央幅 2.48 m 門側幅 2.52 m 奥壁幅 1.13 m	残存高 1.50 m 幅 0.93 m	高 0.35 m 長 1.87 m 幅 1.51 m	残存高 1.20 m 幅 1.30 m	高計測不可 長 1.45 m 幅 1.25 m
		全長 6.02 m 主軸N-58°-E				
A群 157号墳	A群 4号墳	—	—	—	—	—
A群 158号墳	A群 3号墳	—	—	—	—	—
A群 159号墳	A群 7号墳	—	—	—	—	—

第3表 田主丸古墳群に係る発掘調査報告書

番号	報告書名	発行年	所収古墳	調査年度	備考
1	『田主丸古墳群』 田主丸町第1集	1984	益生田古墳群第1次調査 A群13基	1980	
2	『田主丸古墳群』 田主丸町第2集	1985	大塚2号墳	1984	
3	『西館古墳』 田主丸町第6集	1996	西館古墳	1994	装飾古墳
4	『田主丸大塚古墳』 田主丸町第15集	2001	田主丸大塚古墳第1～5次調査	1992 ～1999	
5	『益生田古墳群Ⅰ』 田主丸町第16集	2001	益生田古墳群第3次調査 D群1号墳	2000	
6	『寺徳古墳』 田主丸町第18集	2001	寺徳古墳	1998	装飾古墳
7	『善院古墳群』 田主丸町第19集	2002	善院古墳群1号墳	2000	
8	『限3号墳』 田主丸町第20集	2002	限3号墳	2001	装飾古墳
9	『善院古墳群Ⅱ』 田主丸町第21集	2002	善院古墳群4号墳	2002	
10	『清長橋古墳群』 田主丸町第23集	2002	清長橋古墳群27・28号墳	2002	
11	『大塚古墳群Ⅰ』 田主丸町第24集	2004	大塚古墳群1号墳	2002	
12	『中原孤塚古墳』 田主丸町第26集	2004	中原孤塚古墳	2011	装飾古墳
14	『平成21年度久留米市内遺跡群』 久留米市第293集	2010	益永支群2号墳	2009	
14	『平成22年度久留米市内遺跡群』 久留米市第303集	2011	益生田古墳群第3次調査 C群の測量調査	2006	
15	『田主丸大塚古墳2』 久留米市第348集	2014	田主丸大塚古墳第6・7次調査	2013	
16	『久留米市埋蔵文化財調査集報XV』 久留米市第359集	2015	飛塚古墳	2008	
17	『久留米市内遺跡群平成28年度』 久留米市第382集	2017	益生田古墳群第4次調査 C群83・85・87・88・90号墳	2014 ～2015	
18	本書	2024	益生田古墳群第5次調査 A群	2021 ～2023	装飾古墳

※報告書名の「田主丸町」は田主丸町文化財調査報告書、「久留米市」は久留米市文化財調査報告書の略

第4表 益生田古墳群古墳一覧表①

群名	号数	状態	墳丘状態	墳丘		石室		開口方位	備考	県教委番号	
				規模	状態	構造	構造				
A	1	消滅								640085	
	2	消滅								640086	
	3	消滅								640087	
	4	消滅								640088	
	5	消滅								640089	
	6	現存	半壊		9.3	大破					640090
	7	現存	良好		14.0	完存	複室	横穴式石室	139		640091
	8	現存	良好		16.0	埋没	複室か	横穴式石室	150		640092
	9	現存	大破			不明	石材有			石材有	640093
	10	現存	大破			不明	石材有			石材有 道路により削平	640094
	11	消滅									640095
	12	現存	良好		16.0	完存	複室	横穴式石室	【252】	天井石欠損、敲打系装飾	640096
	13	現存	良好		15.0	完存	複室	横穴式石室	268	田文報1集、9号墳	640097
	14	現存	半壊		8.0	半壊	単室	横穴式石室	249	田文報1集、8号墳	640098
	15	現存									640099
	16	現存	良好		16.0	完存	複室	横穴式石室	261	田文報1集、13号墳	640100
	17	現存									640101
	18	現存									640102
	19	現存	墳頂陥没		9.9	半壊	単室	横穴式石室	274	天井石欠損	640103
	20	消滅									640104
	21	消滅									640105
	22	消滅									640106
	23	現存	半壊		5.8	完存	複室	横穴式石室	260		640107
	24	現存	良好		11.5	完存	複室	横穴式石室	208		640108
	25	現存	良好		9.2	半壊	複室	横穴式石室	270	天井石欠損	640109
	26	消滅									640110
	96	現存	良好		8.6	完存	複室	横穴式石室	240		
	97	現存	半壊		8.3	全壊					
	98	現存	墳頂陥没		14.4	不明			(240)		
	99	現存	墳頂陥没		13.0	不明			240	袖石残存	
	100	消滅			15.6						
	101	現存	墳頂陥没		10.8	不明					
	102	消滅									
	103	現存	墳頂陥没		8.7	完存	複室	横穴式石室	230		
	104	現存	良好		13.7	良好	複室	横穴式石室	235	天井石欠損	
	105	現存	半壊		10.5	不明					
	109	現存	大破			不明				石材有	
	110	現存	大破			不明				石材有	
	111	現存	大破			不明					
	112	現存	半壊		8.2	不明			(270)	榎石残存か	
	128	消滅			8.9					測量図より計測	
	129	消滅			13.2					測量図より計測	
	130	消滅			8.6					測量図より計測	
	131	消滅			15.4					測量図より計測	
	132	消滅			10.0					測量図より計測	
	133	消滅			15.5					測量図より計測	
	134	消滅	大破							測量図より	
	135	消滅			11.1					測量図より計測	
	136	消滅			9.9					測量図より計測	
	137	消滅			12.8					測量図より計測	
	138	消滅			5.7					測量図より計測	
	139	消滅			20.6					測量図より計測	
	140	消滅			15.1					測量図より計測	
	141	消滅	大破							測量図より	
	142	消滅			9.7					測量図より計測	
	143	消滅								刀剣出土、現在久留米市所蔵	
	144	現存	良好		13.0	半壊	複室	横穴式石室	240	田文報1集、6号墳	

第5表 益生田古墳群古墳一覧表②

群名	号数	状態	墳丘		石室		開口方位	備考	県教委番号	
			状態	規模	状態	構造				
A	145	現存					261	田文報1集、13号墳		
	146	現存					241	田文報1集、15号墳		
	147	現存	埋没	10.3	半壊	複室	横穴式石室	【196】	天井石欠損	
	148	現存	半壊	7.2	半壊	複室	横穴式石室	【254】		
	149	現存	良好	14.5	完存	複室	横穴式石室	267	田文報1集、2号墳	
	150	現存	良好	13.0	半壊	複室	横穴式石室	261	田文報1集、12号墳	
	151	現存	半壊	13.0	半壊	単室	横穴式石室	253	田文報1集、14号墳	
	152	現存	大破	5.0	半壊	単室	横穴式石室	235	田文報1集、16号墳	
	153	現存	大破	10.0	半壊	複室	横穴式石室	244	田文報1集、11号墳	
	154	現存	半壊	13.0	半壊	複室	横穴式石室	236	田文報1集、1号墳	
	155	現存	大破	10.0	半壊	単室	横穴式石室	211	田文報1集、10号墳	
	156	現存	大破	10.0	半壊	複室	横穴式石室	238	田文報1集、5号墳	
	157	現存	大破	16.0	全壊	複室か	横穴式石室	(215)	田文報1集、4号墳	
	158	現存	半壊	8.5	半壊	単室か	横穴式石室	【264】		
	159	現存	大破	11.0	全壊				田文報1集、3号墳	
	160	現存	半壊	11.5	完存	複室か	横穴式石室	【234】	田文報1集、7号墳	
合計 73 基								現存 45 基 (うち裝飾1基)	消滅 28 基	
B	27	消滅							640111	
	28	消滅							640112	
	29	消滅							640113	
	30	消滅							640114	
	31	消滅							640115	
	32	消滅							640116	
	33	消滅							640117	
	34	消滅							640118	
	35	消滅							640119	
	36	消滅							640120	
	37	消滅							640121	
	38	消滅							640122	
	39	消滅							640123	
	40	消滅							640124	
	41	消滅							640125	
	42	消滅							640126	
	43	消滅							640127	
	44	消滅							640128	
	45	消滅							640129	
	46	現存	半壊	8.0	半壊	単室か	横穴式石室	232		640130
	47	現存	良好	12.5	不明			(233)		640131
	48	現存	良好	15.0	完存	複室	横穴式石室	260		640132
	49	現存	良好	10.0	不明					640133
	50	現存	墳頂陥没	10.0	半壊					640134
	51	消滅								640135
	52	消滅								640136
	53	現存	墳頂陥没	8.0	半壊	複室	横穴式石室	250	道路により削平	640137
	54	現存	良好	10.0	不明					640138
	55	現存	半壊	10.0	全壊				墳丘西半欠損	640139
	56	現存	良好	11.0	完存	単室	横穴式石室	255		640140
	57	現存	良好	15.0	不明			(275)		640141
	58	消滅								640142
	59	消滅								640143
60	現存	大破	9.0	全壊					640144	
61	消滅								640145	
62	消滅								640146	
63	消滅								640147	
64	現存	墳頂陥没	6.3	半壊	単室か	横穴式石室	(270)	天井石欠損	640148	
65	現存	良好	11.6	完存	複室	横穴式石室	230		640149	
66	現存	良好	12.1	完存	複室	横穴式石室	240		640150	

第6表 益生田古墳群古墳一覧表③

群名	号数	状態	墳丘		石室		開口方位	備考	県教委番号	
			状態	規模	状態	構造				
B	67	消滅							640151	
	68	消滅							640152	
	69	消滅							640153	
	70	消滅							640154	
	71	消滅							640155	
	72	消滅							640156	
	73	消滅							640157	
	74	消滅							640158	
	75	現存	良好	10.3	完存	複室	横穴式石室	270		640159
	76	現存	半壊	7.0	半壊	単室か	横穴式石室	227	天井石欠損	640160
	77	現存	墳頂陥没	7.8	半壊	複室か	横穴式石室	240	天井石欠損	640161
	78	現存	墳頂陥没	8.0	半壊			(270)	天井石欠損	640162
	79	現存	半壊	15.0	半壊	複室	横穴式石室	250	天井石・奥壁欠損	640163
	80	消滅								640164
	81	消滅								640165
	82	消滅								640166
	83	消滅								640167
	84	消滅								640168
	113	消滅								
	114	消滅								
	115	消滅								
	116	消滅								
	117	現存	良好	8.0	不明					
	118	現存	墳頂陥没	13.3	不明					
	119	現存	墳頂陥没	7.8	半壊	単室	横穴式石室	228		
	120	現存	墳頂陥没	10.0	半壊	単室	横穴式石室	220		
	121	現存	半壊	8.5	半壊	単室	横穴式石室	224	道路により削平	
122	現存	墳頂陥没	8.0	半壊	単室	横穴式石室	240			
123	現存	半壊	10.3	半壊	単室	横穴式石室	222	道路により削平		
124	現存	半壊	10.0	不明						
162	現存	半壊	10.0	半壊	複室	横穴式石室	247	墳丘北半欠損		
163	現存	半壊	9.0	全壊			270			
164	現存	大破	7.0	全壊						
165	現存	半壊	6.6	全壊						
166	現存	墳頂陥没	8.0	半壊	単室	横穴式石室	222	天井石欠損		
167	現存	墳頂陥没	7.0	半壊	単室	横穴式石室	221			
168	現存	墳頂陥没	9.7	不明				道路により削平		
169	現存	半壊	8.0	不明				道路により削平		
170	現存	半壊	9.0	全壊						
171	現存	大破	5.0	全壊						
172	現存	墳頂陥没	8.5	不明						
								合計 81 基 現存 38 基 消滅 43 基		
C	85	現存	半壊	11.0	半壊	複室	横穴式石室	【237】	久文報 303・382 集、墳丘内列石検出	640169
	86	—							久文報 303・382 集、古墳と認識	640170
	87	現存	半壊	7.0	半壊	複室	横穴式石室	【231】	久文報 303・382 集、墳丘内列石検出	640171
	88	現存	半壊	12.0	半壊	単室	横穴式石室	【256】	久文報 303・382 集、墳丘内列石検出	640172
	89	消滅							久文報 303 集	640173
	90	現存	大破	9.0	大破		横穴式石室	【47】	久文報 303・382 集	640174
	91	現存	半壊	13.0	全壊			(270)	久文報 303 集	640175
	92	現存	半壊	7.7	不明				久文報 303 集	640176
	93	消滅							久文報 303 集	640177
	94	現存	大破	6.0	不明				久文報 303 集	640178
	95	現存	半壊	16.0	不明				久文報 303 集	640179
	106	現存	半壊	14.0	半壊	複室	横穴式石室	246	前室・玄室天井石欠損	
	107	現存	半壊	8.0	不明					
	108	現存	墳頂陥没	17.0	半壊	複室か	横穴式石室		羨道・玄室天井石欠損	
	125	現存	大破	14.3	全壊			(270)		

第7表 益生田古墳群古墳一覧表④

群名	号数	状態	墳丘		石室		開口方位	備考	県教委番号	
			状態	規模	状態	構造				
C	126	現存	大破	8.0	半壊	単室	横穴式石室	【241】	久文報 303・382集、83号墳、墳丘内列石検出	
	127	—							久文報 303・382集、84号墳、古墳と誤認	
	161	現存	半壊		半壊				天井石欠損	
	175	現存	半壊	9.7	全壊					
	176	現存	半壊	12.0	半壊	単室	横穴式石室	112		
	合計20基 現存16基 消滅2基 誤認2基									
D	173	現存	大破		不明				石材有	
	174	消滅								
合計2基 現存1基 消滅1基										
益永支群	1	現存	墳頂陥没	16.0	半壊		横穴式石室	240		640181
	2	現存		10.5	不明				久文報 293集、トレンチ調査	640182
	3	消滅		18.0		複室	横穴式石室	224	田文報 1集、1号墳	640183
	4	消滅		16.0					測量図より計測	640184
	5	消滅		11.6					測量図より計測	640185
	6	消滅		11.9					測量図より計測	640186
	7	現存	良好	12.0	半壊		横穴式石室	(230)		
	8	現存	良好	13.5	不明					
	9	消滅		17.5			横穴式石室	(267)	測量図より計測 敲打系裝飾	
	10	消滅		6.7					測量図より計測	
	11	消滅		7.7					測量図より計測	
	12	消滅		10.1					測量図より計測	
	13	消滅		17.2					測量図より計測	
	14	消滅		15.0					測量図より計測	
	15	消滅		12.7					測量図より計測	
	16	消滅		7.3					測量図より計測	
	17	消滅		19.3					測量図より計測	
	18	消滅				単室か	横穴式石室	北	石欄有、彩色系裝飾	
	19	現存	半壊	10.0	半壊		横穴式石室			
	20	現存	大破	10.0	全壊					
	21	現存	半壊	7.0	不明			(240)		
合計21基 現存7基 消滅14基 (うち裝飾2基)										
総計197基 現存107基 (うち裝飾1基) 消滅88基 (うち裝飾2基) 誤認2基										

・数値の単位は、「規模」がメートル、「開口方位」が度を示す。

・「開口方位」の基準は原則磁北であり、() は磁北からの推定値を、【 】 は座標北を基準とする。

・備考において使用した「久文報」は久留米市文化財調査報告書、「田文報」は田主丸文化財調査報告書、「測量図」は昭和45年(1970)作成の益生田古墳群地形図の略称である。

・益永支群18号墳の内容は、福岡県埋蔵文化財包蔵地調査カードおよび金子文夫氏による石室の略測図を参照した。

第4章 調査の記録

(1) 調査の概要と経過

今回の調査は、益生田古墳群A群の一部において実施したもので、採石予定地とされた約14,400㎡について行った。対象面積が広大なため、採石業者と協議し、1年目の令和3年度は12号墳とその南部分を調査し、終了した後に採石業者へ引き渡すこととした。その他の地点については、その都度、協議することとした。

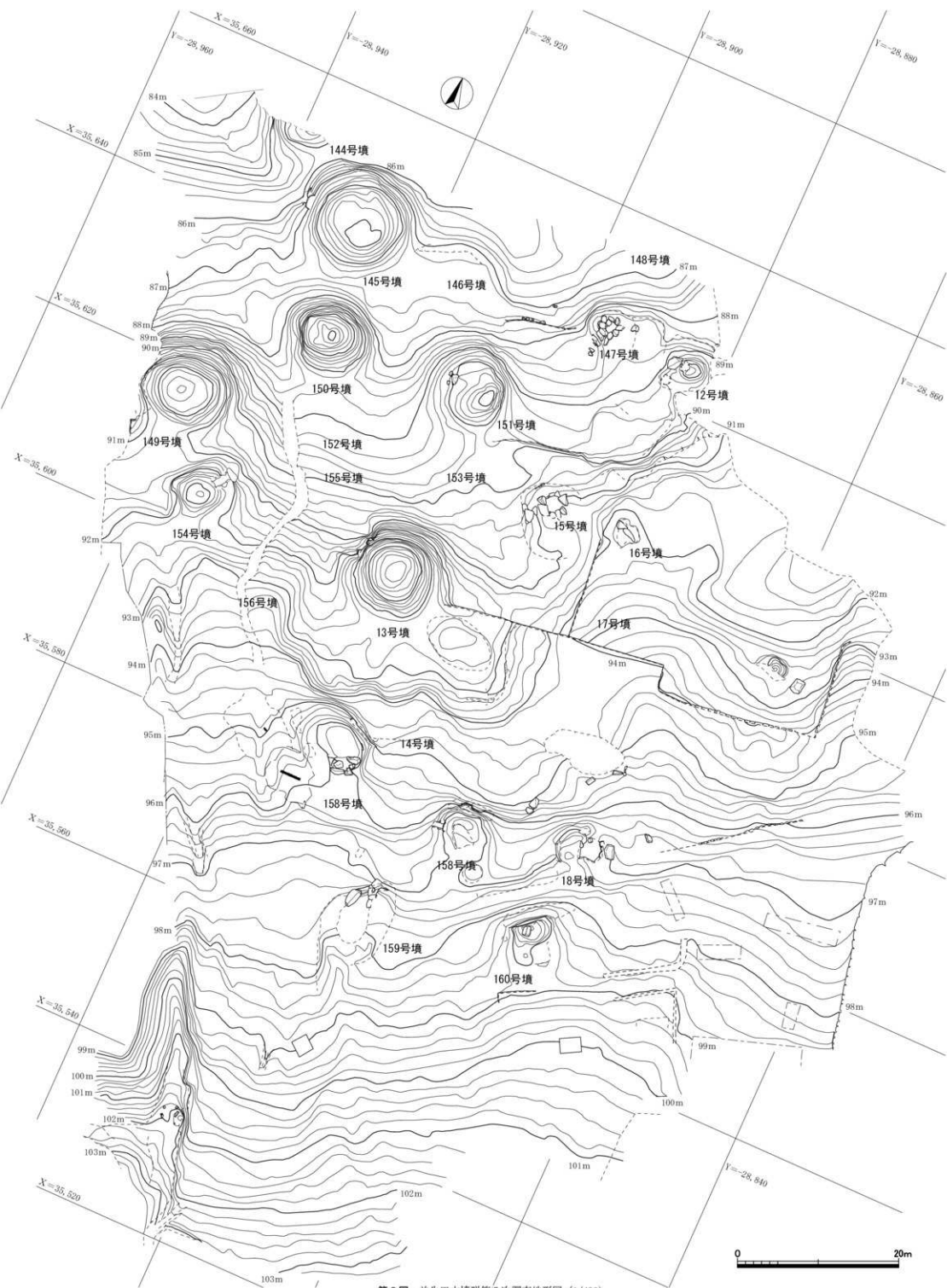
本調査に先立って、令和3年2月より対象地の測量調査から開始し、並行して試掘確認調査を実施したが、新たに古墳を発見することはできなかった。しかし、2月8日に敵打の装飾が施される12号墳が確認された。また、耳納北麓の装飾古墳の在り方として、装飾古墳は下馬場古墳や寺徳古墳のように単体、もしくはうきは市所在の屋形古墳群のように装飾古墳のみで構成される古墳群という立地のみが残っており、群集墳の中に装飾古墳が存在する事例が無く、さらには古墳群が景観を保持しながら良好に残存していることから、久留米市文化財保護課としては、対象地の古墳群領域の保存を想定しながら調査を進めることとした。そのため、墳丘全体を掘削せずにトレンチ調査とし、墳丘の規模を確認することに留めて、改めて採石業者、地権者と保存に向けて協議を行うこととした。また、史跡指定を視野に福岡県文化財保護課とも協議を重ねていった。

12号墳と呼称した古墳については、『福岡県遺跡等詳細地図（浮羽郡編）』、『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』の古墳番号を検討し番号を付した。その他の調査の対象となった古墳については、仮の番号を付している。合わせて、報告書作成にあたって第3章で記した成果をもとに周辺の古墳にも番号を付している。

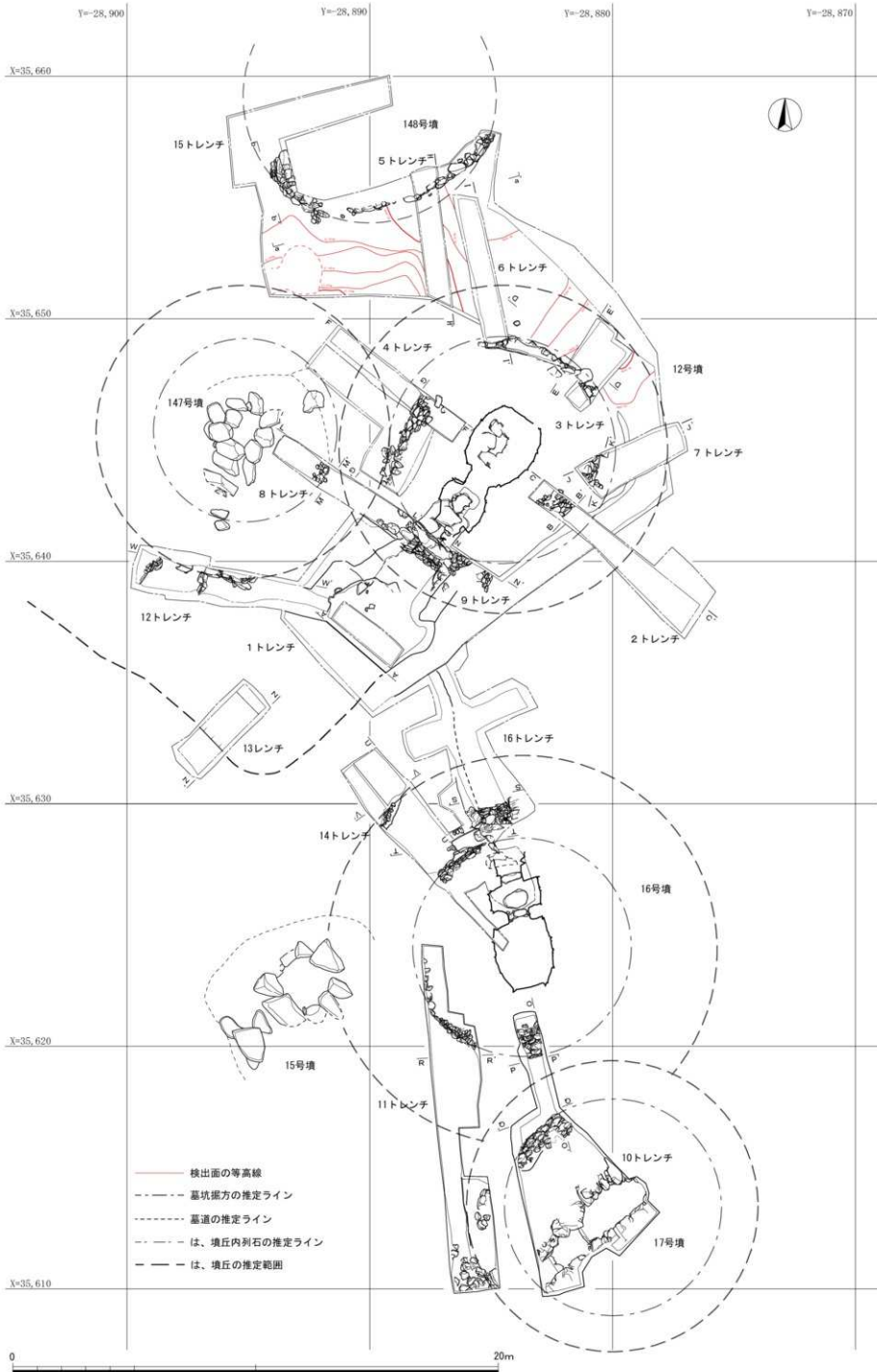
測量調査は、対象地の東半分を終了して令和2年度末に終了した。令和3年度に至り、4月から本格的に調査を開始した。はじめに古墳なしとして採石業者に明け渡している地点についても、再度、調査区を設定して古墳の確認を行った。その後、5月より12号墳の調査を開始した。令和4年度は、対象地の測量調査を中心にトレンチを追加して埋没している周辺を確認することとした。令和5年度は、補足調査とトレンチの図化を行った。

(2) 益生田古墳群A群の概要

益生田古墳群A群は現存45基を数える古墳群で、標高75mから100mの扇状台地の扇央上に展開する。古墳の分布には粗密があり2箇所の中域が確認できる（第6図参照）。今回の調査対象地はA群西側の集中域にあたり、もう一方は北東に立地している。調査対象地には昭和55年の調査分を含め、24基の古墳が確認されている。面積は9,000㎡程で、対象地には、径6m～15m程の墳丘が林立しており、過去の報告でも指摘されているが墳丘が高い傾向にある。一方で昭和55年の調査では、墳丘の痕跡が全く無いところからも小石室が確認された例もあり、目視できる古墳以外にも埋没した古墳の存在が考慮された。この他に、今回の調査からは対象外とした古墳が12



第8图 益生田古墳群第5次調査地形图 (1/400)



第9図 益生田古墳群第5次調査古墳及びトレンチ配置図 (1/150)

基あり、こちらも現存する墳丘の径が10m前後を測る古墳が確認されている。このようにA群では、墳高、墳径が大きい古墳が目立ち、径10～15mの古墳の中に、径10m未満の小型の古墳が点在する印象を受ける。

対してB群とC群は、扇状地上の緩斜面から斜面の勾配が急となる一帯から山上へ向かって築造されている。径6～13m程の古墳が多い傾向にあり、A群に見られるような径15mを超える古墳も含まれてはいるが疎に存在する程度である。緩斜面で目につく場所での築造と標高が高く急斜面または、急斜面上の僅かな平坦面での築造という立地条件の差異が、被葬者にも何らかの差異があることが想定され、それぞれの群として分けることに意義があるものと推察される。

調査対象地内に存在する24基の内、昭和55年の調査時に16基が認識されている。その内、2基が未調査である。また、調査当時、調査区外であったのか理由は定かではないが、昭和55年調査の報告で扱っていない古墳が、少なくとも8基あり、今回の調査で12号墳、15号墳、16号墳、17号墳、147号墳、148号墳の6基を調査対象としており、昭和55年に調査を実施した16基の古墳群の東隣にあたる。

(3) 南調査区の調査

試掘確認調査で古墳が確認されなかった地点ではあるが、12月の試掘調査で須恵器片が2点採取された。念のため、広く表土を剥ぎ古墳の残欠の確認を行った。表土直下で褐色土を確認したが、その下層で薄黄白色砂を確認した。この面で一旦調査区を広げていった。

その結果、調査区中央から大型礫が検出されたが、荒砂が堆積しているのみで古墳を確認することはできなかった。この段階では気付いていなかったが、土石流による堆積土が全体を覆っており、地山までは1.5m以上、掘り下げる必要があった。薄黄白色砂から弥生土器片が出土していることから土石流の堆積土であるといえる。

(4) 12号墳の調査

1) 調査前の状況

調査開始時、玄室上部付近の墳頂が僅かに山形をなしている程度で、一見して古墳とは認識できない程墳丘入口が埋没していた。玄室の天井石が無くなっており、天井部から玄室内を覗くことができたため、辛うじて古墳と認識できる状態であった。墳頂部には大型の礫が転がっており、これが天井石と思われた。

石室内の状況は、玄門は土砂により埋没していたが、玄室の上半分までは土砂が入り込んでおらず、天井の開口部分から覗くと奥壁の上部2石目から上が確認できる。最下段の鏡石は埋没しており、2石目の下端部に流入土が覆いかかっている状態であった。さらに、流入土の上に天井部から落ちた黒色土が円錐形に堆積していた。2石目に装飾が確認され、天井から覗いて目視することができる状態であった。

前室、羨道の天井石は消失し、周辺にも天井石といえそうな大型礫は確認できない。流入土は、前室、羨道部を完全に埋没させており、僅かに羨道先端の楣石上面が確認できる程度であった。

調査は、石室内の土砂を撤去することから行い、取り掛かりとして前室の天井部分の土砂撤去から着手した。流入土は黄白色の荒砂で、拳大の礫が混じていた。調査当時、この堆積土が土石流による流入土とは考えておらず、果樹園の開墾時に人為的に真砂土で埋めたものと判断していた。そのため土層の状況を図化しておらず、報告に際して図示できない。しかし、メモは取っていたので以下、堆積の状況を述べる。土砂は床の40 cm上から次第に目の細かい砂へ変化していき、床の10 cm上で黄白色の粘質土となった。目の細かい砂の堆積は15 cm程あった。この粘質土は石室全体の床面で確認できた。床面直上には暗褐色土が5 cm程堆積しておりその中から耳環、玉類等が出土している。

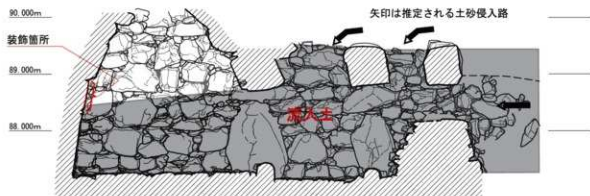
前室及び羨道でも、堆積の厚みに差があるものの玄室と同様の堆積を示しており、床の10 cm上で黄白色の粘質土が確認され、その下層では暗褐色土が5 cm程堆積し須志器、鉄鱗片が出土している。

また、土石流土の進入路については、玄室上部が埋まっていない状況を考慮すると玄室の天井からは土石流は流れ込んでいない。前室と羨道は天井まで埋まっている状態で、前庭、墓道も土石流の厚い堆積が確認されている。12号墳よりも西に在る古墳群は、土石流の影響を全く受けていない。昭和55年の調査でも堆積状況に土石流の痕跡は見出せない。この状況から土石流は南東から流れてきたものと推測され、12号墳を直撃して閉塞石から流入しているのではないかと考える。また、前室と羨道の天井からも流入していると考えるのが妥当であり、あるいは土石流によって前室、羨道の天井石と墳丘が破壊されたとも推測できる。

墳丘の範囲確認の進め方として、石室の主軸を決定した後に1から4トレンチを設定して範囲の確認に努めることとした。その結果、列石が確認されたが、玄室中央を起点として距離にして3 m強を測り、また、配列も円弧というよりも直線的に配されており想定していたものとは異なっていた。5トレンチと6トレンチでは、地山と147号墳と12号墳の盛土の残存状況を確認するために設定した。4トレンチの列石検出状況から墳形が方形であることも想定され、7トレンチを設定して隅の形状の確認を行った。8トレンチと9トレンチでは、楣石側で列石の配置状況を確認し、追加して4トレンチと8トレンチ間の列石を確認した。13トレンチは、12号墳の掘方を確認するために設定した。

各トレンチで検出された列石は、盛土の中に積み上げられている状況が確認できるものがある。これは、益生田古墳群第4次調査で指摘されているように墳丘内に土留め等、墳丘を維持するために配されたものと考えられ、近隣の類似例として、寺徳古墳や田主丸大塚古墳の墳丘調査でも確認されている。ここでは、盛土内に配されたもしくは同様の効果を狙って配列された列石について、外表に積まれた葺石や列石と区別して、「墳丘内列石」と呼称し統一して表記する。

また、12号墳の基底部は、南に在る16号墳の基底部との比高が1 m以上あり、西隣の151号墳



第10図 調査前の石室埋没状況

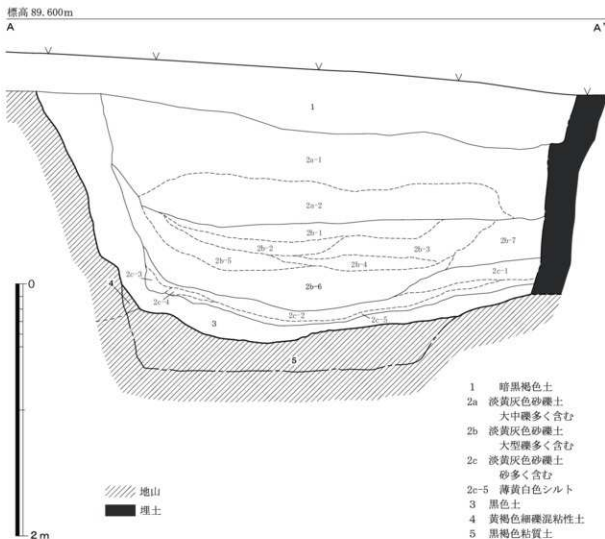
は16号墳と同レベルにある。深くに掘り込まれた墓坑に築造された12号墳は、一見して墳丘が低く、半地下状を呈している。この点についても12号墳は稀有な古墳である。

2) 墳丘構造

前述のように、12号墳は開口部から墓道にかけて埋没しており、一見して古墳の所在が分かりにくい状況であった。そのため、1トレンチから9トレンチを設定して規模や構造の確認に努めた。図中のアルファベットは、第9図の益生田古墳群第5次調査古墳及びトレンチ配置図のアルファベットと連動している。

1トレンチ(第11図)は、12号墳の墳丘西側、開口部前面に設定している。トレンチを2m程掘り下げると閉塞石及び墓道が確認できた。層序は、1層が畑地の造成層である。2層は黄色の砂質土が厚く堆積しており細分可能であるが、これは土石流の堆積であるとの知見を得ている(下山正一氏教示)。2層は一度の土石流による堆積であるが、粒子の大きさがaからcの3つに細分することが可能である。特に2c-5層は、シルト質土が薄く堆積している。対して、2a層と2c層までは、下層から上層へと粒が粗くなる傾向が読み取れる。これは、重量の軽い礫土から順に流れてくるため、シルトのような粒子の細かい土が土石流堆積土の最下層となることである。前述のようにこのシルト質土は石室内にも堆積しており、一連の土石流が流入していることの証となる。3層は古墳築造後の表土で、4層及び5層が地山である。4層の傾斜は、12号墳築造時に墓坑を掘り込んでいる状況を示している。13トレンチでも掘り込みが確認でき、12号墳の前面から北西方向へ向けて墓坑が掘り込まれ、墓道が確保されている。また、12トレンチでも土石流の堆積が確認されており、5層からは縄文土器片が出土している。南側の掘り込みは、傾斜面を掘り込み、墓道の最深部から計測すると1.7mの比高がある。

主体部に関するものは、閉塞石と入口部分の列石、墓道が確認された。羨道の側壁は閉塞石の先40cm付近で途切れる。左右の側壁残存状況は異なり、左側壁の残存状態は正面から見て石材の面が揃っており、完存しているとも考えられる。対して、右側壁は一部のみ残存し、褐色土と黄白色土が混じる土が堆積している。この堆積土は土石流が流れ込んだものと思われ、堆積土が混じる人



第11図 12号墳1トレンチ土層断面図 (1/30)

頭大以上の大型礫は、石室の石材であったとも考えられる。

1トレンチの西壁土層断面において、斜面を掘り込んだ痕跡と、1トレンチの南側で掘方の立ち上がりが確認できるが、南に所在する15号墳、16号墳、西隣の151号墳との比高が1.7m程あることや、16号墳の墓道が12号墳に削平されていることから、築造順は、16号墳から12号墳である。また、深く掘り込まれた墓坑によって、12号墳の墳丘は低く抑えられ、一見して半地下状に見える。

2トレンチ(第12図)は、12号墳の墳丘南に設定し、墳丘の裾部と1トレンチで確認された墓坑の掘方を確認することを目的とした。層序は、1層から3層は畑地造成の際の堆積である。4層から6層は後世の堆積で、7層から9層は砂混じりの土であり土石流に起因するものである。10層が旧表土、11層は地山である。

2トレンチで確認された墳丘内列石は、5段乃至6段を10層の上に積み上げている。墳丘内列石は平坦な面をそろえて積み上げるが、目地の幅が広く奥まで土が挟まっている。積み上げの工程は、右下から左上へ斜めに積み上げらる。第12図の列石断面では、列石上段と下段で積み上げの

角度が異なり、上段より下段の方が傾斜が緩くなっている。地山まで掘り下げたが墓坑の掘方を確認できない。墳丘内列石の内側にあるものと考えられる。石室の床面から2トレンチで確認した地山面までの高さは、0.9～1.0 mを測る。

3トレンチ(第13図)は、12号墳の墳丘東側に設定し、墳丘内列石の確認を目的とした。2トレンチの積み方とは異なり小降りの際を1段乃至は2段積み上げている。層序は、1層、2層が後世の堆積によるもので1層上に横たわる大型礫は原位置を保っていないことがわかる。墳丘内列石下の4層から13層は墳丘盛土と判断した。14・15層が旧表土で16層褐色土が地山である。トレンチ内で確認された墳丘内列石の残存状況が悪かったため、北側へトレンチを拡張して石の残存状況を確認し他ところ、北側でも墳丘内列石が巡っていることが確認できた。

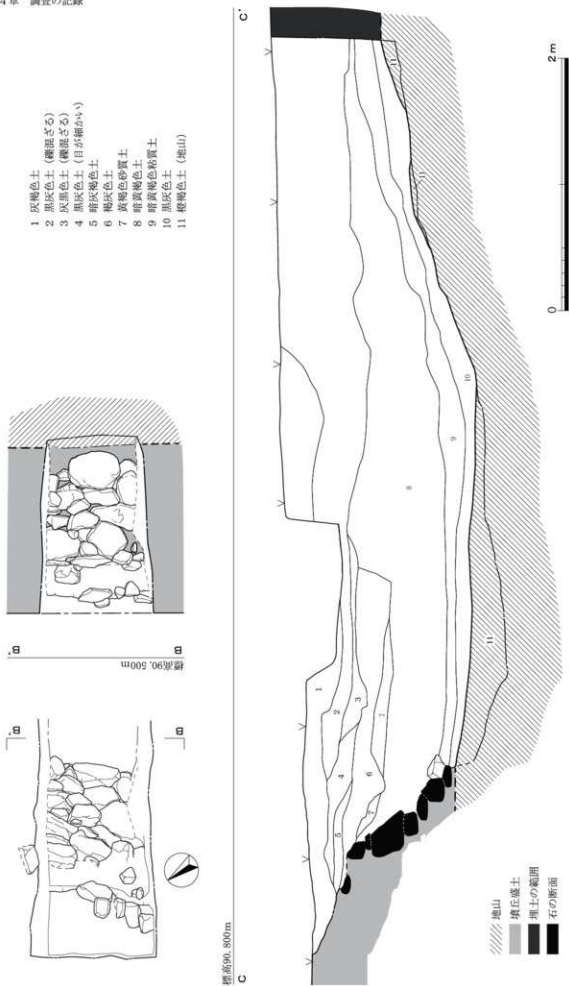
4トレンチ(第14図)は、12号墳の墳丘北側に設定した。墳丘内列石が5段乃至6段確認され、下から2段は角礫を垂直に立ち上げる。3段目から積み上げの角度が緩やかになり拳大の小型礫を積み上げている。また、4トレンチと8トレンチの間で墳丘内列石が直線的に延びている状況を確認した。

2トレンチ、3トレンチ、4トレンチで列石を確認したが、これを墳裾と判断するべきか、12号墳の墳丘と148号墳の墳丘の間に5トレンチ(第18図)を追加し墳裾の確認を行った。5トレンチの層序から、13層の橙褐色土が地山である。地山直上の9及び10層の黒色土が旧表土と判断した。11層、12層については、凸レンズ状の堆積となっているが10層下であるため、自然堆積と判断した。4層から8層については、粗い砂が混じっており、土石流に関する堆積土と判断した。1層から3層が耕作土で、4層から8層は148号墳の墳丘盛土と考えられる。

5トレンチで12号墳の墳丘盛土となる層を確認できなかったため、5トレンチの東に6トレンチ(第18図)を設定して再度、盛土の確認を行った。6トレンチ17層の黄褐色土は、土に締まりがあり他の土が混ざった痕跡もないことから地山と判断した。対して、11層から16層は、質の異なる土が混ざっていることから盛土であると判断した。また、12号墳の北側を広く開け、5トレンチ13層直上まで掘り下げた。12号墳と148号墳の間に溝状の窪地を検出しており、これが両古墳の境ではないかと推測される。

7トレンチ(第19図)は、12号墳の東に設定して、隅の形状を確認するため掘り下げを行った。その結果、墳丘内列石が緩やかな円弧を描いて曲がっていることを確認した。墳丘内列石は4段乃至5段を積み上げ、3段目からは石が小振りになり積み上げの角度が緩やかになる。層序は、墳丘内列石の外側である3層と4層、及び直下層の9層から13層も盛土と考えられる。15層が1トレンチ4層、2トレンチ11層と同様に地山である。

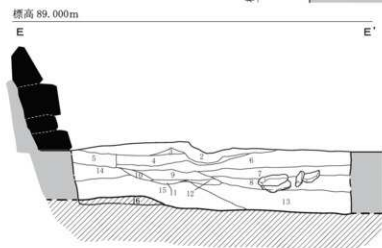
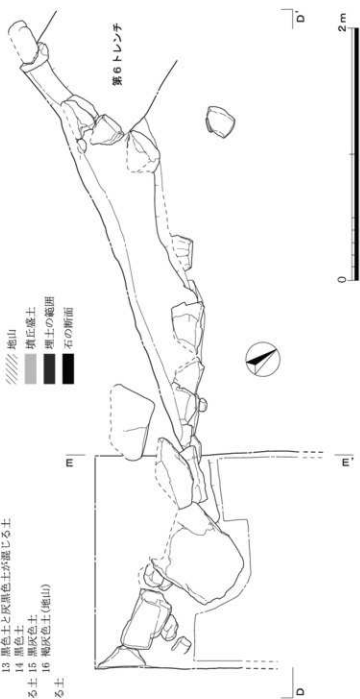
8トレンチ(第20図)では、墳丘内列石が羨道天井石まで延びているか確認するため12号墳の墳丘北東に設定した。墳丘内列石は、羨道の楣石の端へ向かって延びているが、天井石と接する列石が確認できず、検出した状況では元々無いか、崩れたのか判断がつかない。土層の堆積状況では、1層は畑地造成時の堆積で2層がそれ以前の地表である。4層も黒色土で、一定期間地表面であっ



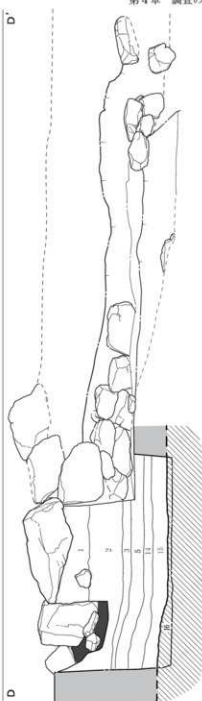
第12図 12号墳2トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)

- 1 灰黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒暗灰褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 黒色土
- 6 暗黄褐色土
- 7 黒灰褐色土
- 8 黒色土
- 9 黒色土と灰黒色土が混じる土
- 10 薄黄褐色土
- 11 黄褐色土と黒色土が混じる土
- 12 薄黄褐色土色土
- 13 黒色土と灰黒色土が混じる土
- 14 黒色土
- 15 黒灰色土
- 16 粉灰色土(姥山)

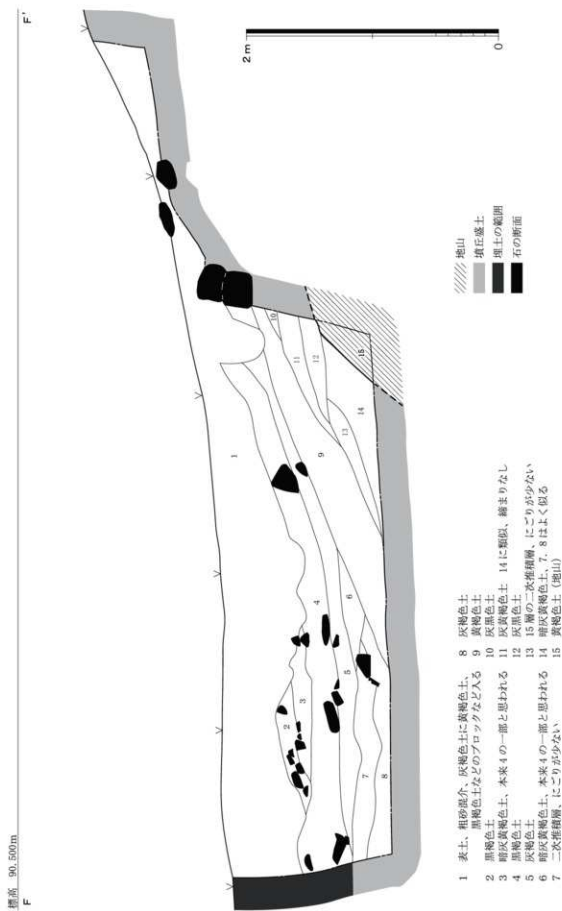
- //// 地山
- 墳丘盛土
- 埋土の範囲
- 石の断面



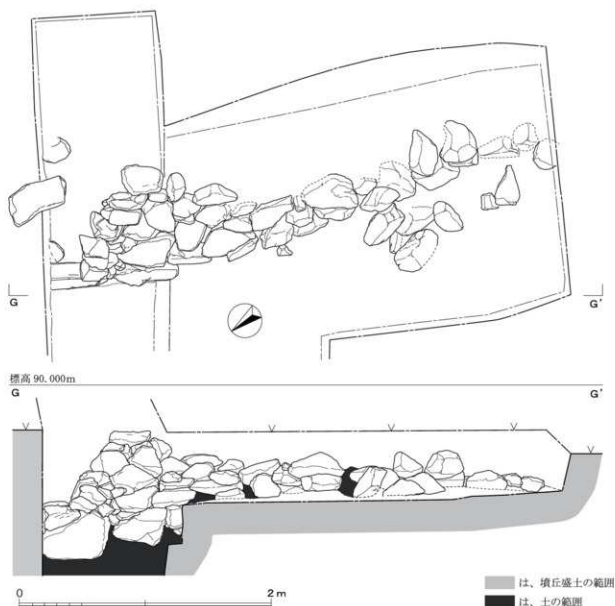
標高 89,000m



第13図 12号墳3トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図(1/30)



第14図 12号墳4トレンチ土層断面図 (1/30)



第15図 12号墳4トレンチ墳丘内列石実測図(1/30)

たと思われる。この層から須恵器杯及び蓋片が出土している。5層は灰褐色色土で12号墳へ向かって傾斜していることから墳丘盛土であると考える。同様に6層から9層についても盛土であると判断した。147号墳の墳丘内列石は6層の上に積み上げている。8トレンチで確認された5層や9層といった墳丘盛土は、12号墳へ向かって上り勾配であり、12号墳の墳丘盛土と考えられる。しかし、5層下である7層や8層が147号墳の墳丘内列石の下に積まれており、12号墳と147号墳との先後関係は確定できず、同時に築造された可能性も考えられる。墓道からは須恵器の杯、甕片が出土し、また、最下層の褐色土からは縄文土器が出土している。前述したように8トレンチ3層から4層より出土した須恵器杯から、5層から7層は盛土と考えて差し支えないものとする。

9トレンチ(第21図)では、墳丘内列石の配置状況を確認した。8トレンチと同様に羨道天井石に取り付くように墳丘内列石が巡っている。堆積状況は、4層が黒色土になっており表土の可能

性が高い。7層は黄褐色砂であるが粒が細かく1トレンチのように上層に荒砂が見当たらないため、土石流の堆積とも判断し難い。土石流とは異なる堆積土であれば、5層と6層が墳丘盛土であると考えられる。8層は地山である。

12号墳の墓坑については、1トレンチでは堀方が確認できるが、2トレンチと3トレンチでは、墳丘内列石の内側にあり確認することができない。また、地山は西へ向かって下っており墓坑の掘り込みは東に向かうに従って深度を減じている。

玄室の中心から3トレンチと8トレンチで確認した墳丘内列石間の距離は長軸10m、2トレンチ及び4トレンチの墳丘内列石間の距離は6m程である。平面形は、7トレンチの状況から北東側では弧が緩い円弧で開口部へ向けて窄まる楕円形を呈している。墳裾については、4トレンチの土層から層の端部と玄室中央を半径とすると13.5～14mの円墳と想定することができる。墳丘盛土が断片的に確認されたのみで墳裾が断定できていないため、墳形を推定できる材料に乏しく、ここでは円墳と推定しておく。

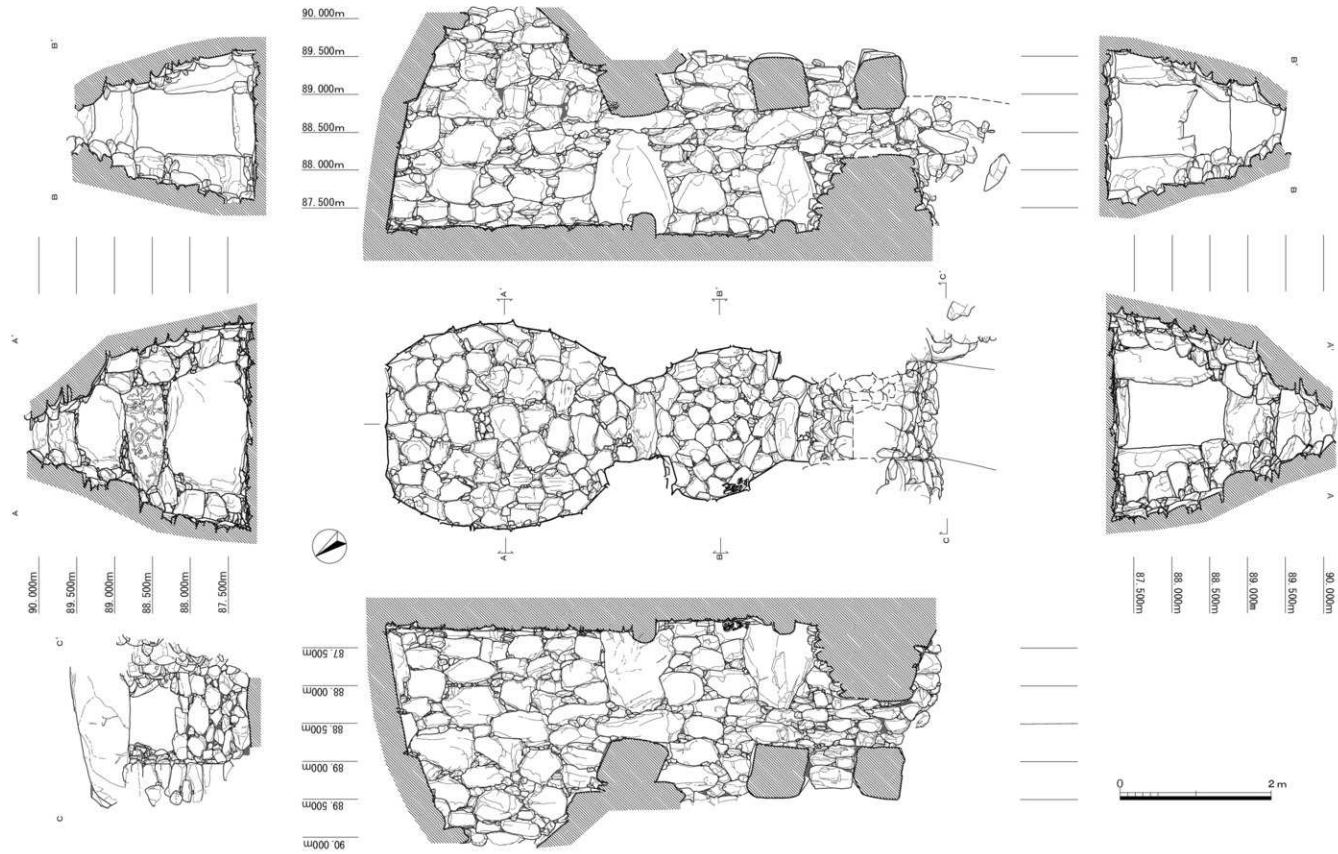
3) 主体部

石室は複式構造の横穴式石室で、玄室、前室、羨道の天井石は失われている。閉塞石は人頭大の礫を積み重ねており、上部の1/3が失われているものの、床から約1mが残存している。羨道の側壁は、閉塞石からやや延びたところで途切れている。現存している石室の全長は7.30mを測り、主軸はN-18°-Eである。法量の詳細については、第1表のA群12号墳を参照されたい。

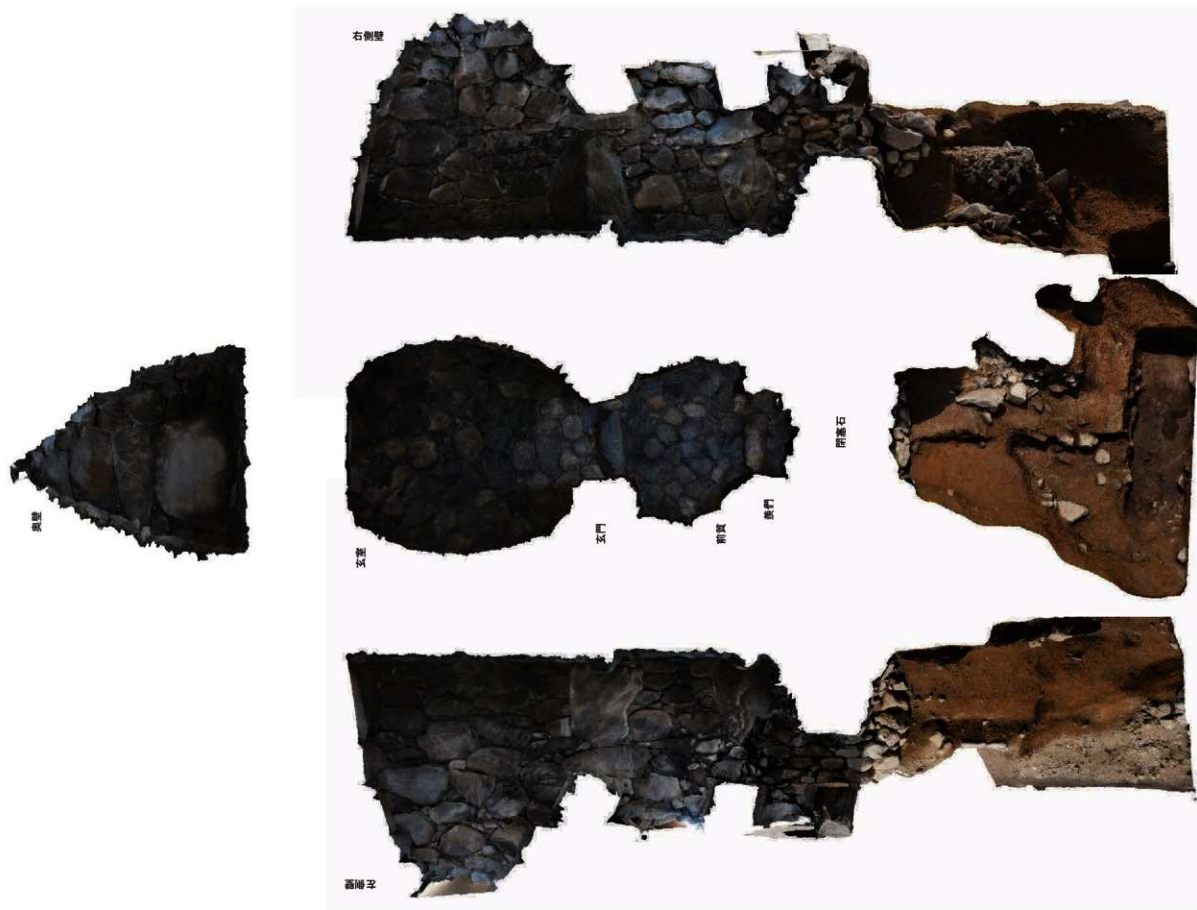
玄室は、胴張りの長方形プランである。胴張りは矢高の低い円弧を描き、側壁の中央辺りが最深部をなす。また、鏡石の左縁が屈曲しており、この部分を左側壁と面を合わせ壁体の一部としている。玄門右袖石の石材は丸みのある大柄礫を用いており、壁体と袖石の境が不明瞭である。前室についても胴張りの方形プランであるが、羨門袖石の位置が左右非対称であり歪んだ方形となっている。左袖石は張り出しておらず、袖石と壁体の境界が不明瞭となっている。床面は玄室、前室で1面のみ確認できた。床の高さは異なり前室が6～8cm低い。敷石は人頭大の扁平な礫を用いて貼り付けているが敷き方は粗雑で、石間の隙間は大きく表面の凸凹が顕著である。

壁体は大型の石材を用いて積み上げられるが、床面同様に粗雑である。そのため石間の隙間が大きく、表面は凸凹が激しい。石材の表面も凸凹が顕著であり、面を揃え平滑にする意図が感じられない。奥壁右側では敷石が奥壁の下に潜り込んでいる。

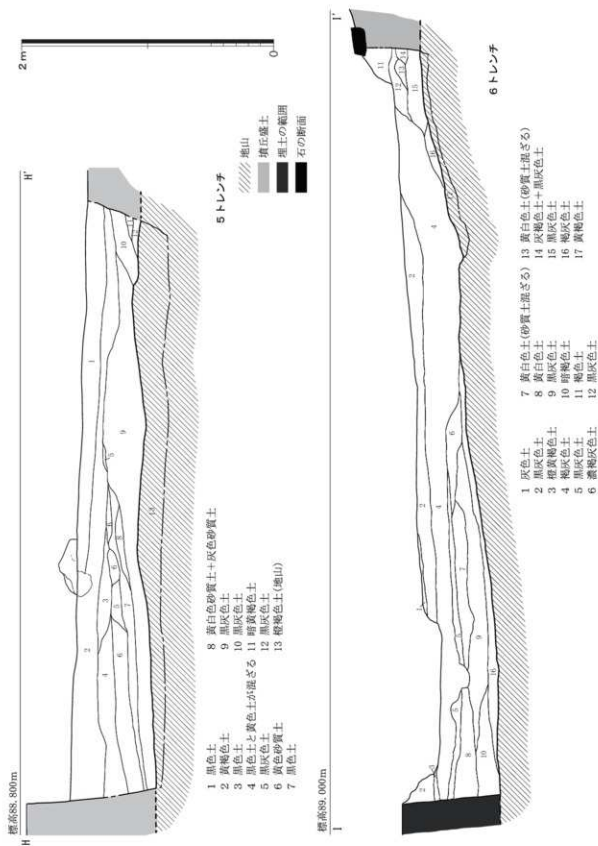
玄室奥壁は5段の石材を積み上げる。鏡石の正面右側では敷石が鏡石の下に敷かれており、敷石を敷いた後に鏡石を設置したと考えられる。側壁は7乃至8段石材を積み上げており、積み上げ工程は、4段階に大別できそうである。即ち、奥壁の2段までと玄門、羨門の袖石までの高さを第1工程とし、その上段、奥壁3段目と楣石を架構する高さまでを第2工程、楣石上に架構する前壁大型礫から奥壁3段目までが第3工程、天井部までの1乃至2段が第4工程に分けることで、工程を追う毎に持ち送りの角度が増していく。第1工程は1段目と2段目で小振りな礫を用いて積み上げる工程と3段目、4段目で大型の礫を水平に積み上げている工程にさらに細分することができる。



第 16 图 12 号填石宝实测图 (1/50)

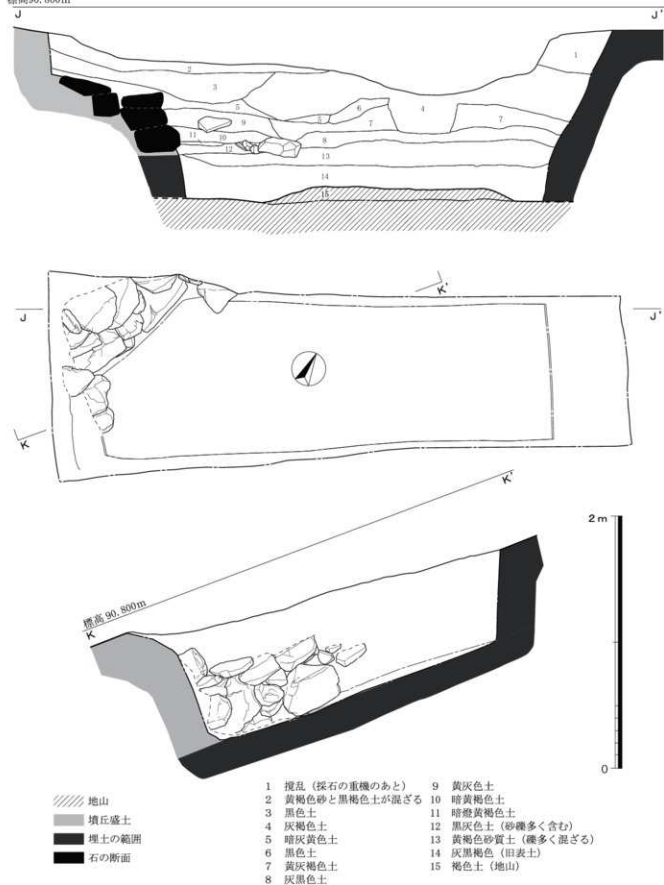


第 17 圖 12 号墳石室三次元兩像 (縮尺任意)

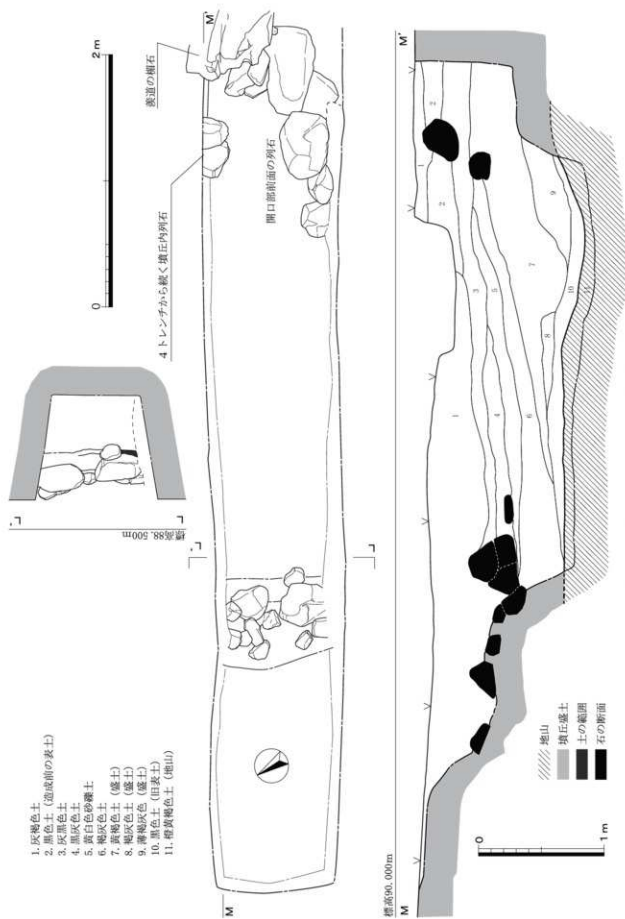


第18図 12号墳・148号墳5・6トレンチ土層断面図(1/30)

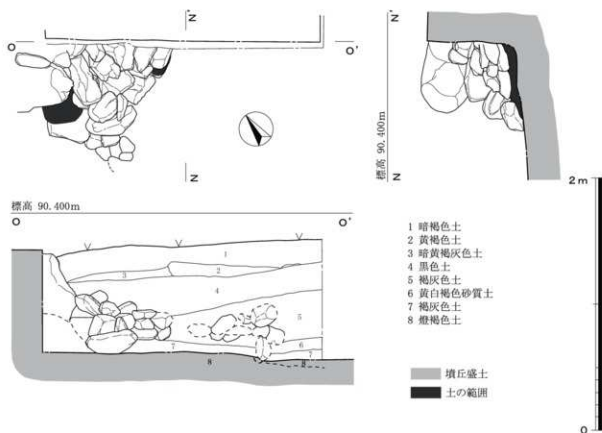
標高90.800m



第19図 12号墳7トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)



第20図 12号墳・147号墳8トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図 (1/30)



第21図 12号墳9トレンチ土層断面・墳丘内列石実測図(1/30)

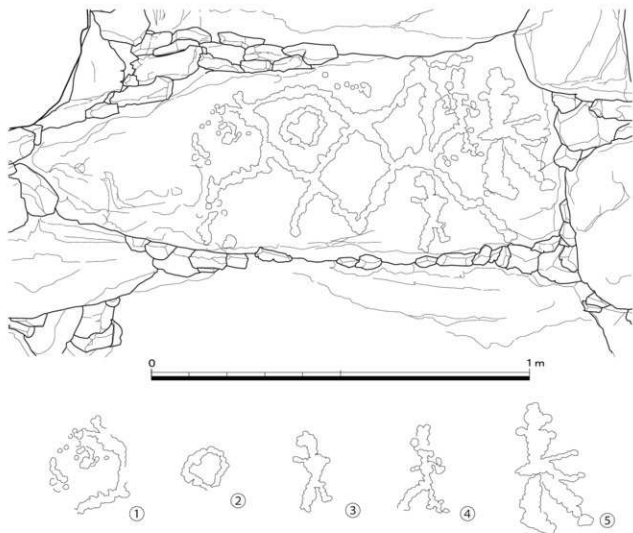
第2工程では、玄門袖側から奥壁へ向かって積み上げる工程が2段階に細分可能である。第3工程では、やや小振りの礫を積み上げ、第4工程では小型の礫を小口積みで迫り出しながら積み上げる。前室、羨道では、3つの工程に分けることが可能で、第1工程は、玄室と同じであるが、楣石の架構を第3工程で行っている。前室と羨道も玄室の工程に連動して積み上げられ、第1工程から第3工程まで積み上げられる。

敷石の敷設工程については、左右の側壁付近と中央部分の3つに施工範囲が分かれる。前室敷石も同様に左右で施工の範囲が分かれると考える。

玄室の床面からは、勾玉・丸玉などの玉類と耳環2つが出土している。出土場所は、玄室右奥からまとまって出土している。奥壁に近い方から耳環2つ、勾玉、管玉等が主軸方向に分布しており、原位置に近い状態で遺存していたものと推測される。須恵器は甕の破片など数点出土している。前室の左側壁では原位置を保った状態で須恵器の甕・高坏がそれぞれ2点、他に鉄鏃、刀子片が3点出土している。これらの遺物は最下層の暗褐色粘質土からの出土で、粘質土から上の層では全く出土していない。

4) 装飾

敲打による装飾が玄室鏡石の上石に確認され、文様は格子状の文様と円文、同心円文、人物3体である。装飾の部位は奥壁鏡石の上石1石のみに描かれており、この位置は、入口から見て目線の



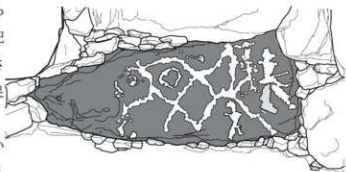
第22図 装飾詳細実測図(1/10)

位置となる。

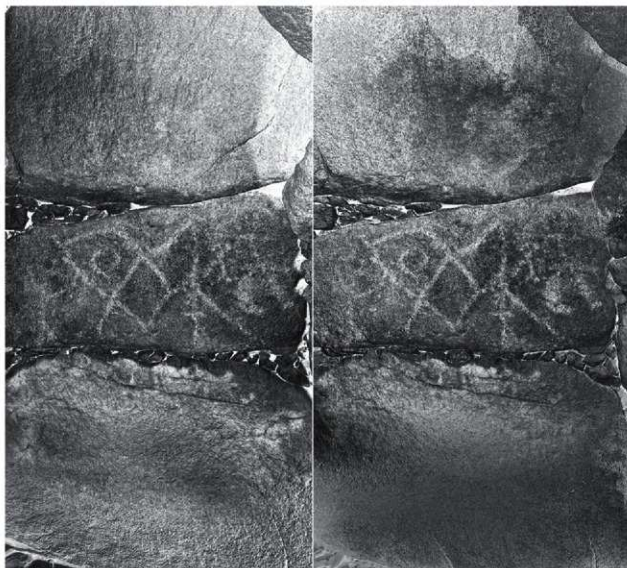
文様はざらついた岩肌の花崗岩に敲き刻まれ、僅かに窪んで見える。鑿のような工具で敲いたような円状の小さな窪みが観察できる箇所もある。窪みは径2cm程の大きさで、工具をずらしながら連続して敲いている。構図は、向かって左側に円文を2つ、右側には人物3体を描く。

①の円文は中央に敲打された痕跡があり、同心円文ともとれる。②の円文は円弧ではなく直線を組み合わせて円を表現しており歪な形状である。格子状の文様は、人物と円文を避けて配されており、ほぼ全面を埋めるように施文されている。人物3体は、ともに右を向き、足をやや開いた状態が描写されている。

右下には、足を広げた人物③が描かれている。頭部の表現は縦長で、何かを被っているようにも見える。人物④は、人物③と同様



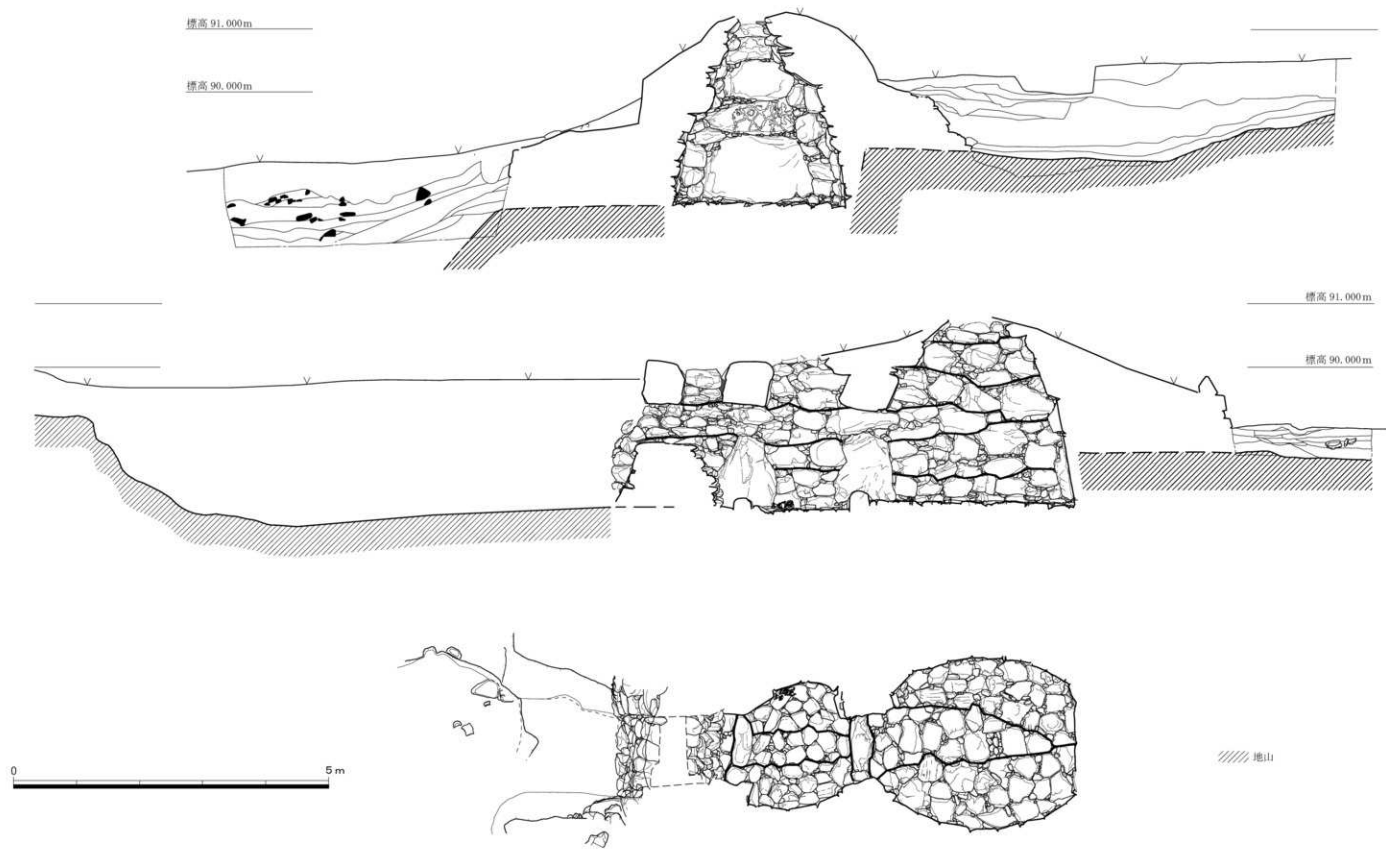
第23図 装飾強調図(1/20)



上：裝飾全体（濃度異なる） 下：人物拡大（濃度異なる）



第24圖 裝飾光拓本（縮尺任意）



第 25 图 A 群 12 号填筑丘断面图 (1/60)

に両手足を広げ頭部にあたる部分が縦長で何かを被る表現をしている。右足にあたる部分が直線的に描かれており、足を開いて中腰になっているようにも見える。右隣には、人物⑤が大きく描かれ、右足の脛と思われる部分が太く描かれている。足の上には横一文字に線が描かれ、さらに上にも右上から左下へ斜め線と円文が配されている。上半身にあたる部分は、蔽きが浅く形状が不明瞭であるが、頭部と手と思われる部分が広げたとように描かれる。

この他、ひかり拓本による装飾図文の確認を行っている。ひかり拓本は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所によって開発されたアプリで、石に刻まれた文字や文様に対し様々な角度で光を照射・撮影してできた影から、画像を合成することができる。撮影にあたって必要となるものは一般的な撮影機材（タブレットやデジタルカメラ、三脚、懐中電灯等の光源のみで、作成所要時間についても、合成する画像1枚につき10秒程度、5～10分で撮影と作成を完遂でき、撮影してすぐに結果を見ることが出来る。

第24図では、12号墳の装飾をひかり拓本で示している。今回、12号墳にひかり拓本を使用するにあたり、九州歴史資料館の岸本圭氏に協力を仰いだ。実測では、人物⑤の上半身の蔽打が浅く確認しづらいものであったが、不明瞭ながら上半身全体が浮かび上がっている。第22図よりも、手がもう少し延びているように見える。人物③と人物④では浮か出ており形の判別がしやすく、人物③の頭部にあたる部分の形状がよくわかる。

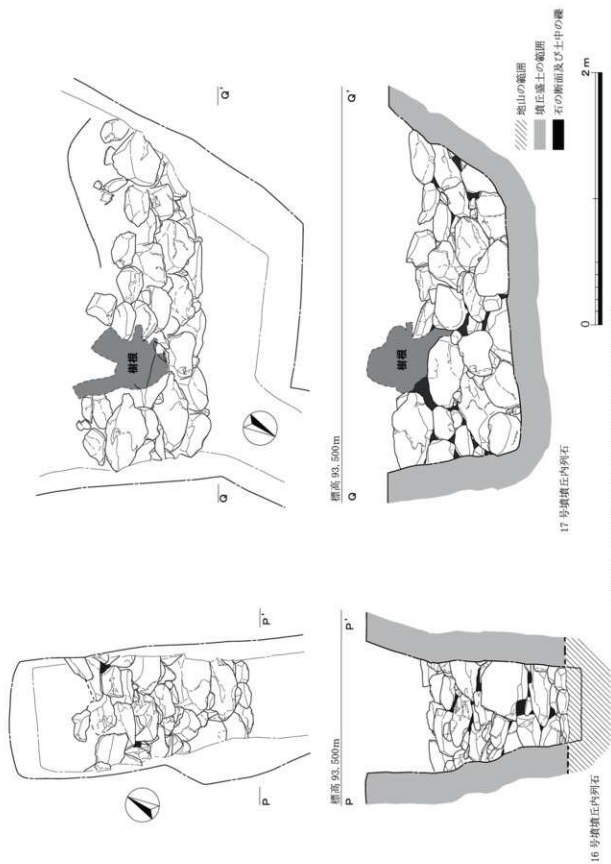
5) 出土遺物

須恵器・土師器

6世紀後半から7世紀前半の須恵器及び土師器が出土している。須恵器の坏や高坏、甕の底部等にヘラ記号が施されているものが多い。ヘラ記号のある須恵器、土師器が出土しており、「井」字状の格子、斜格子、「川」字状が多く、「#」、「V」の記号、「王」字状のもの、併行線のものがある。ヘラ記号を施す部位は、ほぼ天井部、底部、高坏では脚部の裏面であるが、18の平瓶では口縁部、19の平瓶で底部付近である。40の須恵器甕胴部で、シボリ痕が残る。31の土師器甕は見込みに格子状ヘラ記号、底面に調整とは異なる線状の痕が施されている。41の土師器坏の底部で、ヘラ記号のような沈線がある。45と46の須恵器の坏は土師質である。また、49から51は高台付坏で、8トレンチ上層、12号墳に近い地点から出土しており、12号墳に伴うものであろう。そのため追葬が8世紀まで及ぶものと考えられる。見込みに回転ナデの後、ナデ調整が施されているものが多く、須恵器は八女地方の窯の所産であろう。また、土師器についても須恵器同様に、八女地方に見られる見込みにナデ調整を施しており、八女地方との関連を想起させる。前室左側壁から出土した須恵器の高坏は、坏部と脚部の境が厚めに接合され境界が不明瞭である。

この他、43の阿高式系の縄文土器や62の弥生土器器台片等が出土している。他の調査区でも弥生土器が散見され、周辺に縄文、弥生時代の遺跡の存在が看取される。

装身具



第27図 17号墳 10トレンチ墳丘内列石実測図 (1/30)

玄室から玉類、耳環が出土している。玉類は総数64点が出土し、丸玉、小玉が大半を占める。割れて破損しているものなど、内7点については図示していない。色調は主に緑、青、紺色があり、勾玉、管玉は碧玉製である。丸玉と小玉の緑、青と紺色はガラス製である。この他、赤と黒色の丸玉があり、それぞれ赤色チャート、滑石製であろう。六面にカットされた算盤型の切子玉が出土しており水晶製である。

武具

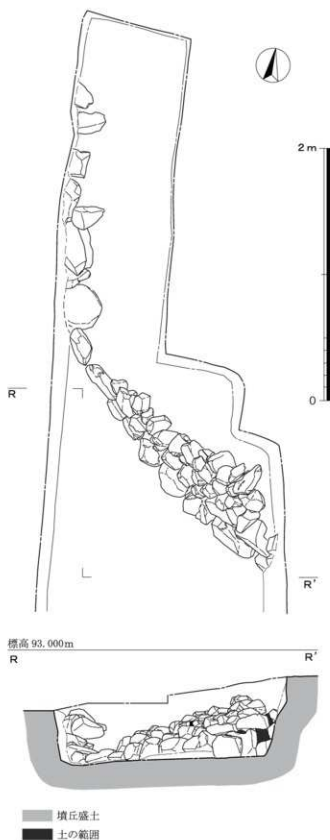
金属製品では、鉄鏃、馬具類が出土している。120の鏃には鏃身部分に別の鏃が張り付いている。鏃は、茎部分のみが残るものが多い。129は、鉄鏃の茎に周りに木片が残っている。その他にも鉄鏃の茎としたものの中には、一部、断面が円形のものがあり、弓金具とするべきかもしれない。

この他、白磁碗片が墳丘を覆う表土から出土している。また、近世陶磁器片が少量ながら表土から出土している。今回の調査では、土石流に関する層から近世陶磁器は出土していない。

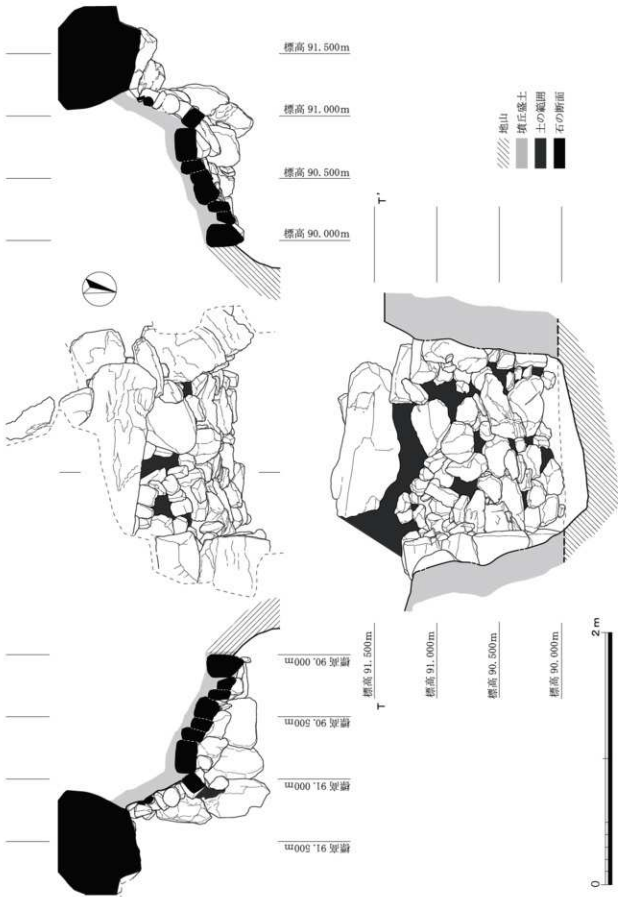
詳細は出土遺物観察表（第8表～第10表）を参照されたい。

(5) 15号墳の調査

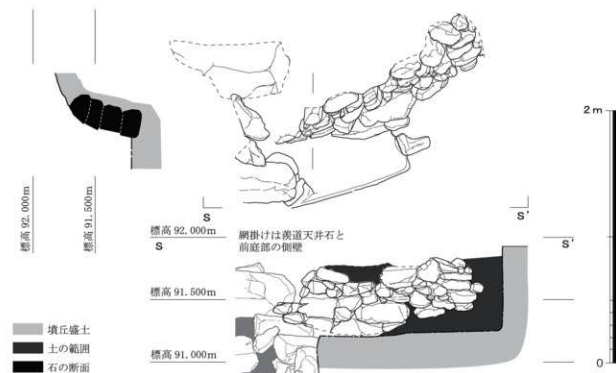
今回、調査対象としなかった15号墳については、上半分が崩壊してお



第28図 16号墳11トレンチ墳丘内列石実測図(1/30)



第29図 16号墳群塞石実測図 (1/30)



第30図 16号墳14トレンチ墳丘内列石実測図(1/30)

り、複室構造の横穴式石室であるか不明である。石室の周りに人頭大の角礫が一部、露出しており、この列石は墳丘内列石と考えられる。また、16号墳と近く、墳裾が重なっているようにも見える。昭和55年調査の152号墳、155号墳とも近く墓道の方向は不明である。残存する石室規模は、奥壁と推測する石材から開口部の天井石まで約5mを測る。墳丘規模は、石室の残存状況から径10m～12mと推測する。掘削していないため、出土遺物はないが、周辺で須恵器甕片を採集している。

(6) 16号墳の調査

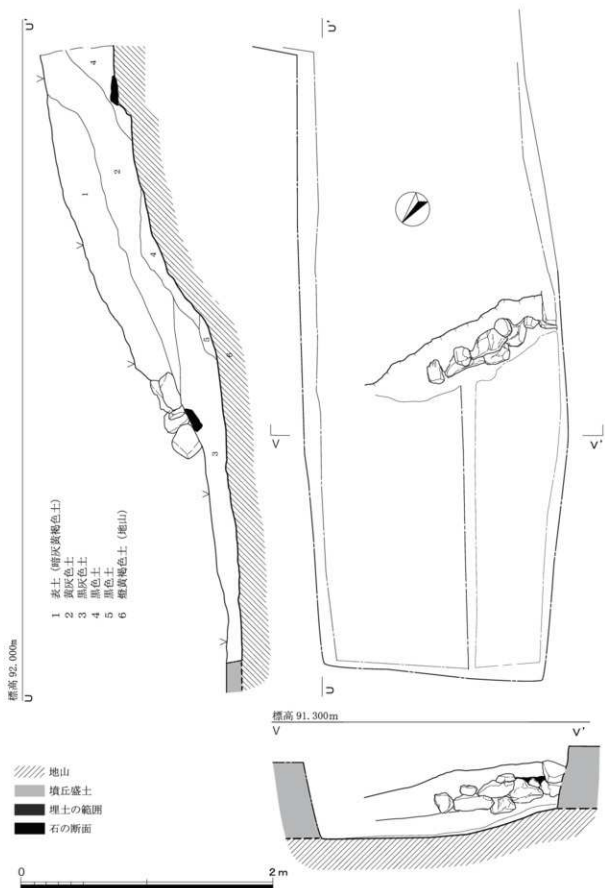
1) 調査前の状況

12号墳の南に位置する。調査開始時点では平坦地となっており、一見して墳丘と判別がつかない地形ではなく、僅かに巨石の一部が露出している状態であった。福岡県の分布調査時では、当該地に古墳が存在していることとなっており、巨石が古墳の残決と想定し巨石の南側に10トレンチを設定して墳丘の痕跡を探した。

2) 墳丘構造

その結果、トレンチからは16号墳に関連する列石を確認した。また、16号墳とは別の列石をトレンチの南端で17号墳の墳丘内列石を確認した。

16号墳は、墳丘内列石が検出された高さから推測して、主体部が良好な状態で残っていることが想定された。耳納北麓の古墳群では、一般的に、開口方向は西から南の間であり、当古墳でも開口部を西から南西と想定して11トレンチ(第28図)を10トレンチの西側に設定した。しかし、11トレンチでは、10トレンチで確認した列石の続きを検出したが、開口部の痕跡は確認できなかった。



た。そのため、10トレンチを北側に延長し16トレンチ（第29図）を設定して掘削したところ、閉塞石を確認した。さらに北側で薄く堆積する黒色土を確認し墓道を検出した。墓道から閉塞部までの間は土石流の影響を受け、黄白色の砂が厚く堆積している。前室の天井石が崩落していることが分かり、ここから石室内へ入ることができた。

10トレンチ（第26図）の堆積は、1層は攪乱土、2層は礫が混在している砂である。3層及び4層は礫が少なく土に締まりがあり盛土とも考えられる。5層と6層は、同質の堆積土がモッコ状の堆積を示していることから墳丘盛土の可能性もあるが、帯状に堆積している7層まで堆積土と判断した。8層は同質の土がモッコ状に2箇所確認されており、墳丘盛土と判断した。その直下である9層から13層までを墳丘盛土とした。14、15層については築造前の旧表土、16層が地山である。墳丘内列石は14層の上から積み上げており、検出された4段乃至6段の列石は、面を揃えて積み上げ目地が通っているが、12号墳同様に目地の隙間が大きく土が入り混んでいる。17号墳の墳丘内列石は、9層の上から積み上げている。

14トレンチで検出された列石（第30図）は、列石が16号墳の羨道天井石の端よりも内側（石室側）に寄せて積み上げられている。通常、天井石の端部は埋められている筈であり、この列石も墳丘盛土で埋められていたもので、この列石も墳丘内列石であると判断した。

これに対して、14トレンチ北側で確認された列石は、他の墳丘内列石とは異なって拳大もしくはより小さい礫を積み上げ、積み上げの角度も緩い。そのため、墳丘内列石ではなく、葺石ではないかと推測する。この列石から玄室の中心を半径として墳丘径を復元すると16.5mの円墳と判断した。14トレンチ北側（第31図）の土層堆積状況は、1層と2層及び3層は耕作土で、古墳に使用されたと思われる礫が大量に埋没していた。4層と5層は同一層で旧表土であろう。6層は地山としたが土に締まりがなく、墳丘盛土であることも考慮される。12号墳でも同様の傾向であるがモッコ状やブロックで堆積している場合は、墳丘盛土と判断できるケースもあるが、地山なのか、墳丘盛土あるいは後世の堆積土であるか等、明確に分けることが難しい。

3) 主体部

複室構造の横式石室である。盗掘の痕跡が見られ、石室内を掘り返した土を羨道部分に山積みしていた。その上に麒麟ビールの空缶が6本あり、賞味期限が1984年と書かれていた。そのため、羨道の一部は未計測であるが、石室の全長は、閉塞石の外側から図上で計測した値を記載している。

玄室では、敷石は確認できず、黒色の玉砂利が奥壁側に寄せられていた。今調査では完掘を行わず、床面の清掃のみに留めた。開口方向は、N-12°-Wで、全長は奥壁から閉塞石の外側までを頭上で計測した。7.60mを測る。石室の法量については、第1表に掲載している、参照されたい。

平面プランは胴張りのある長方形を呈し、壁体は、礫を8段乃至9段積み上げる。石材は12号墳同様に花崗岩を用いている。前室の平面プランはやや丸みのある方形を呈し、壁体は玄室の石材と比べて小振りの礫を用いる。玄門側、奥壁側に一部、敷石が確認できる。

前室でも8乃至9段を積み上げる。前室床面には、前室の天井石と思われる扁平な大型礫がある。



第32圖 16号墳石室展開画像(縮尺任意)

前室では、敷石が確認できなかった。

墓道の黒色土から須恵器の坏・甕片が大量に出土し、前室及び羨道からは鉄鏃、馬具類が出土している。11 トレンチから1点6世紀半ばの坏が出土している。

4) 出土遺物

須恵器・土師器

須恵器の蓋坏は、6世紀後半から7世紀後半までと時期幅がある。16号墳でもへら記号の須恵器が多く、V字状のものが目立つが、12号墳では見られなかったU字状や緩やかな曲線のものがある。160の短頸壺は、口縁に自然軸が掛かる。また、162、163の横瓶は同一個体であろう。土師器も7世紀後半の坏、高坏が少量、墓道から出土している。

武具

鉄斧、鉄鏃、弓金具、馬具類が出土している。130から132は鏃の茎、平根の鏃は前室からの出土である。140の鏃は2枚重なっている状態である。馬具類については、134が金具の鋳で板の部分に欠損している。146と147については鉸具の一部であろう。148は先端が錆のため断面形状が判然としなが鉄斧である。168も袋状を呈す。鉄斧で錆が進行しているものの袋状の形状は留めている。168は14トレンチの北端から出土しており16号墳に伴うか判断できない。

(7) 17号墳の調査

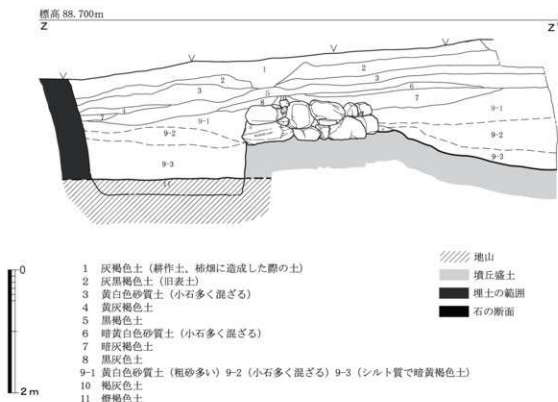
10トレンチを設定して16号墳を確認した際に、トレンチの南端で列石を確認した。さらに10トレンチを南へ拡張した結果、石室を発見した。玄室、前室の天井石は無く、上部1/4が欠損しているが、残存状況は概して良好である。石室内は土砂で埋まっており、石材の一部は畑地に開墾した際に土留めとして石垣に転用されている。開口部も僅かながら痕跡が残っている。完掘を目指したが玄室内に天井石と思われる大型礫があり、また、古墳群を保存できる可能性がでてきたため掘削を中断した。前室は床面まで掘り上げている。

このような状況のため、主体部の規模については10トレンチと11トレンチで検出された列石から推定される玄室の中心部までの距離から推測し、径12m規模の円墳であろう。石室内からは、須恵器等の当該期にあたる遺物は出土していない。

(8) 147号墳の調査

12号墳から延びる墓道と151号墳の墳裾の状況を確認するために12トレンチ(第33図)を設定した。その際、147号墳の列石及び墓道を確認した。土層断面から土石流の堆積が確認でき、1層から7層まで3回に及ぶ土石流の痕跡が確認できる。墓道直上まで土石流の堆積土が覆っているが、地山である褐色土は、1トレンチの5層と同じものである。

列石は、主体部から南西方向に延びており、石室の主軸はN-24°-Eと推測される。墓道に沿って2乃至3段に積み上げられた列石が延びる。右側壁の上には列石が配されており、石室を囲う墳



第33図 147号墳12号トレンチ土層断面図 (1/60)

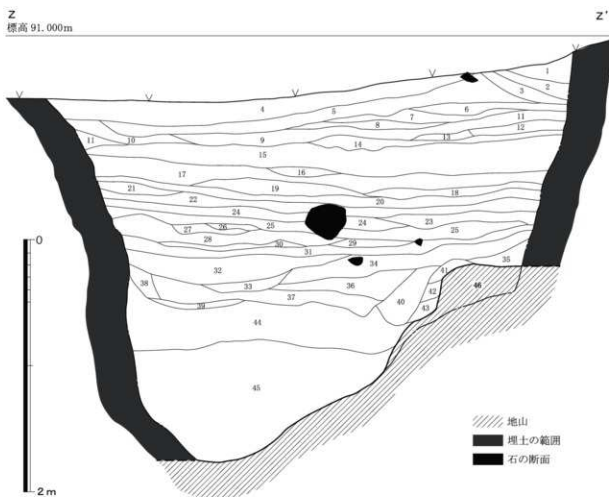
丘内列石と考える。墓道に沿う列石側壁が露出していたことは確実であり、墳丘内列石が盛土にどのように覆われていたか痕跡が残っておらず、ここで判断することはできない。また、墳丘内列石の下には墳丘盛土が積まれているものと考えられる。

図示していないが、雨のためトレンチの壁が崩れ落ちた際に閉塞石が確認できた。前庭部から墓道にかけて両側壁に礫が2段乃至4段、積み上げられる。左側壁は、墓道に沿って南西に緩やかに湾曲する。東方約1.5kmに所在する山王古墳群2号墳では、突出部と呼称する開口部横に方形を呈した台状施設が確認されている。147号墳の側壁も同じような構造となっていることも考えられる。確認された列石先端から玄室辺りまでの距離から墳丘径は12m強と推測される。

主体部は、玄室の天井石が欠損しているため、複室構造の横穴式石室であることが確認できる。前室は埋没しており、保存状態は不明である。開口方向は南西である。出土遺物は、前庭部より鉸具が2点出土した他、玄室の埋土上から須恵器甕片が出土している。

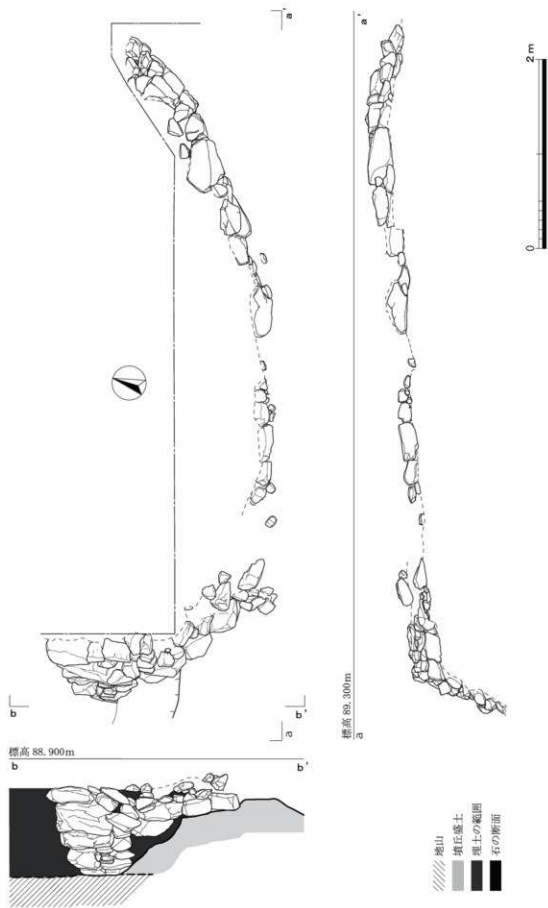
(9) 148号墳の調査

12号墳の墳裾を確認するため、北側を拡張した際に列石を確認した。12号墳、148号墳との間で西に向かって下る帯状の窪地が確認できるため、古墳の境界とも考えられる。148号墳の列石は、主体部を中心に楕円形に巡っている。この列石も5トレンチの堆積状況から盛土内に配されているものと想定され、墳丘内列石であると考えられる。開口部は深く掘り込まれており、比高差は80cm程

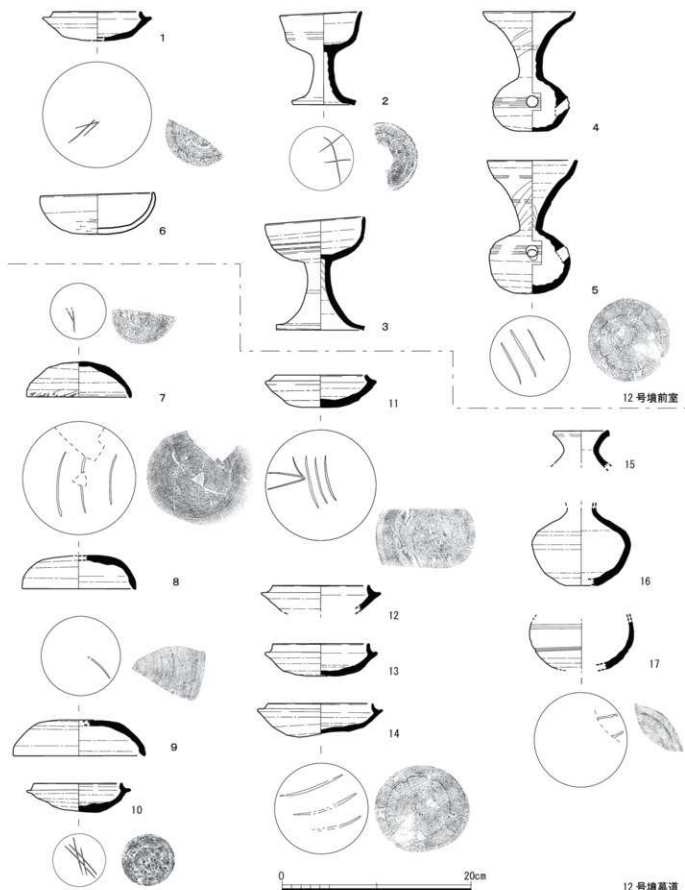


- | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 黒色粘土 | 19 暗褐色粘土 (2~3mm 大の礫含む) | 37 黒色+暗灰色砂 (5mm 大の礫含む) |
| 2 暗灰色砂 | 20 暗黄褐色砂 (2~5mm 大の礫含む) | 38 黒色粘土+暗黄褐色砂 |
| 3 黒色粘土 | 21 暗黄褐色砂 | 39 暗灰色+暗黄褐色砂 |
| 4 黄褐色砂 | 22 黒色粘土 | (5mm 大の礫含む) |
| 5 暗灰+黄褐色砂 | 23 黒色粘土 (暗褐色砂質土含む) | 40 暗灰色砂+暗黄褐色砂 |
| 6 褐色粘土 | 24 黒色粘土+暗黄褐色砂 | (2~3mm 大の礫含む) |
| 7 暗黄褐色砂 | 25 黒色粘土 | 41 暗黄褐色砂+暗灰色砂 |
| 8 暗褐色粘土 | 26 暗黄褐色砂 (黒色粘土含む) | 42 暗黄褐色砂 (2~10mm 大の礫含む) |
| 9 黒色粘土 | 27 暗灰色砂 | 43 暗灰色砂 (5mm 大の礫含む) |
| 10 黒色粘土+黄褐色砂 | 28 暗黄褐色砂 (2・3mm 大の礫含む) | 44 暗黄褐色砂 |
| 11 黒色粘土 | 29 暗灰色+黒色粘土 | 45 黄褐色粘土+砂 |
| 12 暗灰色シルト | 30 暗灰色粘土 | 46 黄褐色砂 |
| 13 黒色粘土+黄褐色砂 | 31 黒色粘土 | |
| 14 黒色粘土 | 32 暗黄褐色砂 (2~5mm 大の礫含む) | |
| 15 暗黄褐色土砂 (2~5mm 大の礫) | 33 黒色粘土 | |
| 16 暗褐色粘土 | 34 暗灰色粘土+砂 (5mm 大の礫含む) | |
| 17 黒色粘土 (2~3mm 大の礫含む) | 35 灰色粘土+砂 (2~3mm 大の礫含む) | |
| 18 黒色粘土 | 36 灰色砂 (2~3mm 大の礫含む) | |

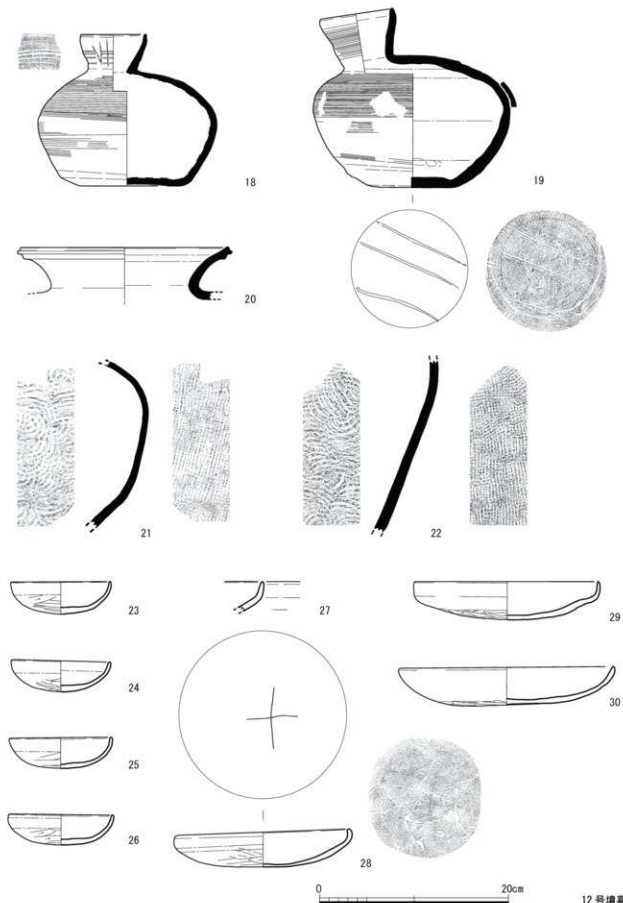
第35図 12号墳13トレンチ土層断面図 (1/30)



第36図 148号墳墳丘内列石実測図(1/40)

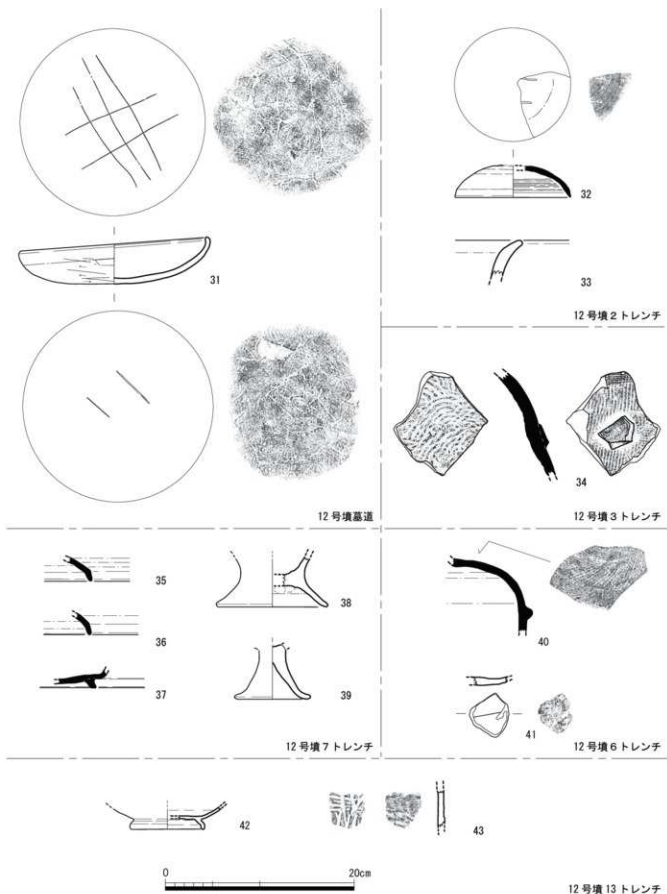


第37图 出土遺物実測図①(1/4)

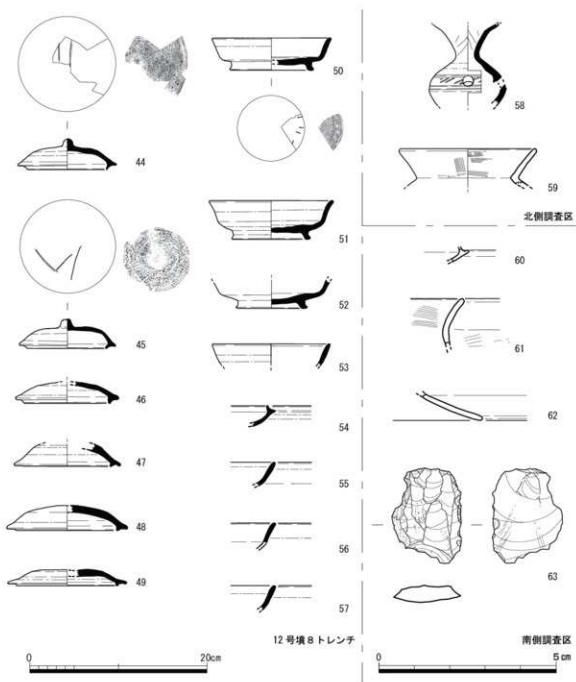


第38図 出土遺物実測図② (1/4)

12号墳墓道



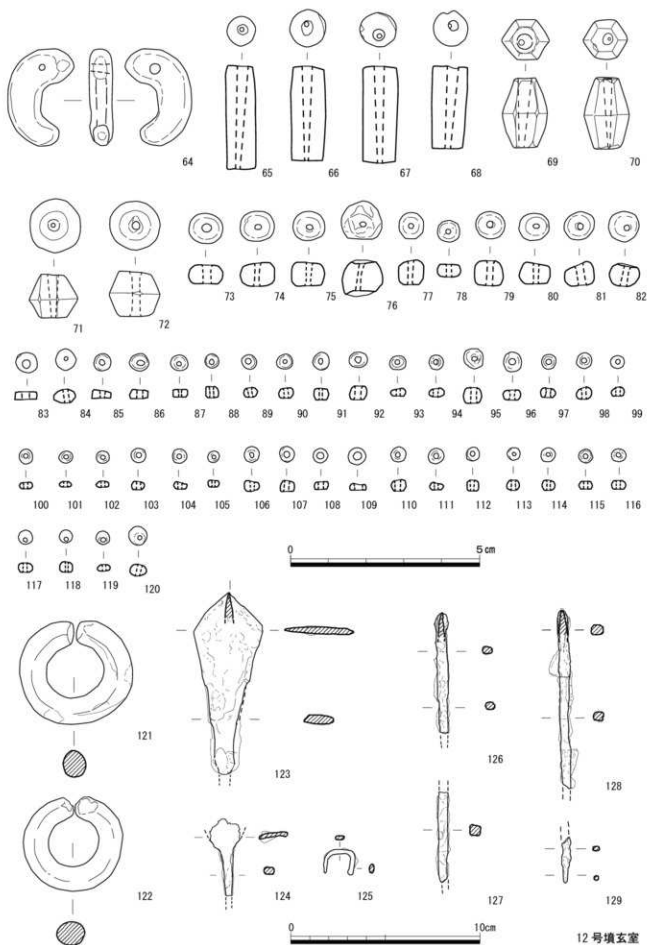
第39図 出土遺物実測図③ (1/4)



第40図 出土遺物実測図④ (1/2・1/4)

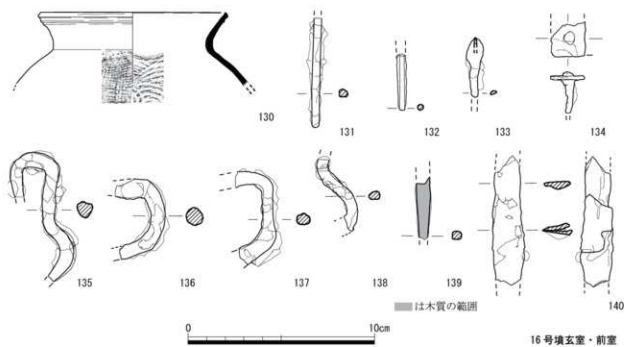
である。前底部、墓道に沿って列石が配されていた。墳丘の形態は楕円形で、推定される墳丘規模は、8 mから10 mの規模になると推測する。5 トレンチの堆積状況から列石下には墳丘盛土が積まれ、地山は、閉塞石前面の墓道床面と同レベルの高さではないかと推測する。

15 トレンチを設定し主体部の確認に努めた結果、複室構造の横穴式石室であることが判明した。しかし、採石により玄室は激しく損傷しており、図化していない。右側壁の一部のみが確認できた。前室も半壊状態であるが左右側壁が2 段階残存している。前庭部において、須恵器甕片が大量に出

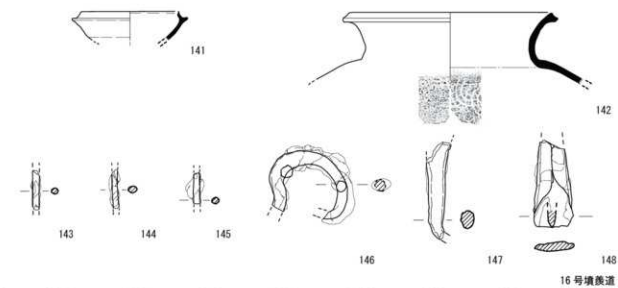


第41図 出土遺物実測図⑤ (1/1・1/2)

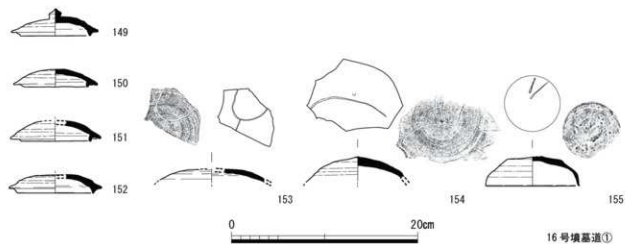
12号墳玄室



16号墳玄室・前室

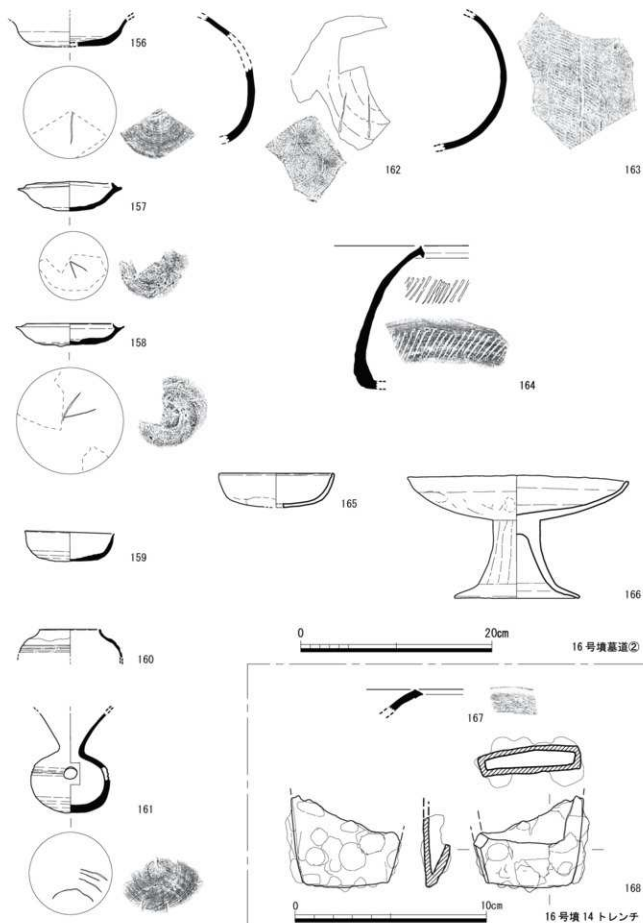


16号墳後道

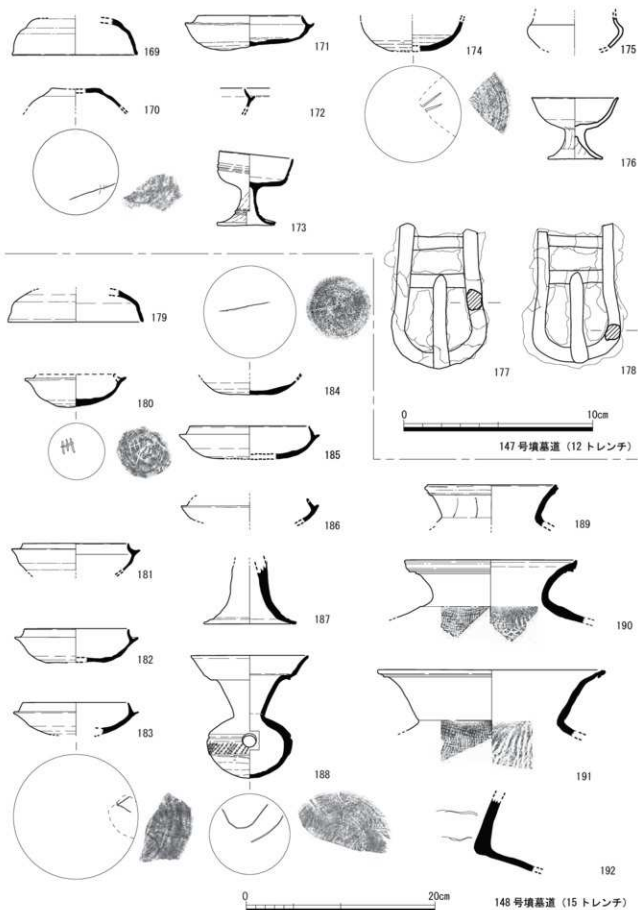


16号墳墓道①

第42図 出土遺物実測図⑥ (1/2・1/4)



第43図 出土遺物実測図⑦ (1/2・1/4)



第44図 出土遺物実測図⑤ (1/4)

第8表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	出土 遺物	種別	器種	法量			色調				質感		胎土	備考	遺物 登録 番号
				口径 (直径)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面	外面	内面			
1 第37区	12号墳 前室	須恵器	坏	(9.2)	6.5	(3.4)	灰	灰 にぶい黄 赤褐色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒を含む	ヘラ記号	202105 000990		
2 第37区	12号墳 前室	須恵器	高坏	8.7	9.1	9.8	灰 浅黄	灰 浅黄	回転ナデ 沈積	回転ナデ	砂粒を含む	ヘラ記号	202105 000982		
3 第37区	12号墳 前室	須恵器	高坏	10.2	0.5	12.0	黄灰 浅黄	灰黄	回転ナデ、回転ヘラ ケズリ後ナデ	回転ナデ・しぼり底 有り	細砂粒を含む	最大径 10.3	202105 000981		
4 第37区	12号墳 前室	須恵器	罐	(9.7)	6.4	12.6	灰 灰黄	灰 浅黄	回転ナデ、沈積 回転ヘラケズリ後 ナデ	回転ナデ	細砂粒を含む	穿孔有り	202105 000983		
5 第37区	12号墳 前室	須恵器	罐	9.5	3.1	14.1	灰 浅黄	灰 浅黄	回転ナデ、沈積 回転ヘラケズリ	回転ナデ・しぼり底 有り	細砂粒、砂粒 を含む	ヘラ記号	202105 000984		
6 第37区	12号墳 前室	土師器	坏	12.05	-	4.0～ 4.4	にぶい橙 褐色	橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 不定方向ナデ	精良	胴部から底部 に黒炭有り	202105 000103		
7 第37区	12号墳 墓道	須恵器	蓋	11.0	3.4	3.7	暗灰 にぶい赤褐 明黄褐色	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	微砂粒、細砂粒 を含む	ヘラ記号 刻目、工具痕	202105 000985		
8 第37区	墓道	須恵器	蓋	12.0	-	7.0	灰 暗灰	灰	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ後ナデ	微細粒、白色粒 子、黒色粒子	ヘラ記号	202105 000152		
9 第37区	12号墳 墓道	須恵器	蓋	(14.0)	-	(3.3)	黄灰	灰黄	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	砂粒を含む	ヘラ記号	202105 000986		
10 第37区	12号墳 墓道	須恵器	坏	9.4	-	3.0	灰 にぶい黄	灰 にぶい黄	回転ナデ ヘラケズリ後 ナデ	回転ナデ	砂粒、細砂粒 を含む	ヘラ記号	202105 000988		
11 第37区	墓道	須恵器	坏	11.7	3.4	3.4	灰 黄灰	暗灰 黒褐色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	接合ナデ 回転ナデ後ナデ	微細粒、白色粒 子1～2mm、雲 母・黒色粒子	スズ付着 ヘラ記号	202105 000153		
12 第37区	12号墳 前室部	須恵器	坏	(10.3)	(3.0)	(2.8)	灰黄	灰黄	回転ナデ	回転ナデ	砂粒、細砂粒 を含む		202105 000992		
13 第37区	12号墳 墓道	須恵器	坏	(10.2)	3.1	(3.4)	にぶい赤褐 黒褐色	黒褐色 にぶい橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ後 ナデ	回転ナデ	精良		202105 000991		
14 第37区	12号墳 墓道	須恵器	坏	11.2	3.2	3.6	黄灰 灰黄	黄灰 にぶい黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒、細砂粒 を含む	ヘラ記号 口縁の一部に スズ付着	202105 000989		
15 第37区	12号墳 前室部	須恵器	埴版	(5.9)	(3.4)	(3.4)	灰白 灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ後 縦方向ナデ	精良		202105 000996		
16 第37区	12号墳 前室部	須恵器	罐	-	-	(8.2)	灰 明黄褐色	灰 灰黄	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	砂粒、微砂粒を 含む。		202105 000995		
17 第37区	墓道	須恵器	罐	-	受部 径 9.7	(7.4)	灰 灰オリーブ	灰 灰白	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	微細粒	ヘラ記号	202105 000154		
18 第38区	12号墳 前室部	須恵器	平瓶	(7.0)	-	16.0	灰 灰オリーブ	灰	回転ナデ、沈積 カキ目。回転ヘラケ ズリ、指オシメ	回転ナデ	細砂粒を含む		202105 000997		
19 第38区	12号墳 前室部	須恵器	平瓶	8.1	12.4	18.9	灰 黄灰	灰 にぶい黄褐	回転ナデ、カキ目、 沈積、ナデ、 回転ヘラケズリ	回転ナデ 指圧痕	砂粒、細砂粒 を含む	自然釉、ヘラ記 号、焼きぶくれ、 他の須恵器 の一部付着	202105 000998		
20 第38区	墓道	須恵器	壺	218.0	(4.2)	(5.5)	黒褐色 黄灰 灰白	黄灰 灰白	回転ナデ、ナデ タタキ跡ナデ	回転ナデ後ナデ	微細粒、白色粒 子	焼きぶくれ	202105 000155		
21 第38区	12号墳 前室部	須恵器	壺	-	10.3	(19.4)	灰 黄灰	灰 黄灰	ナデ タタキ	タタキ	砂粒、細砂粒を 含む。		202105 000999		
22 第38区	墓道	須恵器	壺	-	-	17.9	灰白 青灰 暗灰	灰	回転ナデ・ タタキ・カキ目	回転ナデ タタキ	白色粒子、 黒色粒子多い		202105 000156		
23 第38区	墓道	土師器	坏	10.6	5.8	3.4	橙	橙	回転ナデ・ヘラケズ リ後縦圧痕	回転ナデ ナデ	精良		202105 000104		
24 第38区	墓道	土師器	坏	10.5	5.4	3.4	橙 にぶい黄橙	橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	門歯痕あり	202105 000105		
25 第38区	墓道	土師器	坏	10.9	6.0	3.3	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	化粧土	202105 000106		
26 第38区	墓道	土師器	坏	11.1	6.9	3.3	橙 にぶい黄橙	橙	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	化粧土	202105 000107		
27 第38区	前室部	土師器	壺	-	-	-	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	白色砂粒、雲母 を含む。精良		202105 000112		

第9表 益生田古墳群第5次調査出土土遺物観察表②

遺物 番号	出土 遺構	種類	器種	位置			色調				胎土	備考	遺物 登録 番号
				口径 (直径)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
28 第38図	高瀬	土師器	甕	18.8	5.9	4.0	にぶい黄 褐黄緑	にぶい黄	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	精良	外・内面に 門扉痕 ヘラ記号	202105 000108
29 第38図	前部	土師器	甕	19.7	(12.2)	4.0	黄	黄	回転ナデ 手持ヘラケズリ	回転ナデ	白色粒子、雲母 を含む、精良		202105 000111
30 第38図	前部	土師器	甕	(23.0)	11.2	(4.0)	黄	黄	回転ナデ 手持ヘラケズリ	回転ナデ	白色粒子、雲母 を含む、精良		202105 000110
31 第39図	高瀬	土師器	甕	20.2	10.4	4.9	黄 にぶい黄緑 褐灰	黄 にぶい黄	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	2～3mm大の砂 粒を少量含む	黒底有り ヘラ記号	202105 000109
32 第39図	2 トレンチ	須恵器	坏	(12.0)	-	3.4	暗黄灰	灰	横ナデ ヘラケズリ	横ナデ	0.5～1mm 砂粒 少量・細砂粒	口縁に自然釉 ヘラ記号	202105 000137
33 第39図	2 トレンチ	土師器	甕	-	(3.2)	(4.1)	黄 にぶい黄緑	黄	回転ナデ	回転ナデ	精良		202105 000113
34 第39図	3 トレンチ	須恵器	甕	-	-	(10.8)	灰 黄灰	灰 黄灰	タタキ(格子) カキ目	当て具痕 (青褐色)	精良	土器片付着	202105 000114
35 第39図	7 トレンチ	須恵器	蓋	-	-	(2.4)	にぶい黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	精良		202105 000121
36 第39図	7 トレンチ	須恵器	蓋	-	-	(2.3)	にぶい黄	にぶい黄	回転ナデ	回転ナデ	精良		202105 000122
37 第39図	7 トレンチ	須恵器	坏	-	-	(1.9)	灰	灰	回転ナデ 接合ナデ ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ後ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む		202105 000120
38 第39図	7 トレンチ	赤生土器	台付甕	-	-	(5.1)	明黄緑	黄緑	横ナデ	横ナデ オサエ	1～2mmの砂粒 少量、細砂粒、 1mm以上の砂も 少量混じる		202105 000158
39 第39図	5 トレンチ	土師器	高坪	-	-	(5.75)	にぶい黄	黄	ハケ目 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む	脚部径 8.0	202105 000115
40 第39図	6 トレンチ	須恵器	平瓶	-	-	(7.5)	灰 黄灰	灰 黄灰	タタキ後 カキ目	回転ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む	双耳	202105 000117
41 第39図	6 トレンチ	土師器	坏	-	-	(6.8)	にぶい黄	黄	ナデ	ナデ	精良	ヘラ記号	202105 000118
42 第39図	13 トレンチ	土師器	埴	-	-	(2.2)	黄	明黄	ヘラケズリ後 横ナデ、接合ナデ	横ナデ	微砂粒 化粧土		202105 000161
43 第39図	13 トレンチ	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	-	黒	黒	沈積	ナデ	細砂粒 1～2mmの砂粒		202105 000162
44 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	9.0	-	3.5	灰 黄灰	灰	回転ヘラケズリ 後ナデ	回転ナデ 後ナデ	1～2mmの砂粒 を含む	つまみ径 1.1 ヘラ記号	202105 000123
45 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	9.0	-	3.3	黄灰 灰	黄灰	ナデ、回転ヘラケズ リ、不定方向ケズリ 回転ナデ	回転ナデ後ナデ	精良	つまみ径 0.9 ヘラ記号	202105 000124
46 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	(9.8)	-	(2.4)	黄灰	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ後ナデ	1mm以下の砂粒 を含む		202105 000126
47 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	(10.0)	(13.6)	(2.5)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ヘラ切り ヘラケズリ ナデ	回転ナデ	精良		202105 000129
48 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	(11.6)	-	(2.8)	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ナデ	ナデ 回転ナデ	白色粒子を わずかに含む		202105 000128
49 第40図	8 トレンチ	須恵器	蓋	(11.4)	-	(1.8)	灰	灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む		202105 000126
50 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	(13.4)	-	3.6	灰	灰	回転ナデ 接合ナデ ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	1～2mmの砂粒 を含む	ヘラ記号	202105 000132
51 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	(14.0)	最大 (12.0)	4.3	オリーブ黄 灰	黄灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ 接合ナデ、ナデ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	1～3mmの砂粒 を含む		202105 000130
52 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	高台径 (8.2)	高台径 8.8	(3.2)	灰	黄灰	回転ナデ 接合ナデ ヘラ切り後ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ後ナデ	1～2mmの砂粒 を含む		202105 000131
53 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	(13.2)	-	(2.4)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	1～2mmの砂粒 をわずかに含む		202105 000136
54 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	-	-	(2.0)	黄灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	精良		202105 000127
55 第40図	8 トレンチ	須恵器	坏	-	(9.4)	(2.6)	灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	1～3mmの砂粒 をわずかに含む		202105 000133

第10表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表③

遺物番号	出土遺構	種別	形種	法量			色調		調態		助土	備考	遺物登録番号
				口径(長)	底径(幅)	高さ(厚)	外面	内面	外面	内面			
56 第40図	8 トレンツ	須恵器	杯	-	-	(2.6)	灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	1~2mmの砂粒をわずかに含む		202105 000134
57 第40図	8 トレンツ	須恵器	杯	-	-	(2.7)	灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	1~2mmの砂粒をわずかに含む		202105 000135
58 第40図	北 調査区	須恵器	罐	-	-	(9.2)	黄灰 灰	灰	回転ナデ 化粧 回転ヘラケズリ	回転ナデ		精良	202105 000137
59 第40図	北 調査区	土師器	甕	(4.3)	-	(15.4)	灰黄褐色 にぶい黄褐色	灰黄褐色 にぶい黄褐色	ハケ目 回転ナデ ナデ	ハケ目 回転ナデ ナデ	金雲母、0.5~1mm以下の細砂粒を僅かに含む		202105 000139
60 第40図	南 調査区	土師器	杯	-	-	(1.3)	にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ		精良	202105 000142
61 第40図	南 調査区	赤生土器	甕	-	-	(5.5)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色 橙	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目横ナデ	1~2mmの砂粒を含む		202105 000146
62 第40図	南 調査区	赤生土器	器台	-	-	(3.0)	にぶい橙褐色	橙	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	1~2mmの砂粒を含む	丹を塗布	202105 000150
63 第40図	5 トレンツ	石製品	剥片	2.7	2.0	0.6							202105 000116
64 第41図	12号墳 玄室	石製品	勾玉	2.6	1.8		深緑					重量: 3.35g	202105 000004
65 第41図	12号墳 玄室	石製品	管玉	2.7	0.8		深緑					重量: 3.15g	202105 000005
66 第41図	12号墳 玄室	石製品	管玉	2.5	0.9		深緑					重量: 4.45g	202105 000006
67 第41図	12号墳 玄室	石製品	管玉	2.5	0.9		深緑					重量: 4.15g	202105 000007
68 第41図	12号墳 玄室	石製品	管玉	2.1	0.9		深緑					重量: 3.75g	202105 000008
69 第41図	12号墳 玄室	石製品	切子玉	1.9	1.2		透明					重量: 3.05g	202105 000010
70 第41図	12号墳 玄室	石製品	切子玉	1.2	1.2		透明					重量: 2.75g	202105 000012
71 第41図	12号墳 玄室	石製品	切子玉	1.8	1.2		透明					重量: 2.95g	202105 000009
72 第41図	12号墳 玄室	石製品	切子玉	1.1	1.1		透明					重量: 2.85g	202105 000011
73 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	0.5	0.9		濃紺					重量: 0.65g	202105 000013
74 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	0.6	0.9		濃紺					重量: 0.65g	202105 000014
75 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	0.6	0.8		濃紺					重量: 0.6g	202105 000015
76 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	1.0	1.1		赤				チャート	重量: 1.2g	202105 000001
77 第41図	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.7	0.6		水					重量: 0.49g	202105 000002
78 第41図	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.6		濃紺					重量: 0.15g	202105 000003
79 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	0.6	0.8		濃紺					重量: 0.5g	202105 000016
80 第41図	12号墳 玄室	石製品	丸玉	0.5	0.8		濃紺					重量: 0.45g	202105 000017
81 第41図	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.6	0.8		濃紺					重量: 0.46g	202105 000018
82 第41図	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.8	0.6		青緑					重量: 0.4g	202105 000019
83 第41図	12号墳 玄室	ガラス製	小玉	0.5	0.6		紺					重量: 0.1g	202105 000020

第11表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表④

遺物 No.	出土 遺構	種類	器種	法量		色調				胎土	備考	遺物 発見 番号
				口径 (長)	高さ (幅)	器高 (深)	外面	内面	外面			
84 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	小玉	0.6	0.1		深緑				重量：0.15g	202105 000021
85 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	小玉	0.35	0.2		紺				重量：0.05g	202105 000022
86 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.5	0.2		紺				重量：0.05g	202105 000023
87 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.4	0.2		紺				重量：0.05g	202105 000024
88 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		紺				重量：0.05g	202105 000025
89 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		紺				重量：0.05g	202105 000026
90 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.4	0.3		紺				重量：0.05g	202105 000027
91 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.5		紺				重量：0.1g	202105 000028
92 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		紺				重量：0.1g	202105 000029
93 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		深緑				重量：0.05g	202105 000030
94 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.3		深緑				重量：0.05g	202105 000031
95 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.4	0.4		緑				重量：0.15g	202105 000032
96 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.2		青緑				重量：0.05g	202105 000033
97 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		緑				重量：0.05g	202105 000034
98 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		緑				重量：0.05g	202105 000035
99 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		青				重量：0.05g	202105 000036
100 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		青				重量：0.05g	202105 000037
101 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.1	0.4		青				計測不能	202105 000038
102 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.1	0.4		青				重量：0.05g	202105 000039
103 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		青				重量：0.05g	202105 000040
104 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.3		青				重量：0.05g	202105 000041
105 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.3		青				計測不能	202105 000042
106 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		黄緑				重量：0.05g	202105 000043
107 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		黄緑				重量：0.05g	202105 000044
108 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		黄緑				重量：0.05g	202105 000045
109 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.5		黄緑				重量：0.05g	202105 000046
110 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		黄緑				重量：0.05g	202105 000047
111 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		黄緑				重量：0.05g	202105 000048

第12表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑤

遺物 番号	出土 遺構	種別	器種	辺長			色相				胎土	備考	遺物 登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	高さ (厚)	外面	内面	外面	内面			
112 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.3		黄緑					重量：0.05g	202105 000049
113 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.3		黄緑					重量：0.05g	202105 000050
114 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.4		黄緑					重量：0.05g	202105 000051
115 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.4		黄緑					重量：0.05g	202105 000052
116 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.25	0.4		黄緑					重量：0.05g	202105 000053
117 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.2	0.5		黄緑					重量：0.05g	202105 000054
118 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	小玉	0.3	0.4		黄緑					重量：0.05g	202105 000055
119 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	小玉	0.2	0.4		黄緑					重量：0.05g	202105 000056
120 第41区	12号墳 玄室	ガラス製	丸玉	0.3	0.5		青					重量：0.1g	202105 000064
121 第41区	12号墳 玄室	青銅製	耳環	2.8	3.1	0.7	金		金銀			重量：16.7g	202105 000058
122 第41区	12号墳 玄室	青銅製	耳環	2.45	2.7	0.8	金		金銀			重量：11.1g	202105 000073
123 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(9.6)	(3.7)	0.6						重量：27.7g	202105 000074
124 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(4.1)	(1.6)	0.6							202105 000077
125 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鏃	(6.4)	0.8	0.4						重量：4.1g	202105 000076
126 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(4.8)	0.6	0.6						重量：3.6g	202105 000075
127 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(9.9)	1.1	0.5						重量：3.58g	202105 000078
128 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	1.42	1.8	0.3						重量：0.8g	202105 000080
129 第41区	12号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(2.4)	0.2	0.4						重量：0.7g	202105 000079
130 第42区	16号墳 玄室	須恵器	甕	(19.8)	-	(8.0)	灰白	浅黄	横ナゲ タタキ	横ナゲ 当て貝俵	微砂粒	-	202105 000164
131 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(6.0)	1.1	0.4						重量：4.2g	202105 000166
132 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(3.0)	0.5	0.3						重量：1.2g	202105 000168
133 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(3.2)	(1.0)	0.1						重量：1.9g	202105 000169
134 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鏃	(2.2)	(1.8)	0.2						重量：2.4g	202105 000171
135 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鋭具	(7.1)	1.4	0.9						重量：20.2g	202105 000172
136 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鋭具	(4.3)	(2.6)	1.0						重量：13.0g	202105 000173
137 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鋭具	(5.3)	0.7	0.6						重量：8.4g	202105 000174
138 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鋭具	(4.3)	0.6	0.5						重量：3.5g	202105 000175
139 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(3.3)	0.9	0.5						重量：2.6g	202105 000167

第13表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑥

遺物 番号	出土 層位	種類	器種	質量			色調				胎土	備考	遺物 登録 番号
				口径 (長)	高さ (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
140 第42区	16号墳 前室	鉄製品	鉄鏃	(6.90)	1.75	0.85						重量: 10.9g	202105 000170
141 第42区	16号墳 後室	須恵器	坏	(10.4)	-	(3.1)	灰	灰白	横ナゲ・ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 程度の砂粒少量	202105 000176
142 第42区	16号墳 後室	須恵器	甕	(23.8)	-	(7.7)	暗灰	灰白	横ナゲ・タタキ	横ナゲ・当て貝痕		微砂粒	自然軸 202105 000177
143 第42区	16号墳 後室	鉄製品	円金具	(2.15)	0.4	0.3						重量: 0.4g	202105 000179
144 第42区	16号墳 後室	鉄製品	円金具	(2.1)	0.5	0.4						重量: 0.5g	202105 000180
145 第42区	16号墳 後室	鉄製品	円金具	(1.7)	0.4	0.4						重量: 0.6g	202105 000181
146 第42区	16号墳 後室	鉄製品	絞具	(4.3)	4.8	0.7						重量: 0.4g	202105 000182
147 第42区	16号墳 後室	鉄製品	絞具	(5.2)	1.0	0.7						重量: 11.4g	202105 000183
148 第42区	16号墳 後室	鉄製品	鉄弁	(4.7)	2.1	0.5						重量: 11.7g	202105 000184
149 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	7.5	-	2.9	灰	青灰	横ナゲ ヘラケズリ ナゲ	横ナゲ		微砂粒。 0.5～1mmの砂 粒多い	202105 000187
150 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	6.8	-	1.9	灰	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 以下の砂粒	202105 000192
151 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	7.4	-	(2.2)	灰白	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒	202105 000192
152 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	(8.2)	-	(1.8)	灰白	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。1mm以 下の砂粒。1～ 2mmの石片少	202105 000194
153 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	-	-	(1.4)	浅黄橙	浅黄橙	ヘラケズリ	ナゲ		微砂粒	ヘラ記号 202105 000196
154 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	-	-	-	灰白	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 砂粒。1～2mm 砂粒少	ヘラ記号 202105 000191
155 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	(10.1)	-	3.3	灰	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 以下の砂粒少し 散じる	ヘラ記号 202105 000197
156 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	-	-	(3.1)	灰白	灰白	ナゲ ヘラケズリ	ナゲ		微砂粒。1mm程 度の砂粒。石片	ヘラ記号 202105 000195
157 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	9.1	-	3.2	灰白	灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5～ 1mmの砂粒やや 多い	ヘラ記号 202105 000196
158 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	9.1	-	2.4	灰	灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 以下の砂粒	ヘラ記号 202105 000195
159 第43区	16号墳 墓室	須恵器	坏	9.4	-	3.3	オリーブ灰	灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒。0.5mm 以下の砂粒	202105 000198
160 第43区	16号墳 墓室	須恵器	短頸壺	(6.4)	-	(2.9)	灰	灰白	横ナゲ	横ナゲ		微砂粒 0.5mmの砂粒少量	自然軸 202105 000188
161 第43区	16号墳 墓室	須恵器	壺	-	-	(10.8)	灰	灰	横ナゲ・ヘラケズリ 後横ナゲ・沈線 ヘラケズリ	横ナゲ		微砂粒 1mm程度の砂粒	自然軸 ヘラ記号 202105 000201
162 第43区	16号墳 墓室	須恵器	横瓶	-	3.4	-	青灰	青灰	ナゲ・オサエ	ナゲ・オサエ		微砂粒	ヘラ記号 202105 000199
163 第43区	16号墳 墓室	須恵器	横瓶	-	-	-	青灰	青灰	ナゲ・オサエ	ナゲ・オサエ		微砂粒	202105 000200
164 第43区	16号墳 墓室	須恵器	甕	(55.6)	-	(15.1)	暗灰	灰	横ナゲ	横ナゲ・沈線		微砂粒	自然軸 202105 000202
165 第43区	16号墳 墓室	土師器	坏	(11.8)	-	(3.6)	にぶい橙	橙	ケズリ後ナゲ 横ナゲ	横ナゲ		微砂粒	202105 000189
166 第43区	16号墳 墓室	土師器	高杯	23.1	-	12.9	にぶい橙	橙	横ナゲ・ケズリ後ナゲ ナゲ・ケズリ・横ナゲ	横ナゲ・ナゲ		微砂粒 0.5mmの砂粒	202105 000203
167 第43区	14 トレンチ	須恵器	甕	-	-	(2.4)	明焼灰	灰黒	横ナゲ	横ナゲ・沈線		微砂粒	202105 000206

第14表 益生田古墳群第5次調査出土遺物観察表⑦

遺物 番号	出土 遺物	類別	形種	度量			位置				胎土	備考	遺物 登録 番号	
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面				
168 第43図	14 トレンチ	鉄製品	鉄斧	(5.1)	6.1	(2.7)							腐食が激む	202105 000208
169 第44図	11 トレンチ	須恵器	杯	(13.2)	-	(3.9)	灰	灰	横ナゲ	横ナゲ				202105 000209
170 第44図	11 トレンチ	須恵器	杯	-	-	(2.1)	灰	黄灰	横ナゲ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂粒多 い		ヘラ記号	202105 000210
171 第44図	11 トレンチ	須恵器	杯	(11.1)	-	3.7	灰	青灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂付者、1mm 以下の砂粒		自然蝕	202105 000212
172 第44図	11 トレンチ	須恵器	杯	(12.0)	-	(1.9)	橙	にぶい橙	横ナゲ	横ナゲ	微砂粒			202105 000211
173 第44図	147号墳 墓道	須恵器	高杯	(7.8)	-	(7.8)			横ナゲ、接合ナゲ ナゲ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂粒			202105 000215
174 第44図	147号墳 墓道	須恵器	罐	-	-	(3.1)	灰	灰白	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂		ヘラ記号	202105 000214
175 第44図	11 トレンチ	土師器	模倣杯	-	-	(3.1)			横ナゲ	横ナゲ	微砂粒			202105 000213
176 第44図	147号墳 墓道	土師器	高杯	11.2	(5.9)	6.5	橙	橙	横ナゲ ヘラケズリ後横ナゲ	横ナゲ	微砂粒			202105 000216
177 第44図	147号墳 墓道	鉄製品	鉾具	(7.7)	5.2	1.1							重量：67.1g	202105 000217
178 第44図	147号墳 墓道	鉄製品	鉾具	(7.7)	5.6	0.8							重量：64.7g	202105 000218
179 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	14.2	-	(3.6)	青灰	青灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒			202105 000223
180 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	--	-	-	褐灰	灰褐	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒			202105 000222
181 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	(11.2)	-	2.9	褐灰	にぶい橙	横ナゲ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂少量			202105 000219
182 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	(11.0)	-	(3.6)	褐灰	灰褐	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒、石英 少、0.5mm以下 の砂粒少量			202105 000224
183 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	11.2	-	(3.7)	灰	灰	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒			202105 000226
184 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	-	-	1.6	灰赤	にぶい橙	横ナゲ ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂粒少量		内面に ヘラ記号	202105 000221
185 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	12.6	-	3.5	灰	灰			微砂粒 0.5mm以下 の砂粒少量		自然蝕	202105 000225
186 第44図	148号墳 墓道	須恵器	杯	-	-	(2.3)	橙	橙	横ナゲ	横ナゲ	微砂粒			202105 000227
187 第44図	148号墳 墓道	須恵器	高杯	-	-	(6.2)	灰	灰	ヘラケズリ後 横ナゲ	横ナゲ	微砂粒		自然蝕焼灰	202105 000228
188 第44図	148号墳 墓道	須恵器	罐	12.4	-	13.0	灰	灰	横ナゲ、沈線 ヘラケズリ	横ナゲ	微砂粒、0.5mm 以下の砂少量			202105 000220
189 第44図	148号墳 墓道	須恵器	罐	(13.4)	(9.8)	4.4	灰	灰オリーブ	横ナゲ	横ナゲ	微砂粒			202105 000229
190 第44図	148号墳 墓道	須恵器	罐	(18.2)	-	(6.7)	灰白	灰白	横ナゲ タタキ	横ナゲ タタキ	微砂粒			202105 000230
191 第44図	148号墳 墓道	須恵器	罐	(24.2)	-	(6.9)	灰白	灰	横ナゲ	横ナゲ タタキ	微砂粒、0.5mm 以下の砂粒少 量、1~2mmの 砂粒少量			202105 000231
192 第44図	148号墳 墓道	須恵器	罐	-	-	-	褐灰	灰	横ナゲ タタキ	ナゲ タタキ	微砂粒			202105 000232

土しているが、個体に復元できたものはない。出土遺物は、石室が半壊のため少ない。前庭部からは須恵器の甕片が多数出土しているが、個体に復元できるものはない。甕片に混じって模倣坏、須恵器坏が出土しているが、甕同様に個体に復元できるものは少ない。

180の坏及び184の蓋坏は焼成不良である。189の甕の頸部にはヘラ状の工具で縦方向に沈線が施されている。192の大甕では、口縁部の接合ナデが粗くつなぎ目が残っている。

(10) 各古墳の築造順について

今回は、12号墳をはじめとする5基の古墳を対象に調査を実施した。ここでは、これらの古墳の築造順について整理しておきたい。

12号墳は、前室から出土した須恵器から、6世紀後半に築造されたことが想定される。16号墳は、墓道が12号墳の地山整形及び墓坑掘削によって削平されていることから、12号墳に先行するものと考えられる。また、16号墳の列石を17号墳の盛土が覆っていることから、16号墳から17号墳への築造順が想定される。12号墳と17号墳では、直接、比較することができないが、前室の形状が12号墳よりも方形を呈しており17号墳が古いものと思われる。147号墳は前述したように12号墳と同時に築造された可能性が考えられる。148号墳については、切り合い関係、石室プランもよく分かっていないが、立地から想定すると最も新しいものと考えられる。

順に表すと16号墳⇒17号墳⇒12号墳・147号墳⇒148号墳となる。今回の調査で未着手の15号墳については、16号墳よりは新しいと言えそうである。

(11) 土石流について

12号墳1、12、13トレンチでは、古墳を埋没させた土石流の堆積土上に、粒の粗い黄色砂層と同土質の黒色砂層の互層が確認できる。第1トレンチの土石流の堆積土と同じような砂であることから、この堆積も土石流に起因するものであろう。黒色砂質土を表土とすれば、小規模な土石流が2～3回発生しているものと推測される。

昭和55年調査区には、土石流の痕跡は無い。当時の地形は、昭和55年調査区から12号墳、147号墳付近までは比較的なだらかな平坦面となっており、東側は緩やかな下り勾配であったと推測される。調査中、調査区の東隣で採石業者が掘削していた露天掘りの壁で堆積を観察すると、古墳時代以降に発生した土石流の堆積が確認することができ、谷筋を土石流が流れ下ったものと推測される。土石流痕跡の下に黒色土があり、これが古墳時代の地表面であると推測される。その下層にも土石流の痕跡が確認でき、その堆積は目測であるが10m以上あり、古墳時代以前にも大規模土石流が繰り返し発生していたことがわかる。

第5章 総括

(1) 調査成果の概要

今回の調査は、益生田古墳群A群の中央部付近にあたる標高90～100mの扇状地扇尖付近に立地する古墳群を対象として実施した。A群では古墳間の距離が近く、正円形の円墳として復元すると墳丘同士が干渉する関係にある。今回、調査を実施した12・147号墳の墓壇が、その南に位置する16号墳の前庭部を掘削して築造されているのはその一例である。また、このA群やその周辺では、過去の調査において彩色や敲打による装飾古墳が確認されており、複数の装飾古墳を含む円墳により構成されていたと考えられる。以下、調査成果の概要を述べる。

1) 益生田古墳群の構成

第3章でも述べたように、田主丸町の古墳群は昭和40年代に分布調査が実施され、益生田古墳群では150基以上の古墳が確認されていた。その中には、昭和20年代後半に破壊された彩色や敲打により施文された装飾古墳の存在が記録されており、今回、益永支群とした一群も益生田古墳群の一部と認識されていた。その後、昭和52年度の『福岡県遺跡等詳細分布地図』作成に係る踏査において、益永古墳群と益生田古墳群に分けられるとともに、古墳の分布傾向から益生田古墳群A～Dの4支群が設定されている。

益永支群は、益生田古墳群の中で最も標高が低い扇状地扇端付近に展開し、標高60m付近の緩斜面上に立地する。これまでの分布調査等により彩色系の装飾古墳と伝わる益生田古墳、敲打系の装飾古墳である益永9号墳が確認されており、元来は21基程の古墳で構成されていたと考えられる。益生田古墳群A群は、益永支群より標高の高い緩斜面から急斜面へ変化する扇状地扇尖付近に造営された古墳群で、6世紀中頃～7世紀初頭に及ぶ30基以上の古墳が確認されている。しかし、今回の調査において、現状では墳丘と認識できない場所から石室が発見されたことなどから、今後も新たに古墳が発見されることが予想され、さらに数が増える可能性がある。B群はA群の南に展開し、水縄活断層により形成された断層崖より標高が高い急勾配の斜面上に立地する。広範囲に38基が確認されており、中・小型の円墳で構成される。標高210m付近まで確認されているが、今後、さらに高い地点から古墳が発見される可能性もある。C群はB群の東に展開する一群で、B群との間には谷筋が存在したようであるが、繰り返し発生した土石流の影響で旧地形が読み取れない。16基が確認されているが、小規模な円墳が主体をなす。

益生田古墳群について最大の特徴は、装飾古墳が複数確認されていることであろう。記録としては、彩色系装飾古墳の益生田古墳（昭和40年代の調査）、円文の石材の記述（『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書第1集）、敲打系装飾古墳の益永9号墳（福岡県遺跡等分布地図）と昭和43年の浮羽工業高校考古同好会調査の古墳がある。この他、詳細不明なものとして益永185号墳（昭和40年代の調査）があり、同一の古墳群内で彩色と敲打という異なる技法の装飾古墳が複数存在していることが窺える。

2) 益生田古墳群A群の変遷

今回の調査は、益生田古墳群A群に所在する5基の円墳を対象として実施した。昭和55年の福岡県による調査では14基の円墳が調査されているが、いずれも横穴式石室を主体部とする円墳で、開口部は西方を指向する特徴がある。A群に所在する18基に及ぶ古墳の全容が把握できているため、ここでは石室プランと出土遺物を元に、その分類と変遷を検討したい(第45図)。

A類 玄室や前室の平面プランが方形のもので、玄室の側壁がやや胴が張る。145号墳、149号墳が該当する。玄門、羨門の楣石は、4～5段目付近の石材付近に架構しており、ある程度の高さを確保している。また、玄室天井は平坦で低く、天井石は2～3石を用いている。前室の天井高は低くなっており、羨道部は直線的に伸びている。墳丘規模は比較的大きく、一定の間隔をもって築造されており、開口方向は西方へほぼ一致している。

B類 玄室平面プランが胴張りのもので、玄室奥行きがA類と比して短くなり円形に近づいている。前室も胴張りによって方形からやや丸みがあるプランとなり、12号墳、13号墳、144号墳、150号墳が該当する。奥壁に5～6石程度を用いて天井部が高いB1類と、4石程度を用いて比較的天井部の低いB2類に細分される。玄室前壁もB1類に比してB2類が低く、B1類からB2類が派生したものと捉えることができる。6世紀後半から7世紀前半の須恵器が出土しているが、これらは互いに近接して築造され、開口方向は西方を意識しながらも一定していない状況が窺える。

C類 玄室の奥行きが短く平面プランが隅丸方形から丸形となり、前室プランもB類よりさらに丸みを帯びて、玄門、羨門との境があいまいになる。石室は複室ではあるものの小規模となり、146号墳、153号墳、156号墳が該当し、出土した須恵器から6世紀末から7世紀後半に比定される。A類、B類に比して羨道が短く、羨門に近いところで閉塞石を積み上げている特徴がある。前代の円墳の隙間を埋めるように近接して築造されている。

D類 石室は小型化した単室構造で、玄室は隅丸方形もしくは円形プランのものである。14号墳、151号墳、152号墳、155号墳が該当する。151号墳出土の須恵器は、6世紀末から8世紀前半までの坏が出土しており、その他の古墳からは7世紀半ばから後半の須恵器が出土している。C類よりさらに限られた狭い場所へ築造されるようになり、墳丘がほぼ確認できないものもある。

以上、益生田古墳群A群所在の古墳について石室の形態から分類を行ったが、周辺の類例との比較から築造時期を想定しておきたい。A類はうきは市屋形古墳群の原古墳を類例とし、築造年代は6世紀後半とされている。B1類は周辺では中原孤塚古墳、寺徳古墳、善院古墳群4号墳が類例としてあげられるが、これらの古墳も6世紀後半に比定されている。B2類はうきは市屋形古墳群珍敷塚古墳、大塚古墳群1号墳・2号墳、善院古墳群1号墳が類似し、6世紀後半に比定される古墳が多い。C類は限古墳群3号墳、麦生古墳群の西館古墳が類例としてあげられ、6世紀末から7世紀初頭に比定される。D類の類例は174号墳(旧D群1号墳)など近辺に多数見受けられるが、C類同様に6世紀末から7世紀初頭以降に比定されており、C類よりも遅れる最終段階に位置付けられると考えられる。

3) 益生田古墳群への土石流の影響

今回、石室内の掘り下げを実施した12号墳の調査では、石室内には土石流と想定される大量の流入土が確認された。特に12号墳の前室では、元位置を保った副葬品の須恵器を流入土が覆っており、石室内の堆積状況から、開口部もしくは前室・羨道天井部付近から土石流が流入したことが想定できる。この土石流は、羨道部と前室では天井部付近まで堆積しており、玄室では玄門部から流入した土が櫛石の高さ付近まで堆積していた。

12号墳の埋没原因となった土石流の発生時期を裏付ける資料は出土しておらず、その規模がどの程度であったかも不明であるが、石室内がほぼ充満されていたことから、大規模なものであったことが推測される。江戸時代の古記録である『崩山物語』によると、享保5年(1720)6月21日に発生した土石流災害によって、益生田古墳群の麓の村である益永村や麦生村周辺で甚大な被害が生じたことが分かる。益永村では人的被害はなかったものの、田畑や家財の多くが土石流に飲み込まれ、流入した石や砂によって平地に高さ五〜六十間(約100m)の小山を築いたとの記録も見られる。また、耳納山地に築造された中世山城である平家城の東にある天転堀の由来では、大規模土石流の発生が伝承として残っている。さらに遡れば『日本書紀』天武七年条(678)に見られる筑紫大地震では、水縄断層系益生田断層の活動によって、土石流が発生したことも想定できる。今回の調査で確認された土石流の痕跡が、上記の土石流のものとは断定はできないものの、古来より当地が土石流多発地帯であることは自明のことであり、12号墳以外の古墳でも土石流によって埋没あるいは大破するなど、耳納北麓地域に多大な影響を及ぼしていることが考えられる。

4) 墳丘構造

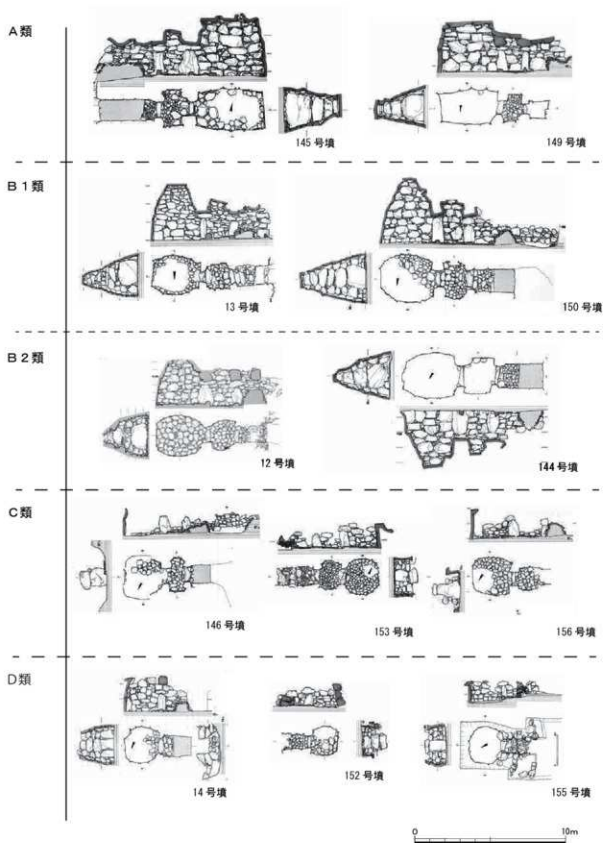
今回、調査を実施した益生田古墳群A群には、高さ4m程度、直径15mを越す比較的規模の大きい円墳が墳裾を接するように密集して造営されている。これは6世紀中頃から7世紀初頭にかけて、限られた範囲に円墳が造営され続けた結果と考えられる。これらには、すでに主体部が開口した古墳や天井石が抜き取られるなど盗掘や破壊を受けている古墳も多いが、概して当時の景観を保ったものとして極めて貴重である。

今回の調査では、墳丘と石室の構築過程を把握するため、12号墳の墳丘断ち割り調査を実施している。その結果、墳丘内に人頭大の自然石を列状に配した石列である「墳丘内列石」が確認された。これは過去に調査を実施した益生田古墳群C群においても確認されているもので、石室と墳丘を構築していく過程において施された土留めに起因するものである(第47図参照)。この技法は、当地の首長墓である田主丸大塚古墳や彩色系装飾古墳である寺徳古墳などでも確認されており、その分布範囲は旧筑後国竹野郡域に限られる。

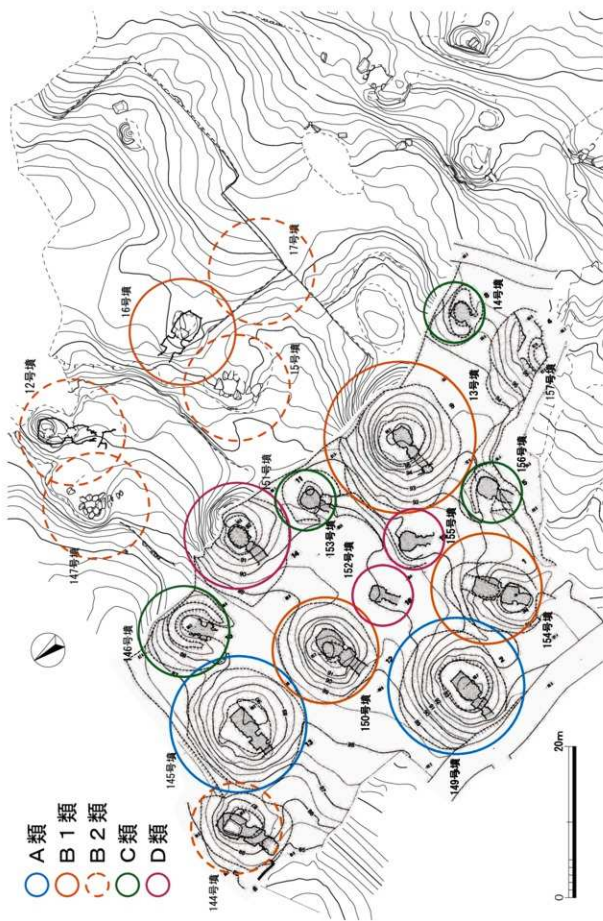
一方、12号墳の規模と墳形については、墳丘断ち割り調査においても不明確であった。これは、土石流や削平などの影響で、すでに墳丘の形状が失われているためであるが、概ね12〜14mの円・楕円形が想定され、石室規模に比して小規模な印象を受ける。一方、12号墳とその西側に隣接する147号墳、南側に位置する16号墳は地表面近くに天井部が位置しており、墳丘高4m程度を測

第15表 益生田古墳群A群 円墳一覧表

	墳径 (m)	石室構造	全長 (m)	玄室 (m)	前室 (m)	羨道 (m)	分類	備考
12号墳	16	複室 胴張り	7.30	3.4 × 2.3	1.9 × 1.95	2.0 × 0.96	B 2	敲打による裝飾
13号墳	15	複室 浅い胴張り	6.55	2.73 × 2.22	1.65 × 1.21	2.17 × 1.12	B 1	
14号墳	8	単室 胴張り	4.44	2.4 × 2.38	—	2.04 × 2.36	D	
16号墳	16.5	複室 胴張り	7.60	3.0 × 2.35	1.40 × 1.90	3.2 × 1.45	B 1	
144号墳	10 ~ 13	複室 浅い胴張り	9.23	3.95 × 2.95	2.20 × 2.31	3.08 × 1.58	B 2	
145号墳	14 ~ 16	複室 浅い胴張り	9.13	4.02 × 2.27	1.81 × 2.02	3.3 × 1.1	A	
146号墳	10	複室 胴張り	5.67	2.7 × 2.3	1.83 × 1.80	1.5 × 1.15	C	
149号墳	14.5	複室 浅い胴張り	7.07	3.92 × 2.3	1.65 × 1.77	1.5 × 1.07	A	
150号墳	11 ~ 13	複室 胴張り	8.88	3.75 × 3.14	2.11 × 2.40	3.02 × 1.38	B 1	
151号墳	13	単室 胴張り	5.82	2.95 × 2.06	—	2.87 × 1.36	D	墓道検出
152号墳	5	単室 胴張り	6.75	1.9 × 1.9	—	1.8 × 0.93	D	墓道検出
153号墳	9 ~ 10	複室 胴張り	6.15	2.41 × 2.28	1.67 × 1.87	2.07 × 1.45	C	
154号墳	9 ~ 13	複室 胴張り	8.85 m 以上	3.65 × 3.56	2.3 × 2.33	2.9 × 1.45	B 1	
155号墳	9 ~ 10	単室 胴張り	4.04	2.24 × 2.4	—	1.8 × 0.95	D	石列有り
156号墳	10	複室 胴張り	6.02	2.7 × 2.48	1.87 × 1.51	1.45 × 1.25	C	閉塞残存
157号墳	14 ~ 16	複室?	—	—	—	—	—	石材散乱
158号墳	—	—	—	—	—	—	—	未調査
159号墳	—	—	—	—	—	—	—	未調査



第45図 益生田古墳群A群の石室分類 (1/200)



第46圖 益生田古墳群A群 古墳分布と変遷図 (1/500)

る周囲の古墳とは異なっている。12号墳の墳丘断ち割り調査の結果、12・147号墳は、深さ3m程度大きく掘り込んだ同一の墓坑内に石室が構築されたことが判明し、その墓坑は東側に隣接している16号墳の前庭部を切り込んでいた。隣接する古墳を損じてまで墓坑を掘削した理由は不明であるが、墓坑を掘り下げることで墳丘の高さを減じ、墳径を小規模にして狭い面積へ多くの古墳を築造するための築造技術である可能性も考えられる。この築造技術で構築された古墳は墳丘高が低く抑えられているため、土石流や採石などで墳頂部や天井石が失われると、古墳自体が地表面下に埋没してしまう。そのため、現状では把握できていない古墳も多く存在している可能性も考えられ、元来、益生田古墳群A群に所在した古墳数はかなりの数に上るものと思われる。

以上のような墳丘・石室構築技法は、現状では旧筑後国竹野郡内でのみ確認できる。共通した墳丘・石室構築技法の広がり、同じ造墓集団の分布範囲を示しているとともに、社会的・経済的基盤を共有した集団の存在を想起させるものである。当地においては田主丸大塚古墳を頂点とし、寺徳古墳や中原塚塚古墳等の中規模古墳や16か所の群集墳に代表される古墳群を造営した共同体の存在と、その広がりが旧筑後国竹野郡域に及ぶものであった可能性を示している。

(2) 筑後川中流域における装飾古墳の変遷

筑後川中流域における最古の装飾古墳とされる日岡古墳（6世紀前半、全長71m、前方後円墳）は、北部九州でも最古級の彩色系装飾古墳で、同心円文や三角文を玄室全面に施し、肥後地域からの影響で成立したと考えられている。奥壁に整った同心円文を主なモチーフとする構図は、6世紀中頃に築造された下馬場古墳（6世紀中頃、径43m）、中原塚塚古墳（6世紀中頃、径17m）、寺徳古墳（6世紀中頃、径18m）にも採用され、装飾部位は複室構造となる石室全体へと広がっている。その後、6世紀後半～末頃に築造された西館古墳、久留米市草野町の前畑古墳、うきは市の珍敷塚古墳、原古墳、鳥船塚古墳では、奥壁と玄門の前室側など、壁面の一部に装飾を施すようになる。径15m程度の円墳であるこれらの古墳では、同心円文は小型化して主なモチーフとしては描かれておらず、具象文が増加するなど装飾古墳の展開の中で変容が認められる。これは、装飾図文で被葬者を囲む視点から、被葬者を装飾図文で見送る視点への変化によるものと言われている。

6世紀後半～末頃、装飾古墳の施文技法は彩色以外にも現れ、敲打と線刻のバリエーションが加わる。文様の種類は、彩色、敲打、線刻ともに円文・同心円文、三角文などの幾何学文の他、人物などの具象文を描き、施文技法は異なっているものの文様構成は同じ傾向が伺われる。12号墳では、幾何学文である円文・同心円文と格子状文、人物と思われる具象文を敲打により施文する。円文・同心円文は、日岡古墳以来、筑後川中流域の装飾古墳にとって主なモチーフとして描かれており、12号墳でも2つが確認できる。格子状文は連続三角文の割付線とも考えられ、3体の人物はいずれも手足を広げたように描かれており、彩色系装飾古墳である西館古墳の人物に類似している。西館古墳や12号墳の段階には、群集墳中の比較的小規模な古墳へも装飾が施されるようになっており、当初は首長墓へ採用された石室内への装飾行為が、時期が下るとともに首長層下位の階層へも広

がったことが想定される。西館古墳と12号墳は、築造年代、墳丘規模において大差はない。しかし、西館古墳は顔料を用いて人物、船、連続三角文、同心円文などを奥壁と玄室袖石に描いているのに対して、12号墳は奥壁の1石のみに円文・同心円文と格子状文、人物を描くなど限定的な構成となっている。これは石室内への装飾行為を行える階層が広がって行くに従い、装飾図文が有する本来の意味が変化していく過程と捉えることができ、敲打系装飾古墳の発生を彩色系装飾古墳の変遷の中に位置付けることが可能である。顔料が供給されない若しくは入手困難な階層に敲打技法が採用された可能性も考えられる。

また、12号墳の状況から6世紀後半には群集墳中の古墳へも装飾が行われていることが判明し、耳納北麓においては、「首長墓への導入⇒20m規模以上の中・大型墳へ波及⇒群集墳の中・小古墳への導入」という装飾古墳の展開が想定可能となった。装飾の有無やモチーフとして選択した文様構成には、被葬者層の生業や死生観などが反映されている可能性があり、装飾古墳の被葬者や造営主体、階層性など、耳納北麓に所在した被葬者集団の実態を把握できる可能性がある。

(3) 12号墳の装飾について

益生田古墳群においては、既往の調査により敲打系装飾古墳の存在が知られていた（益永9号墳、浮羽工業高校調査の古墳など）が、現存していないことや調査が古いこともあり、その存在自体の信憑性についても疑問視されていた。しかし、今回の調査で12号墳が確認されたことにより、益生田古墳群内に彩色系（益生田古墳など）と敲打系の装飾古墳が併存したことが確実となった。ここでは、描かれた図文と施文位置から、12号墳の装飾について考察を加えたい。

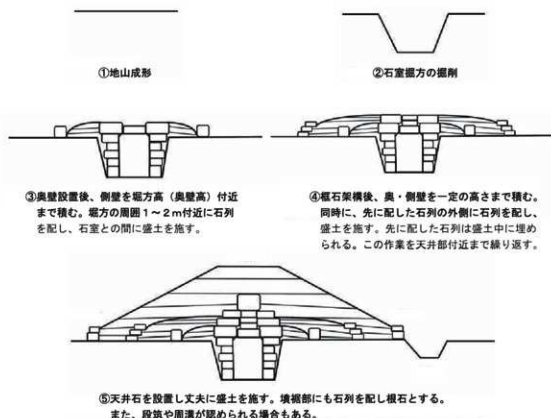
1) 図文構成について

12号墳の装飾は、奥壁鏡石の上段1石のみに施され、敲打により施文された円文・同心円文、格子状文、人物で構成される。円文は中央左側に2つ描かれているが、左側の円文は同心円文の可能性もある。人物は右側に最大3体が描かれており、これらを避けるように格子状文がほぼ全面に描かれている。

円文・同心円文は2つ描かれているが、それぞれ格子状文と干渉せず中央～左側にかけて描かれており、直径10～12cmを測る。先述のように、円文・同心円は日岡古墳以降、筑後川中流域の装飾古墳へ主なモチーフとして描かれていることから、12号墳においても同様に主要なモチーフとして採用されたものと考えられる。但し、小型化していることから、本来の意味合いから形骸化している可能性がある。

人物は最大3体確認できる。右上に2体、その左下に1体が描かれており、いずれも格子状文とは干渉しない。手や足を広げた様子は、益生田古墳群の西側に隣接する彩色系装飾古墳である西館古墳に描かれた人物に類似している。最も右側の人物には水平方向に線が見えることから、太刀などを身に付けた様子が描かれている可能性がある。

格子状文は、石材の左下を除くほぼ全面に描かれている。円文・同心円文と人物を避けるように



第47図 築造模式図

描かれており、これには彩色系装飾古墳に施される連続三角文の施文パターンとの類似性を指摘できる。連続三角文の分布は、肥後地域や筑紫平野、筑後川流域など広範囲に確認でき、装飾文様としては普遍的なものである。連続三角文の施文パターンを観察すると、主なモチーフとして描かれた円文・同心円文や具象文を取り囲むように、垂直方向や水平方向に割付線を設定した後に連続三角文を施したものと、主なモチーフの隙間を埋め尽くすように描かれたものが認められる(註1)。すなわち、嘉徳郡桂川町王塚古墳では、石屋形や玄室内部等に多くの連続三角文が描かれているが、これらの大半は垂直方向に規則性をもって描かれており、縦方向に割付られた連続三角文と言える。一方、八女市乗場古墳では、玄室奥壁や左側壁、前室右側壁などに連続三角文が描かれているが、水平方向に規則性をもって描かれた連続三角文が主体を成している。これらに対し、佐賀県鳥栖市田代太田古墳では、奥壁中央部に同心円文や馬などの主要モチーフを描いた後、その周囲を数個の三角形を一単位とする三角グリッドで埋め尽くすように描かれている。上記の例は一例であるが、連続三角文は主なモチーフとしては描かれるものではなく、主体となるモチーフを描いた後に、その周囲や隙間を埋めるために垂直方向や水平方向、三角グリッドなどの一定の法則性をもって描かれていると言うことができよう。

ここで12号墳に描かれた格子状文について見てみると、円文・同心円文と人物付近を除いた石材のほぼ全面に描かれており、連続三角文の描かれ方に類似している。すなわち、12号墳の主な

モチーフは円文・同心円文と人物であり、その周囲を連続三角文で埋めるために、割付の外枠線を描いた結果、石材のほぼ全面に格子状の図文が描かれた、と考えることができる。円文・同心円文と人物と干渉せずに描かれているのは、以上のような理由によるものと思われる。このことから、彩色系装飾古墳に何われる施文パターンは、敲打系装飾古墳にも引き継がれていると考えることができ、彩色系と敲打系の装飾古墳は同じ規則性に基づいて描かれていると言うことができる。

2) 施文位置について

12号墳の装飾は、玄室奥壁に据えられた鏡石の一段上、床面から1.4m付近の一石のみに施されている。奥壁鏡石には装飾は確認できず、一見、理解に苦しむが、同じような位置にのみ敲打により施文された例として、佐賀県三養基郡基山町の黒谷古墳群2号墳（以下、黒谷2号墳）がある。

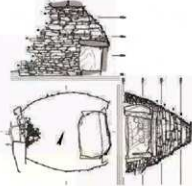
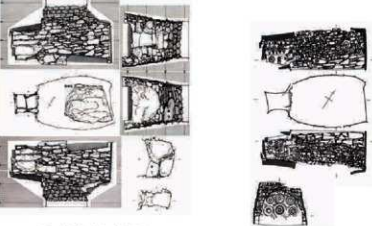
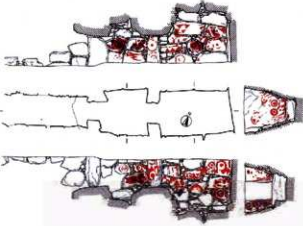
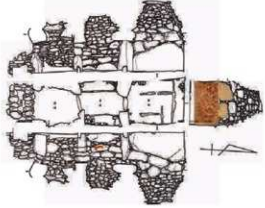
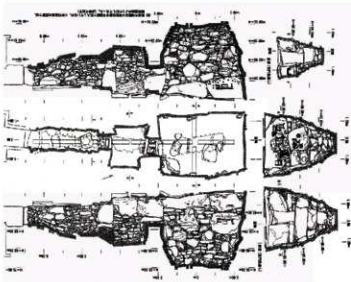
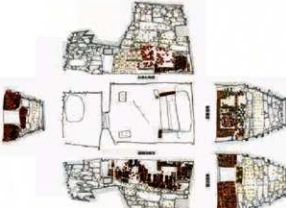

黒谷2号墳は、6世紀末頃に築造された小型の円墳で、単室の横穴式石室を主体部とする。文様は12号墳と同様に奥壁鏡石には描かず、鏡石の上に積まれた石材の中央部に同心円文が描かれている。この同心円文は、開口部から石室を覗いた際に人の目に入る高さで意図的に配されたものと考えられており（註2）、視覚的效果を期待したものと理解される。

同じような効果を意識したものとして、彩色系装飾古墳の石屋形への施文があげられる。八女市成合寺谷古墳や嘉穂郡桂川町王塚古墳などでは、石屋形天井石の正面部分に連続三角文や格子状文などを描いている。石屋形天井石の正面部分は、玄室を除いた際に真っ先に目に入る部分であり、目線に近い位置にあたる。これも石室を覗いた際に荘厳な印象を与える視覚的な効果を期待したものと考えられる。

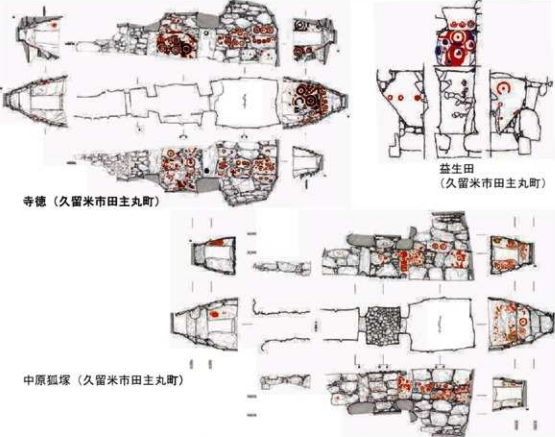
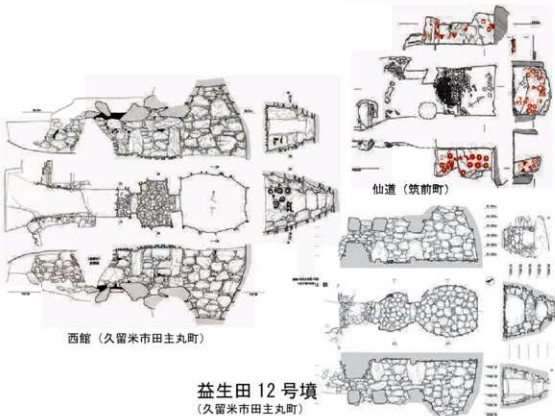
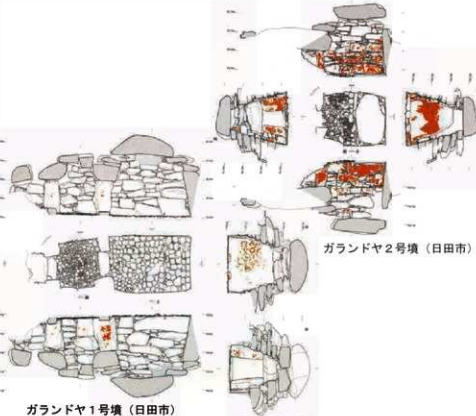

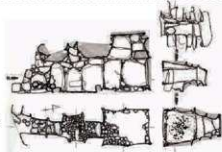
これらのことから推察すると、12号墳への施文が鏡石には施されず、鏡石の一段上の石材のみに施されているのは、彩色系装飾古墳の石屋形天井石正面への施文と同じく、視覚的效果を期待したものと考えることができ、ここでも12号墳の装飾に彩色系装飾古墳との共通点を指摘することができる。

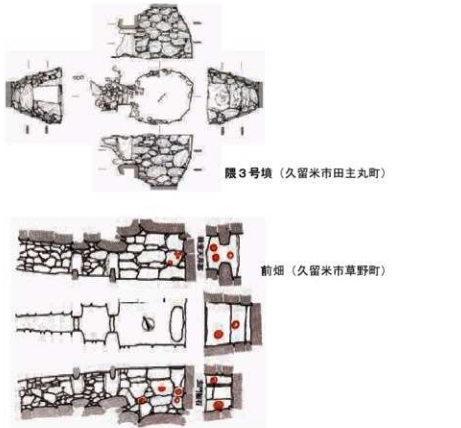
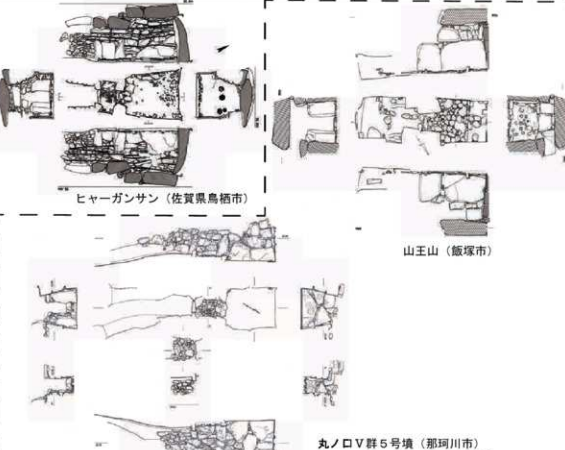
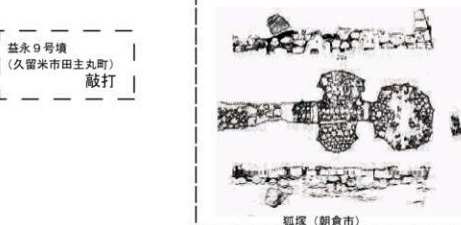
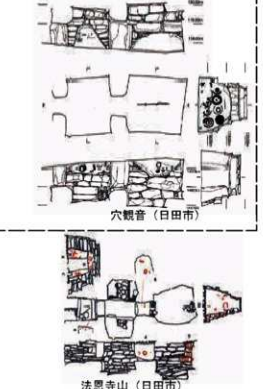
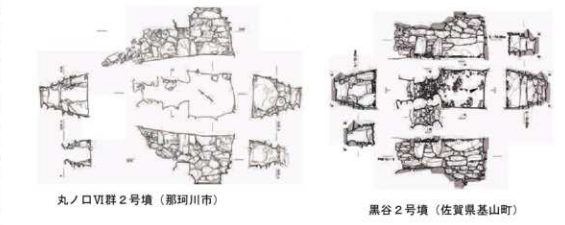
3) 敲打系装飾古墳について

福岡県内など周辺地域における敲打系装飾古墳の分布は、現在9基が確認されている（第16表）。築造時期が判明しているものはいずれも6世紀後半～7世紀初頭にかけての所産であり、12号墳と日田市穴観音古墳、大牟田市倉永古墳以外は、ほぼ円文・同心円文に限られる。穴観音古墳は、前室左右側壁に描いた円文と船の内側を陰刻し、さらに彩色を施す稀有な例で、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭の所産とされる。倉永古墳は石材のみが残存しているもので、墳形や石室構造、時期などは全く不明である。敲打による同心円文、線刻による船や人物が描かれた石材のみが残存している。穴観音古墳と倉永古墳以外は、円文・同心円文を単独（黒谷2号墳、益永古墳群9号墳）、若しくは複数（山王山古墳群、丸ノ口古墳群2・5号墳）描くのみで、12号墳のように格子状文や具象文は描かれた例は確認できない。円文・同心円文は、筑後川中流域以外でも主なモチーフとして描かれていることが指摘できるが、日岡古墳以来、壁面を埋め尽くすように描かれてきた連続三角文や具象文は姿を消している。これらの古墳を築造順に並べたものが第58図である。12号墳

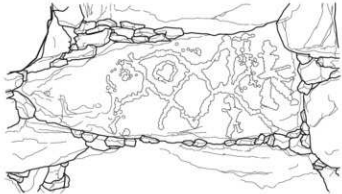
	筑後川中流域	筑後川上流域	周辺の装飾古墳
			 <p>弘化谷（八女郡広川町） 石屋形・石柵</p>
500	 <p>日岡（うきは市吉井町）</p> <p>石柵</p>  <p>下馬場（久留米市草野町）</p>	 <p>田代太田（鳥栖市）</p>  <p>五郎山（筑紫野市）</p>	 <p>桂川王塚（高穂郡桂川町）</p> 

第 48 図 装飾古墳変遷図① (1/100)

筑後川中流域	筑後川上流域	周辺の装飾古墳
 <p>寺徳 (久留米市田主丸町)</p> <p>益生田 (久留米市田主丸町)</p> <p>中原狐塚 (久留米市田主丸町)</p>		<p>0 10m</p>
 <p>西館 (久留米市田主丸町)</p> <p>仙道 (筑前町)</p> <p>益生田 12号墳 (久留米市田主丸町)</p> <p>ガランドヤ 1号墳 (日田市)</p>	 <p>ガランドヤ 2号墳 (日田市)</p>	<p>石屋形</p>  <p>成合寺谷 (みやま市)</p> <p>川島 11号墳 (飯塚市)</p> 

	筑後川中流域	筑後川上流域	周辺の装飾古墳
	 <p>隼3号墳 (久留米市田主丸町)</p> <p>前畑 (久留米市草野町)</p>		 <p>ヒヤーガンサン (佐賀県鳥栖市)</p> <p>山王山 (飯塚市)</p> <p>丸ノ口V群5号墳 (那珂川市)</p>
600	<p>益永9号墳 (久留米市田主丸町) 敲打</p>  <p>狐塚 (朝倉市)</p>	<p>敲打+彩色</p>  <p>穴観音 (日田市)</p> <p>法恩寺山 (日田市)</p>	<p>敲打</p>  <p>丸ノ口VI群2号墳 (那珂川市)</p> <p>黒谷2号墳 (佐賀県基山町)</p>

は出土遺物から6世紀後半の所産と考えられるが、前述の蔽打系装飾古墳よりも1段階古く位置付けることができる。一方、同時代の彩色系装飾古墳を見てみると、円文・同心円文や連続三角文、人物などを描く西館古墳などが築造されている。先に示したように、12号墳と西館古墳は描かれた人物に類似性が指摘でき、図文構成にも人物の



第51図 12号墳の装飾実測（縮尺任意）

ほか、円文・同心円文、連続三角文などが描かれている点が共通している。このことから、12号

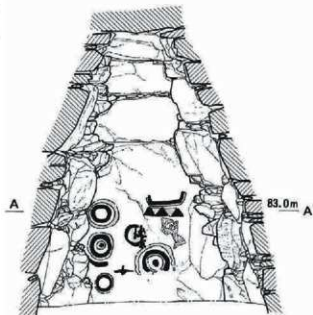
第16表 蔽打系装飾古墳一覧

名称	所在地	図文	墳丘・石室	備考
1 益生田古墳群A群12号墳	久留米市田主丸町益生田	格子状文、円文、人物	円墳、横穴式石室 複室	6c後半
2 益水古墳群9号墳	久留米市田主丸町益生田	円文	円墳、横穴式石室	不明
3 盾古墳	うきは市浮羽町朝田	同心円文	円墳、横穴式石室	不明
4 黒谷古墳群2号墳	佐賀県三養基郡基山町宮浦	同心円文	円墳、横穴式石室 単室	6c末
5 山王山古墳	飯塚市西徳前	円文	円墳 18 m、横穴式石室 複室	6c末
6 倉永古墳	大牟田市倉永	同心円文（蔽打） 人物、船（線刻）	石材のみ。詳細不明	不明
7 穴観音古墳	大分県日田市内河町	同心円文、船 以下彩色のみ 連続三角文、円文、鳥 人物、他	円墳 12 m、横穴式石室 複室 蔽打は前室の同心円、及び船の 縁取り	6c末～ 7c初
8 丸ノ口古墳群2号墳	那珂川市片瀧	同心円文、幾何学文	円墳、横穴式石室、複室	7c初
9 丸ノ口古墳群5号墳	那珂川市片瀧	同心円文	円墳、横穴式石室、複室	6c末

墳の装飾の成立には、西館古墳など彩色系装飾古墳の影響が極めて強いことが推測できる。12号墳において彩色系装飾古墳の影響を受けて成立した蔽打系装飾古墳は、その後の展開の中で図文の選択が生じ、少数の円文・同心円のみが描かれるように変化していったと考えることができる。



第52図 日岡古墳奥壁の装飾（1/100）



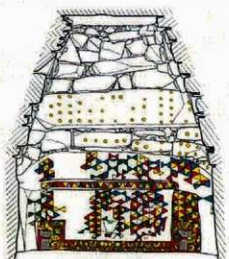
第53図 西館古墳奥壁の装飾（1/50）

(4) 益生田古墳群の特質

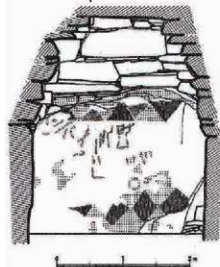
江戸時代の田主丸町には、1,053基の古墳が存在したとされ、県内外に所在する群集墳の中でもその密集度は極めて高い。現在は開発などにより1/3以下まで減少し、かつての環境や景観が失われているが、A～D群および益永支群あわせて現存数106基の古墳からなる益生田古墳群では比較的良好な保存環境を保っている。特にA群の円墳が墳裾を接するよう林立して営まれている状況は、景観も含め群集墳が営まれた当時の様相を伝えるものとして重要である。

旧筑後国竹野郡とほぼ同じ範囲が継承されている田主丸町内には、前方後円墳である田主丸大塚古墳を首長墓とし、装飾古墳を含む16カ所に代表される群集墳から構成される田主丸古墳群が展開する。これらの古墳群は、主体部である横穴式石室の平面形が「胴張り」を呈する点や、墳丘構造に「墳丘内列石」が確認されるなど、この地域特有の共通点を指摘できる。共通した環境と造墓技術を有した古墳群の範囲が、古代から領域の変化がない竹野郡内に広がっていることは、律令制下の筑後国竹野郡の領域設定に影響している可能性が高く、地方における古墳時代後期から律令体制成立期を考える上でも貴重な事例と言える。

『日本書紀』などの継体天皇21年（西暦527年）に起きたとされる筑紫君磐井の乱は、ヤマト王権による地方支配の在り方を変える大きな画期とされる。乱後、北部九州においては屯倉や部民の設置が進み、筑後地域にも畿内系豪族の支配が色濃く及んでいる（註3）。筑後国一ノ宮である高良大社の大祝には物部氏が見え、うきは市や田主丸町には巨勢氏との関連が想定される巨勢川が流れる。益生田古墳群の所在地付近には、二田物部氏との関連が想定される二田の地名が広がっており、古くから益生田古墳群と物部氏の関連が指摘されてきた（註4）。このように、益生田古墳群が所在する旧筑後国竹野郡は、畿内系豪族が進出した痕跡が色濃く残り、その影響は大きかったものと想定される。想像を逞しくするならば、当地域に共通する墳丘・石室構築法である「墳丘内列石」などは、これら畿内との関連



第54図 桂川王塚古墳奥壁の装飾 (1/60)

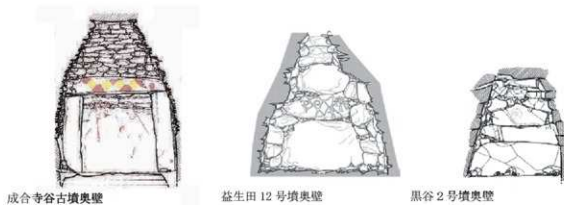


第55図 乗場古墳奥壁の装飾 (1/60)



第56図 田代太田古墳奥壁の装飾 (1/25)

図のように、益生田古墳群が所在する旧筑後国竹野郡は、畿内系豪族が進出した痕跡が色濃く残り、その影響は大きかったものと想定される。想像を逞しくするならば、当地域に共通する墳丘・石室構築法である「墳丘内列石」などは、これら畿内との関連



第57図 裝飾位置の共通例 (1/80)

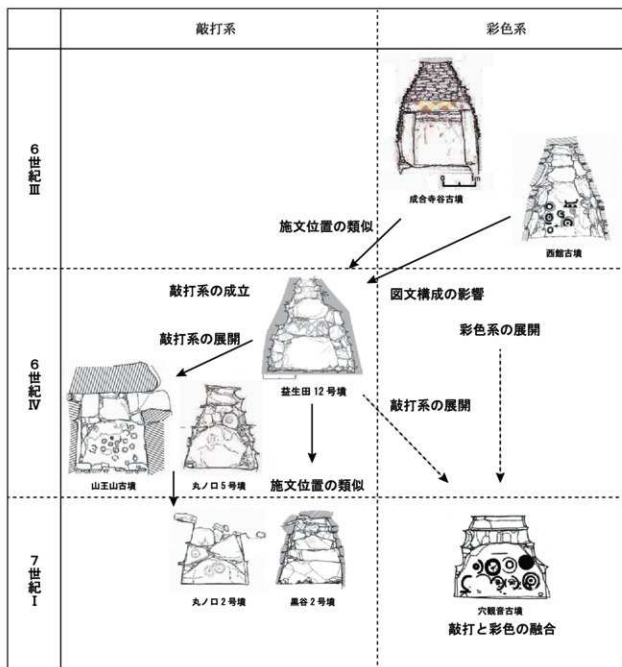
も想定することもできるのではないかと考えられる(註5)。その意味において、首長墓と群集墳が良好に保たれ、その分布範囲が律令制下の郡の領域に継承されている当地は、評の領域設定など古代支配構造の成立につながる古墳時代後期の政治的・社会的構造を考える上で極めて重要と言える。

また、田主丸古墳群では、これらの中に複数の裝飾古墳が含まれている状況が確認されている。筑後川流域における裝飾古墳の成立は、うきは市日岡古墳や桂川町桂川王塚古墳における図文構成や石室形態などの検討から、肥後地域北部勢力の拡大に起因するとの見解が示されている。首長墓である日岡古墳において採用された裝飾は、奥壁に均整な同心円文を主なモチーフとして描き、続く6世紀中頃には下馬場古墳や寺徳古墳などの中・大型円墳へ採用されていく。これらの古墳では、同心円文を主なモチーフとしながらも人や船などの具象文が多用され、図文構成に変化が伺える。その後、6世紀後半～末頃にかけて西館古墳や隈3号墳など群集墳中の小規模な円墳でも確認されるようになり、図文の減少や施文部位の縮小、施文方法に敲打や線刻(小郡市花立山穴観音古墳、朝倉市狐塚古墳、日田市穴観音古墳など)が加わる。益生田古墳群では、彩色による裝飾古墳と敲打による裝飾古墳が混在しており、裝飾古墳の展開を考える上で極めて重要な古墳群と言える。前述のように12号墳の敲打による円文・同心円文や格子状文、人物などを描く図文構成は、彩色による裝飾の図文構成や施文パターンと共通しており、敲打による裝飾古墳の展開を考える上で極めて重要である。すなわち、12号墳の敲打系裝飾は彩色系裝飾をもとに成立した可能性を強く示唆しており、日岡古墳以降の筑後川流域における裝飾古墳の展開の中で、図文構成や施文位置の変化に合わせ、施文方法も彩色から敲打が派生したことを示している。12号墳は裝飾古墳の展開の一つの指標となるものであり、現状ではこのような古墳群は見当たらない。

一方、裝飾古墳の立地に目を向けると、低標高の台地先端部などに単体で立地するもの(寺徳古墳、中原狐塚古墳、下馬場古墳、仙道古墳、狐塚古墳、塚花塚古墳など)と、群集墳の中にあっても山頂など他の古墳群と一線を画した場所に立地(筑前町観音山古墳など)する傾向が窺える。しかし、草野町吉木古墳群において昭和3年に実施された分布調査の成果では、複数の裝飾古墳が散在的に分布していたことが記録されており(現在は消滅)、裝飾古墳を複数含む群集墳も存在したことが知られている。うきは市吉井町屋形に所在する裝飾古墳群である屋形古墳群(珍敷塚古墳、原古墳、

鳥船塚古墳、古畑古墳)は、保存整備の一環で調査が実施されているが、その際、地域住民に聞き取り調査を行った結果、上記4基の「周りに古墳がたくさんあった」との証言を得ている。屋形古墳群でも群集集中に装飾古墳が散在していたことが窺える。益生田古墳群も、彩色系装飾古墳である益生田古墳(金子文夫氏調査、調査当時の名称)や敲打系装飾古墳である益永9号墳など、複数の装飾古墳が含まれていることから、吉木古墳群、屋形古墳群と同様に、複数の装飾古墳を含む群集墳であったものと考えられる。

敲打系装飾古墳が彩色系装飾古墳の影響を受けて成立したことを示す12号墳を含む益生田古墳群は、装飾古墳が下位の階層へ普及していく過程において、群集墳内の中小古墳において成立・展



第58図 敲打系装飾古墳の成立と展開 (1/100)

開したことを示していると言える。また、益生田古墳群の在り方は、当地域における群集墳への装飾の展開を示すとともに、田主丸大塚古墳を頂点とする地域社会の階層構造が装飾にも見える典型例とすることができよう。

(5) 益生田古墳群の価値

装飾古墳の多くは古くから盗掘により遺物が散逸し、発掘調査が実施されていないものも多いため、築造時期が判明するものは極めて少なく、時期比定に困難が伴う。しかし、12号墳の調査では、前室から6世紀後半～末頃の須恵器が元位置を保った状態で出土しているため、築造時期が比定できる装飾古墳として装飾古墳研究の中で時期的な定点となる。

また、現存していないものの、益生田古墳群中には彩色系装飾古墳の存在（益生田古墳）も確認されており、今回、12号墳が確認されたことで、6世紀後半～末頃にかけて、彩色系装飾古墳と敵打系装飾古墳が同一の群集墳中で併存することを確認することができた。田主丸大塚古墳を頂点とする田主丸古墳群を形成した有力集団が、装飾の有無や図文、さらにはその技法・配色などで集団の構成を表示していたことを物語る。

このような装飾古墳の展開過程が、益生田古墳群を含む田主丸古墳群で確認されることは、6世紀における首長墓と群集墳の在り方、装飾古墳の研究や筑後川流域における後期古墳の研究、北部九州における古墳時代後期社会の研究上、極めて重要である。

益生田古墳群は1980年代はじめに調査され、田主丸古墳群の保存への端緒となった遺跡でもある。採石や果樹園の開墾などによって現在まで古墳の破壊が進んできた状況下で、高校教諭であり郷土史家でもあった金子文夫氏をはじめ、浮羽工業高校による調査等、地元有志による記録も進められてきた。これまでの田主丸古墳群の調査、保存の取組を未来へとつなげ、田主丸古墳群の景観を維持していくためにも、益生田古墳群の一体的な保存が望まれる。

(6) 今後に向けて

調査中の令和5年7月10日、久留米市田主丸町では総雨量500ミリを超える雨が降り、大規模な土石流が複数発生するなど甚大な被害を受けた。小河川は土砂に埋もれ、溢れ出た土砂と水が周辺の家屋に多大な被害をもたらした。今回の調査地でも、西側を流れる川で土砂災害が発生し、調査中の古墳にも被害が及ぶところであったが、幸いにして難を免れている。

急峻な地形である耳納北麓が、土石流多発地帯であることは、今回の調査成果の一つである土石流の痕跡によって、その一端を垣間見ることができた。過去にも土石流などにより被災し、消滅した古墳があったことは想像に難くない。また、近年、管理が行き届かなくなり、放置される山林も増加し、今回の調査原因となった無謀な大規模掘削が再び発生するとも限らない。

このような環境下において古墳群を保護していくためには、文化財パトロール等の日常的な管理も然ることながら、まずは古墳群の全体像の把握が必要であると強く感じた。昨今は、GPSを用

いた技術の進歩等で、従前のような地図に手書きで記録する方法に比べ、より精度の高い調査を手軽に実施できるようになってきた。こうした技術を最大限に活用することは、特に山麓に展開する古墳群の状況把握にあたっては最良であろう。その上で群集墳本来の姿に近い景観を有し、保存環境が良好な益生田古墳群の調査を足掛かりとして、田主丸古墳群の全体像を把握することが保護の第一歩であり、古墳時代後期の社会構造や地域の歴史を解明することにも繋がっていくと考える。その意味でも、益生田古墳群を含む田主丸古墳群の計画的な保存・活用を進めていく意義は大きい。

【注】

- 註1 丸根植彦「円文・三角文の展開」『装飾古墳の展開』2002 理蔵文化財研究会
 註2 『黒谷・水呑古墳群』鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書(1)1993 佐賀県教育委員会
 註3 井上辰雄「大和政権と九州の大家族—その統治政策を中心として—」『九州歴史資料館開館十周年記念 大宰府古文化論叢』上巻 1983 吉川弘文館
 板橋和子「乱後の九州と大和政権」『古代を考える 磐井の乱』1991 吉川弘文館
 田中正日子「筑後に見る磐井の乱前後」『日本古代国家の展開』上巻 1995 思文閣
 酒井芳司「倭王健の九州支配と筑紫大宰の派遣」『九州歴史資料館研究論集 34』2009 九州歴史資料館
 註4 田中正日子「筑後古代史の展開(中)」『田主丸郡土史研究』創刊号 1987 田主丸町郷土会
 註5 福岡県築上郡上毛町の皿山古墳群の調査でも「墳丘内列石」や「土境」「土のう」を使用した特徴的な墳丘構築法が確認されている。報告書の中で、「土境」「土のう」を使用する古墳は近畿地方とのかかわりが深いことが指摘されていることを紹介されている(青木敬「墳丘構築技術に見られるふたつの面影」『東国の考古学』2013 群馬県考古学研究会)。

【参考文献】

- ・『片瀧山古墳群』那珂川町文化財調査報告書 第61集 2003 那珂川町教育委員会
- ・『全国の装飾古墳2 大分県の装飾古墳』1996 熊本県装飾古墳館
- ・『全国の装飾古墳3 福岡県の装飾古墳』1997 熊本県立装飾古墳館
- ・『全国の装飾古墳4 佐賀県・長崎県の装飾古墳』1998 熊本県装飾古墳館
- ・『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』2002 理蔵文化財研究会
- ・『田主丸古墳群』田主丸町文化財調査報告書 第1集 1984 田主丸町教育委員会
- ・『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』田主丸町文化財調査報告書 第12集 1999 田主丸町教育委員会
- ・『成合寺谷1号墳』瀬高町文化財調査報告書 第16集 2002 瀬高町教育委員会
- ・『成合寺谷1号墳 壁面装飾確認調査報告』瀬高町文化財調査報告書 第17集 2004 瀬高町教育委員会
- ・『西館古墳』田主丸町文化財調査報告書 第6集 1996 田主丸町教育委員会
- ・『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告23』2015 九州歴史資料館
- ・『福岡県遺跡等分布地図 浮羽郡編』1977 福岡県教育委員会
- ・『福岡県遺跡等分布地図 久留米市・小郡市・三井郡編』1979 福岡県教育委員会
- ・『益永古墳群—1号墳発掘調査報告書—』1969 浮工・考古学同好会
- ・Ⅱ. 益生田古墳群『平成28年度 久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書 第382集 2017 久留米市教育委員会
- ・『筑前国朝倉郡那塚古墳』福岡県文化財調査報告書第17輯 1954 福岡県教育委員会
- ・『立山山家跡群—八女山家跡群調査報告Ⅳ—総集篇—牛滝谷古墳群・桑場古墳』1972 八女市教育委員会
- ・『黒谷・水呑古墳群』鳥栖北部丘陵新都市関係文化財調査報告書1 1993 佐賀県教育委員会
- ・『穴巖音古墳』日田市文化財調査報告書第41集 2003 日田市教育委員会
- ・『ランドヤ古墳群—大分県日田市所在装飾古墳の調査報告—』1986 日田市教育委員会
- ・『史跡ランドヤ古墳 史跡ランドヤ古墳の保存整備に伴う調査報告書』2010 日田市教育委員会
- ・『山王山古墳 福岡県飯塚市西徳前所在遺跡の調査』飯塚市文化財調査報告書第45集 2014 飯塚市教育委員会
- ・『川島古墳』飯塚市文化財調査報告書第14集 1991 飯塚市教育委員会
- ・『国史跡 五郎山古墳 保存整備に伴う発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第57集 1998 筑紫野市教育委員会
- ・『弘化谷古墳—発掘調査及び保存整備報告書—』広川町文化財調査報告書第8集 1991 広川町教育委員会
- ・『国指定史跡 仙道古墳 発掘調査及び保存修理事業報告書』三輪町文化財報告書第10集 2001 三輪町教育委員会
- ・『若宮古墳群Ⅰ—月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳—』吉井町文化財調査報告書第4集 1989 吉井町教育委員会
- ・『ヒヤウガンサン古墳復元整備事業報告書』鳥栖市文化財調査報告書第73集 2004 鳥栖市教育委員会
- ・『田代太田古墳 史跡周辺の範囲確認調査』鳥栖市文化財報告書第81集 2010 鳥栖市教育委員会
- ・『とすの文化財解説シート 鳥栖市の装飾古墳』指定文化財シリーズNo.12 2007 鳥栖市教育委員会

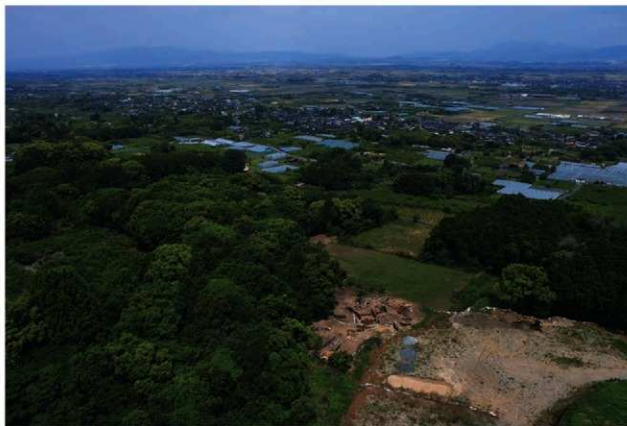
写真図版



(1) 益生田古墳群第5次調査地から西を望む



(2) 益生田古墳群第5次調査地から東を望む



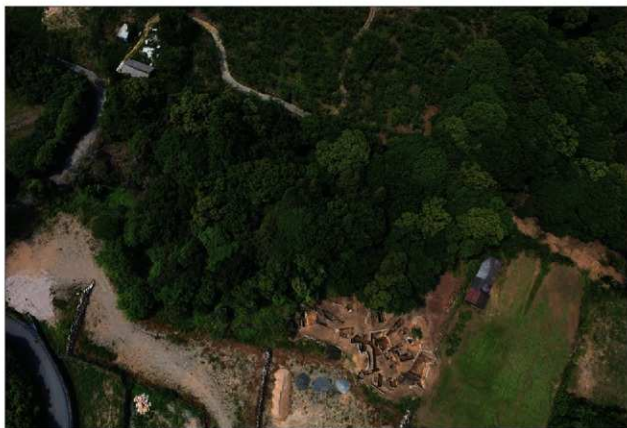
(1) 調査地周辺の状況 (南上空から)



(2) 調査地周辺の状況 (北上空から)



(1) 益生田古墳群第5次調査地全景（東上空から）



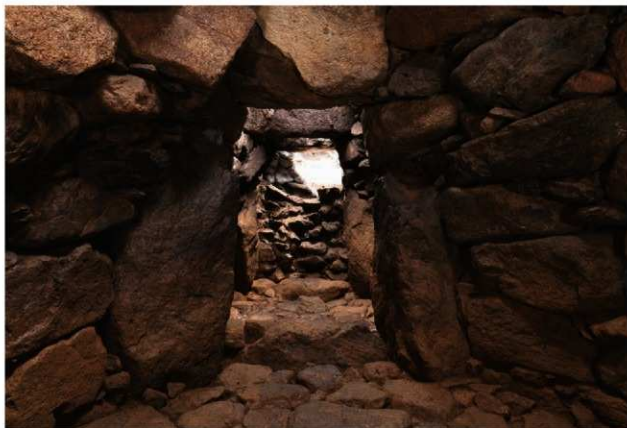
(2) 益生田古墳群第5次調査地全景（東上空から）



(1) 益生田古墳群第5次調査地北側（南東上空から）



(2) 益生田古墳群第5次調査地南側（東上空から）



(1) 12号墳玄室から入り口を望む(北東から)



(2) 羨門及び閉塞石の状況(北東から)



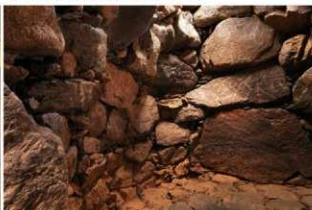
(1) 12号墳玄室左側壁上部（南から）



(2) 12号墳玄室右側壁上部（西から）



(3) 12号墳玄室左側壁玄門側（南東から）



(4) 12号墳玄室左側壁奥壁側（南西から）



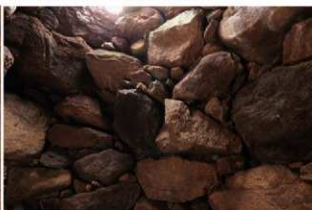
(5) 12号墳玄室床面検出状況（南西から）



(6) 12号墳装飾品出土状況（西から）



(7) 12号墳玄室床面玄門側検出状況（北東から）



(8) 12号墳玄室右側壁玄門側上部（南東から）



(1) 12号墳玄室前壁（北東から）



(2) 12号墳前室右側壁と玄門右袖石（北から）



(3) 12号墳前室右側壁上部（北から）



(4) 12号墳前室右側壁（北西から）



(5) 12号墳前室遺物出土状況（南東から）



(6) 12号墳前室左側壁上部（南東から）



(7) 12号墳前室出土遺物（南東から）



(1) 12号墳前室右側壁積み上げ状況（北西から）



(2) 12号墳玄門から開口方向を望む（北東から）



(3) 12号墳玄室左側壁玄門側（南東から）



(4) 12号墳玄室左側壁奥壁側（南西から）



(1) 12号墳1トレンチ(北から)



(2) 12号墳土層断面検出状況(北東から)



(3) 12号墳墓道と土石流堆積土(西から)



(4) 12号墳閉塞石(南西から)



(5) 12号墳2トレンチ墳丘内列石検出状況(南東から)



(6) 12号墳2トレンチ墳丘内列石と土層の状況(南から)



(7) 12号墳2トレンチ拡張部土層堆積状況(西から)



(8) 12号墳2・7トレンチ墳丘内列石検出状況(南東から)



(1) 12号墳3トレンチ墳丘内列石(東から)



(2) 12号墳3トレンチ北側列石(北から)



(3) 12号墳3トレンチ北側墳丘内列石(北東から)



(4) 12号墳4トレンチ墳丘内列石(北西から)



(5) 12号墳4・8トレンチ玄室床面検出状況(南西から)



(6) 12号墳4トレンチ土層堆積状況(南西から)



(7) 12号墳4トレンチ土層堆積状況(北から)



(8) 12号墳7トレンチ全景(南東から)



(1) 12号墳7トレンチ墳丘内列石検出状況(南東から)



(2) 12号墳7トレンチ土層堆積状況(南東から)



(3) 147号墳8トレンチ墳丘内列石を上から見る(北から)



(4) 147号墳8トレンチ墳丘内列石(南から)



(5) 147号8トレンチ墳丘内列石下の盛土(南西から)



(6) 147号墳8トレンチ土層堆積状況(南東から)



(7) 12号墳8トレンチ櫛石の堆積状況(北西から)



(8) 12号墳9トレンチ墳丘内列石検出状況(南から)



(1) 12号墳9トレンチ墳丘内列石検出状況(南から)



(2) 16号墳閉塞石検出状況(北から)



(3) 16号墳墓道(北から)写真左の黒色土が墓道の痕跡



(4) 16号墳墓道(北東から)写真右から左に堆積している黒色土



(5) 16号墳墓道の残欠(西から)写真右中央の黒色土



(6) 16号墳11トレンチ墳丘内列石検出状況(南から)



(7) 16号墳玄室床面検出状況(南西から)



(8) 16号墳11トレンチ墳丘内列石検出状況(南東から)



(1) 16号墳玄室床面玄関側検出状況 (北東から)



(2) 16号墳装飾品出土状況 (西から)



(3) 16号墳の櫛石と墳丘内列石 (南から)



(4) 16号墳10トレンチ墳丘内列石 (南から)



(5) 16号墳10トレンチ土層堆積状況 (南から)



(6) 16号墳玄室奥壁 (北から)



(7) 16号墳玄室奥壁側床面 (北から)



(8) 16号墳玄室玄関側床面 (南から)



(1) 16号墳羨道(南から)



(2) 17号墳11トレンチ右側壁上部(西から)



(3) 17号墳土層堆積状況(北西から)



(4) 17号墳11トレンチ開口部列石(西から)



(5) 17号墳10トレンチ墳丘内列石(北から)



(6) 17号墳石室検出状況(東から)



(7) 17号墳石室検出状況(北東から)



(8) 17号墳前室完掘状況(東から)



(1) 17号墳前室右側壁（北東から）



(2) 17号墳奥壁から玄室右側壁（北西から）



(3) 148号墳墳丘内列石（南西から）



(4) 148号墳墳丘内列石東側（南から）



(5) 148号墳玄室床面検出状況（南西から）



(6) 148号墳墳丘内列石から開口部列石（南西から）



(7) 148号墳15トレンチ閉塞石検出状況（北東から）



(8) 148号墳前底部検出状況（北から）



(1) 148号墳主体部（西から）



(2) 148号墳玄室残欠検出状況（北から）



(3) 148号墳玄室残欠検出状況（東から）



(4) 148号墳玄室左側壁奥壁側（南西から）



(5) 148号墳玄室奥壁破壊状況（西から）



(6) 147号墳12トレンチから主体部（南から）



(7) 147号墳12トレンチ列石（南西から）



(8) 147号墳12トレンチ土層堆積状況（南西から）



(1) 147号墳 12 トレンチ前庭部 (南西から)



(2) 147号墳 12 トレンチ閉塞石検出状況 (南から)



(3) 12号墳 13 トレンチ土層堆積状況 (北西から)



(4) 益永9号墳敲打による装飾 (石山勲氏提供)



(5) 144号墳 (南西から)



(6) 149号墳 (北西から)



(7) 154号墳 (北東から)



(8) 151号墳 (北西から)



(1) 150号墳 (東から)



(2) 145号墳 (東から)



(3) 13号墳 (南西から)



(4) 158号墳 (南東から)



(5) 14号墳 (西から)



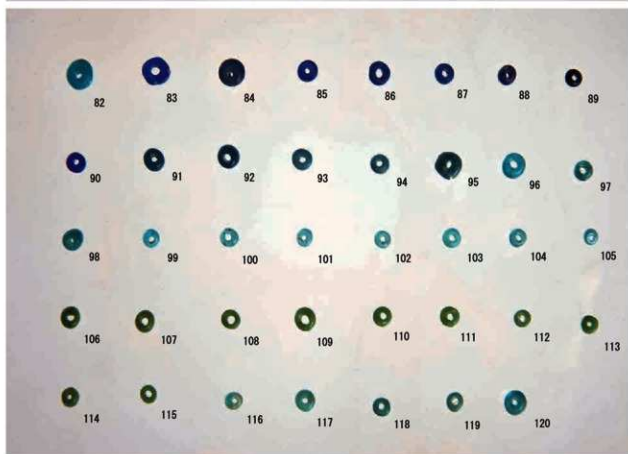
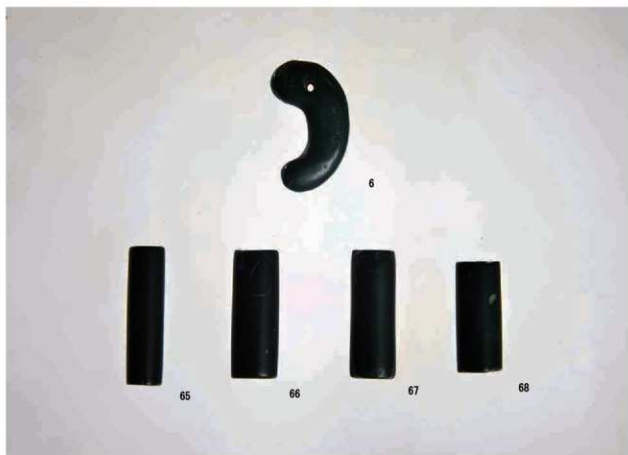
(6) 160号墳 (西から)

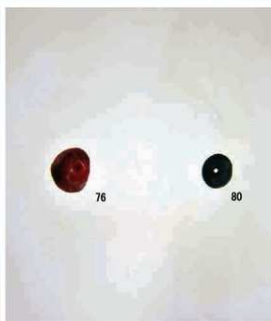
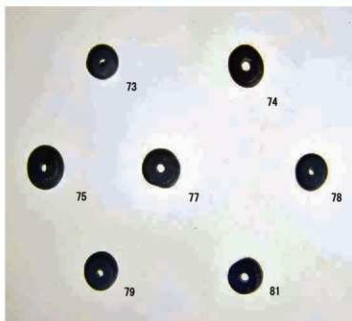


(7) 159号墳 (西から)



(8) 18号墳 (西から)







出土遺物③



出土遺物④



出土遺物⑤





出土遺物の



出土遺物⑤

報 告 書 抄 録

ふりがな	たぬしまるこふんぐん ますおだこふんぐんえーぐんのちようさ
書 名	田主丸古墳群Ⅲ ー益生田古墳群A群の調査ー
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第449集
編著者名	江島 伸彦編・白木 守・神保 公久・廣木 誠
編集機関	久留米市 市民文化部文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.lg.jp
発行年月日	2024（令和6）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ますおだこふんぐん 益生田古墳群 だい じちようさ 第5次調査	くまめしたぬしまるまち 久留米市田主丸町 ますおだ 益生田 2273-5	40203	640081 ～ 640189	33° 19' 16"	130° 41' 23"	20210415 ～ 20240328	14,400 m ²	採石
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
益生田古墳群 第5次調査	古墳	古墳時代	古墳 5基		須恵器、土師器、 勾玉、管玉、切子玉、 丸玉、小玉、鉄鏃、 刀子、鉄斧、弥生 土器、縄文土器		敲打系装飾古墳を確 認。旧竹野郡域で最も 残存状況が良く、90基 程が残る古墳群である。 昭和40年代の調査では 194基との記録がある。	
要 約								
古墳時代後期、現存、90基程を数える群集墳で、耳納北麓の標高60m程の扇状地先端部から200mを超える山腹までの間に分布している。本調査は、益生田古墳群の中で、比較的標高の低い地点に展開するA群の一部を調査し、新規の発見である敲打による装飾古墳を含む、24基を調査の対象としている。また、過去には彩色の装飾古墳の存在も知られる。A群は、6世紀後半から7世紀にかけて築造され、径10から16m程の円墳で構成されている。								
土木工事の届出日		令和3年4月6日			遺物の発見通知日		—	

田主丸古墳群Ⅲ

-益生田古墳群A群の調査-

久留米市文化財調査報告書 第449集

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市

市民文化部文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社